

草戸千軒町遺跡

— 第18～20次発掘調査概要 —

広島県教育委員会
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

「草戸千軒町遺跡—第18~20次発掘調査概要—」

正誤表

頁	行数他	誤	正																
2	下から12	1966年	1965年																
16	下から7	S K1007	S D1007																
16	下から4	古銭	「古銭」トル																
18	上から9	S K999	S X999																
18	上から10	各種構	各遺構																
23	上から7	S X1009	S K1009																
25	第3表	土師質土器 鍋「E」	G																
25	下から19	E	G																
30	上から1	80m	70m																
32	第13図	墓域	墓域																
33	上から3	I~II期	「~II」トル																
36	下から7	序々	徐々																
37	上から10	III期	II期																
37	上から13	S A1068	S X1068																
37	上から13	は S D1068があり	「は…リ」トル																
44	上から16	S K1101	S E1030																
44	上から17	S K1020	S K1101																
46	S E980	土師質土器「杯A II」	杯A I																
48	S K990	<table border="1"> <tr> <td rowspan="3">陶器</td> <td>壺</td> <td>53</td> <td rowspan="3">陶器</td> <td>壺</td> <td>53</td> </tr> <tr> <td></td> <td>54</td> <td></td> <td></td> <td>54</td> </tr> <tr> <td>甕</td> <td>55</td> <td></td> <td></td> <td>55</td> </tr> </table>	陶器	壺	53	陶器	壺	53		54			54	甕	55			55	
陶器	壺	53		陶器	壺		53												
		54						54											
	甕	55				55													
51	S E1145	<table border="1"> <tr> <td rowspan="3">土師質土器</td> <td>椀A I</td> <td>137</td> <td rowspan="3">土師質土器</td> <td>椀A I</td> <td>137</td> </tr> <tr> <td>椀B</td> <td>138</td> <td>椀B</td> <td>138</td> </tr> <tr> <td>花瓶</td> <td>139</td> <td>花瓶</td> <td>139</td> </tr> </table>	土師質土器	椀A I	137	土師質土器	椀A I	137	椀B	138	椀B	138	花瓶	139	花瓶	139			
土師質土器	椀A I	137		土師質土器	椀A I		137												
	椀B	138			椀B		138												
	花瓶	139	花瓶		139														
53	・土製品 159	S D1068	S X1068																
53	石製品類 78	縫込み	刺込み																
56	付2古銭一覧表	天聖元宝 第19次「O」	1																
61	上から14	代ではないが	代ではない ^ガ																
63	上から6	S E990	S K990																
63	上から15	VI期	IV期																
63	上から17	V期	V・VI期																
67	上から8	25%	21%																
67	上から8	20%	13%																
69	上から3	東側	西側																

序

草戸千軒町遺跡の本格的な調査も5年目をむかえ、埋れた中世の町の様相も次第に明らかになってまいりました。調査はこれまで遺跡包囲中州の東岸を南北に進めてきましたが、1975年度に南端部まで終了したのにともない、新たに北部へ調査区を移し、東西に横断して発掘する計画に着手しています。

さて、ここに1976年度に行なった調査の概要と研究所の1年間の歩みをまとめることができました。柵と溝に囲まれた町の様相や、生活用具や信仰関係用具等の多量な出土遺物から、中世都市の構造や庶民生活の一端を明らかにしたものです。まだ調査の概略をまとめたにすぎませんが、今後の研究の進展とともに更に大きな成果をあげができるでしょう。御活用いただければ幸いです。

ところで、懸案でありました木製品の保存問題も、本年3月にPEG含浸処理装置を設置することができ、新しい段階をむかえました。発掘調査の進展もさることながら、出土遺物の保存管理にも最善の努力を払わなければなりません。まことに遅々とした歩みではありますが、調査研究の面でも、また施設の面でも一歩一歩前進しております。これからは次の大きな課題である研究・保存・公開が一体となって行なわれるような施設、資料館なり博物館の建設に取り組まなければならぬと思っています。一層の御指導・御鞭撻をお願いする次第です。

なお、最後になりましたが調査研究の進展にあたっては、文化庁ならびに調査研究指導委員会の暖かい御指導、福山市教育委員会・福山市文化財協会による多大な御援助、各地の研究機関・研究者からの各面にわたる御支援、さらには建設省福山工事事務所の御協力をいただきました。また、困難な調査にたずさわってくださった作業員の皆さんの御協力は云うまでもありません。

総ての成果はこうした多くの方々の御指導と御協力によるものです。ここに、関係各位に対し深湛なる謝意を表する次第です。

1977年11月30日

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所長

松下正司

目 次

序

Iはじめに	(1)
II既往の調査	(4)
1 調査・研究のあゆみ	(4)
2 本年度調査区周辺の状況	(5)
III調査の概要	(6)
1 第18次調査	(6)
A 遺構	(6)
B 遺物	(9)
C 小結	(13)
2 第19次調査	(15)
A 遺構	(15)
B 遺物	(18)
C 小結	(22)
D SE1015井戸	(24)
3 第20次調査	(29)
A 遺構	(29)
B 遺物	(37)
C 小結	(44)
付1 掘載遺物観察表	(46)
2 古銭一覧表	(56)
IV遺構・遺物の検討	(58)
1 居位と遺構の年代について	(58)
2 井戸について	(59)
3 土器の縦年について	(62)
4 土器の使用状況	(66)
Vおわりに	(69)
付 既往の調査成果一覧表	(71)
付録 調査・研究・普及活動年報	(73)
発掘調査組織	(76)

図版目次

図版 1 草戸千軒町道路北半遠景	図版14 檜出遺構 X
図版 2 第18次調査区全景	図版15 遺物出土状況
図版 3 第19次調査区全景	図版16 土器類 I
図版 4 第20次調査区全景	図版17 土器類 II
図版 5 檜出遺構 I	図版18 土器類 III
図版 6 檜出遺構 II	図版19 土器類 IV
図版 7 檜出遺構 III	図版20 土器類 V
図版 8 檜出遺構 IV	図版21 土器類 VI
図版 9 檜出遺構 V	図版22 土製品類・金属製品類・石製品類
図版10 檜出遺構 VI	図版23 木製品類 I
図版11 檜出遺構 VII	図版24 木製品類 II
図版12 檜出遺構 VIII	図版25 木製品類 III
図版13 檜出遺構 IX	図版26 木製品類IV・古銭

挿図目次

第1図 第18次調査主要遺構実測図	第12図 S B1060建物実測図
第2図 弥生土器実測図	第13図 S K1070墓壙実測図
第3図 第18次調査出土遺物実測図 I	第14図 S E1055井戸実測図
第4図 第18次調査出土遺物実測図 II	第15図 第20次調査井戸実測図
第5図 第19次調査出土遺物実測図 I	第16図 S E1130・1131井戸実測図
第6図 第19次調査出土遺物実測図 II	第17図 第20次調査出土遺物実測図 I
第7図 第19次調査出土遺物実測図 III	第18図 第20次調査出土遺物実測図 II
第8図 S E1015井戸実測図	第19図 第20次調査出土遺物実測図 III
第9図 S E1015井戸出土土器実測図 I	第20図 第20次調査出土遺物実測図 IV
第10図 S E1015井戸出土土器実測図 II	第21図 土師質土器編年図
第11図 S A003櫛・S X1095門実測図	第22図 井戸の名称

図表目次

第1表 S K990出土土器法量表	第5表 S E1055出土土器個体別数量表
第2表 S K990出土土器個体別数量表	第6表 井戸形態分類表
第3表 S E1015出土土器個体別数量表	第7表 井戸地域別数量表
第4表 S E1015出土土器法量表	第8表 遺構編年表

付図目次

付図 I 草戸千軒町道路発掘経過・地区割図	付図 IV 第18・19次調査区実測図
付図 II 第18~20次調査区周辺実測図	付図 V 第20次調査区実測図
付図 III 第18~20次調査区土層図	

草戸千軒町遺跡

— 第18~20次発掘調査概要 —

I はじめに

草戸千軒町遺跡の発掘調査は、1961年に遺跡の確認調査が開始されて以来、福山市教育委員会、広島県教育委員会によって計8次にわたって行なわれてきた。ところが1971年、建設省より芦田川に河口堰を建設し、中州を撤去する計画が提示され、また一方では常に流水に洗われ、年々流失している現状もあって、1973年、広島県教育委員会は遺跡の重要性にかんがみ現地福山市に調査機関(現)『広島県草戸千軒町遺跡調査研究所』を設置した。調査は遺跡包蔵中州63,000m²を年間4,000m²ずつ計15年で終了する大規模な計画で開始し、1975年までの3年(9~17次調査区)で、当初の計画であった"自然流水による破壊度の最も大きい中州東岸を権断する調査"を終了した。

1976年度の調査はこれに続くもので、1975年12月9日に開催した第4回草戸千軒町遺跡調査研究指導委員会の指導・助言に基づき、中州北部の第8次調査区に隣接し、かって表土を除去し流失の危険も考えられる地域、すなわち大地区表示の8LAB・BB・CB・CCに含まれる地域、計4,400m²の調査を計画し、実際にはさらに8LAA区の流水中に露出するSE1015井戸の調査も加えて実施した。この区域はかって第3次調査において検出した石敷道路SC001の西側延長部にあたることから、遺跡の核心部にふれるものとその成果が期待されていたが、CC区南半部を除いては上部遺構がかなり削平、流失しており、今後の調査研究に対し必ずしも明るい材料のみを提供することとはならなかった。

なお、発掘調査に重大な影響を及ぼす建設省の河口堰建設は1976年12月に完成した。しかし、まだ湛水が行なわれていないため、今年度の調査には大きな影響はみられないが、湛水予定の1977年4月以降については支障がみられるものと予想される。なお、このことについては1974年に交した覚書に基づき、1976年11月に建設省と広島県教育委員会の間に補償契約がなされ、建設省より42,472,000円が支払われ、今後の調査に当たっての対応費用として漸次活用することになっている。なお、この補償費は防水のための築堤ならびに排水溝を設置する費用で、完掘予定の1987年までの総経費が算定され一括支払われたものである。遺跡が河床に埋れているため予測できない事態の発生もあり得るが、これで一応解決策が提示されたといえよう。今後に重大な支障のないことを期待したい。

さて、本年度の調査経費、期間、面積は次のとおりである。

調査総経費 1976年度 36,494,310円

研究所管理運営費 14,494,310円 (ただし、PEG含浸処理施設設置費等10,833,000円を含む)

調査期間及び面積

調査次数	調査地区	期間	調査面積
第18次	8LAB	1976年4月5日～6月11日	1,440m ²
	8LBB		
第19次	8LBB	1976年7月19日～10月18日	1,200m ²
	8LCB		
第20次	8LCB	1976年10月19日～12月25日	1,650m ²
	8LCC		

以上の調査は広島県草戸千軒町遺跡調査研究所が実施したが、調査研究の円滑な推進には、草戸千軒町遺跡調査研究指導委員会、文化庁、奈良国立文化財研究所、福山市教育委員会、建設省中国地方建設局福山工事事務所などをはじめとする多くの機関、ならびに作業員の方々から多大なご指導、ご協力をいただいた。

また、福山市文化財協会からは普及活動費(100万円)を御援助いただき、調査研究ニュースの発刊、調査概要の増刷、文化財教室外米講師謝金等に活用させていただいた。とくに明記して謝意を表したい。

本概要の作成は所員一同の整理、検討によるもので、執筆は小都隆(I, II-2, III-3-A・C, IV-1・2, V), 鹿見啓太郎(III-1-B), 志道和直(III-2-B・D, IV-3・4), 志田原重人(II-1, III-1-A・C), 錦原芳秀(III-2-A・C・D), 福井万千(III-3-B), 松下正司(校閲)が分担し、松下の指導のもとに小都が編集した。遺構、遺物の写真撮影は福井・鹿見が行なった。また、図版の作成には糸井崇雄の協力があった。

注

- (1) 福山市教育委員会『草戸千軒町遺跡－遺跡編－』1966年 (第1・2次調査)
福山市教育委員会『草戸千軒町遺跡－遺物編－』1966年 (第1・2次調査)
福山市教育委員会『草戸千軒町遺跡1965年度調査概報』1966年 (第3次調査)
広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡1968年度発掘調査概報』1969年 (第4次調査)
広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡1969年度発掘調査概報』1970年 (第5次調査)
広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡1970年度発掘調査概報』1971年 (第6次調査)
広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡1971年度発掘調査概報』1972年 (第7次調査)
広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡1972年度発掘調査概報』1973年 (第8次調査)
広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡－第9・10次発掘調査概要－』1974年
広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡－第11～14次発掘調査概要－』1976年
広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡－第15～17次発掘調査概要－』1977年
- (2) 草戸千軒町遺跡の地区割については『草戸千軒町遺跡－第9・10次発掘調査概要－』に示したとお

りである。大地区表示は南北・東西両基本線から50mごとのグリッドとしそれぞれのアルファベットで示し、小地区割は東西・南北方向とも基本線を01と定め東と南へ2mごとに02・03・04~24・25とついた。

なお遺構、遺物の表示記号も前回と変りない。

草戸千軒町遺跡調査研究所における遺構・遺物標示記号表

S — 遺 構					R — 遺 物				
A	橋・土堤・塚	G	苑	池	L	漆	器	Q	石 製 品
B	建 物	H	広	場	M	金 属 器	T	瓦 ・ 塚	
C	道 路	K	土	壙	N	自 然 遺 物	U	織 織 製 品	
D	溝 戸	X	そ の 他		O	陶 磁 器	W	木 製 品	
E	井 戸				P	土 製 品	Y	そ の 他	

※木製品のうち墨呑のあるものはXを付した

II 既往の調査

1 調査・研究のあゆみ

江戸時代の地誌に記された「草戸千軒」の町跡の調査も、最初は1928年に始まった芦田川の河川改修工事や、出水の際に出土し採集された遺物の研究にとどまり、本格的な調査は61年・62年および65年に実施された「年々流失する遺跡と遺物の保存を兼ねた」調査を待たなければならぬ。その後67年の芦田川の一級河川昇格に伴い、掘削工事による遺跡の破壊ならびに河水の浸食による遺跡の流失に対処して、68年以降毎年調査を実施してきた。ところが、71年には建設省から「芦田川河口堰の建設に関する基本計画」が示され、新たな局面をむかえることになった。そこで73年現地福山市に遺跡調査所(現研究所)を開設し、15年にわたる発掘調査計画を立て、大規模な調査を実施しており、第17次調査終了時まで遺跡包蔵中州の3削弱の調査を完了している。

次に過去17次にわたる調査の概況をみると、

第1次～第3次調査は、遺跡の性格・遺物の包含層位・年代等を明らかにするために行なわれたものであるが、この調査の結果、柱穴・杭列・石敷道路・溝などが検出され、鎌倉時代から室町時代にかけての中世の遺構の存在が明らかになった。第4次調査は、中州東側の高水敷を調査し、柱穴・土壙・井戸を検出し、中州の外側にも遺跡の広がっていることが明らかになった。第5次調査は、中州東側の小中州と高水敷を調査した。調査の結果、井戸や溝状遺構の存在が明らかとなり、特に溝状遺構から出土した木札から市場町としての機能を備えていたようと思われた。第6次調査は、当初予定していた小中州の調査が台風の影響もあって調査不能となつたため、中州周辺の井戸の調査を実施。内部から人形や卒塔婆・鍔先・鍋の把手などが出土した。第7次調査は、中州東側北部で行ない、柱穴・土壙・埋葬土壙・井戸・溝を検出した。第8次調査も引き続き中州東側北部で行ない、江戸時代の池を検出した。また上下二層の遺構面の存在を明らかにし、第3次調査区の石敷道路などとの比較検討を行なった。

73年以後は調査研究指導委員会の指導のもと、自然流水による破壊の危険度が最も大きい中州東側を幅30mで縦断調査することにし、73年度は第8次調査区に南接した中州東側中央部を第9～11次調査として実施した。その結果、池・井戸・溝・土壙・欄・建物および無数の柱穴が検出され、遺跡は奈良時代末期から江戸時代初期までつづいていること、調査地点によっては遺構の残存状況にかなり相違のあることが明らかとなった。74年に実施した第12～14次調査は、前年に引き続いて中州東側中央部で行ない、柱穴・欄・土壙・溝・井戸などを検出し、前年度と同様に溝と欄に囲まれた町割の一端が明らかになった。75年には、第15～17次調査として中州東側南部および中州の南に位置する三角形の小島を調査した。幅10～16m・南北の長さ100mにも及ぶ環濠状の大溝をはじめ、土壙・欄・池・井戸などを検出し、日用雑器・生産用具・

信仰に関するものなど多種多様の遺物が出土した。なかでも「明応二年」銘の卒塔婆や墨書き木札の出土は、文献史料に乏しい本遺跡解明の一助となるであろう。

2 本年度調査区周辺の状況

本年度の調査区は中州北部の8 LAB～CC区で、これに東接するCB・DB・DC区についてはすでに第3・7・8次調査で明らかにされている。以下、造構の保存状態が比較的良好で層位的に複雑な状況を示す第20次調査区の東側、DC区を中心にその概要を記すこととする。

DC区一帯は、かって第3次調査の際石敷道路を検出し、草戸千軒町の中心部として脚光をあびた地域で、その後の第7～10次調査で道路のみならず櫛・建物・土壌・井戸・池など多数の造構が明らかにされている。造構は北から南へ下り東方へほぼ直角に曲る石敷道路(SC001・SC005)を中心周囲に広がるが、SC001の南にはそれに沿ってSA003がほぼ東西に延び、それから南へはほぼ直角にSA008・SA010の2条の櫛が延び、さらに東にはやや方向が異なるがSA015がみられる。これらの道路、櫛の間には無数の柱穴があり、建物・石敷・土壌・井戸・池などもみられるが、時期的には長期間のものを含んでおり、それに伴う層位・切合いも複雑な状況を呈し、各時期の造構が混在して検出されている。また造構の残存状態は地域により異なり、DC区北半以北では上層といわれたもの(第20次調査では黒色土と呼ぶ)がほとんど削平されており、井戸などを除いてはほとんど残っていない。

次に第3・7・8次調査の概要を示された上層・下層ならびに時期が異なるとされる主要な造構を時期毎に抽出してみよう。最も古い時期と考えられる造構には柱穴、土壌などがあるが、面的なつながりはないようで広範に散在している。次いで下層造構とされる東西櫛SA003ならびにそれに併行する南北溝などが作られ、下層柱穴建物、井戸も若干みられる。その後SA008・SA010などの南北櫛ができるが、これら全面をおおう形で砂、黒色土が薄く堆積し、上層造構と呼ばれる石敷が行なわれ、上層柱穴建物、井戸などが作られたようである。この他SG030のように後世、他の造構とは全く無関係に埋った池などの造構もある。

このように特にCC・DC区では櫛による区画、並びにそれを含んだ複雑な層位関係があり、今回より細かな層位の検討が必要とされよう。また第19次調査区に隣接するBC区については既往の調査区ではかなり上面が削平されているが、流路にそって南北に枝状に造構面が残るということも注意されており、今回の調査でどういった成果があがるか期待される。

注

- (1) SA008・SA010・SA015はかって第3次調査の際には部分的な発掘調査のため建物G1・G2・G3の区画と考えられていた。福山市教育委員会「草戸千軒町造跡1965年度調査概報」1966年
- (2) 広島県教育委員会「草戸千軒町造跡1972年度発掘調査概報」1973年
- (3) 注(2)と同じ

III 調査の概要

1 第18次調査

第18次調査区は中州北西部の、第8次調査区の西側に設定し、4月5日から6月11日までの約2ヶ月間にわたって調査した。調査区は大地区表示の8LAB・BBに含まれ、小地区割の8LAB1906を北西端として東へ36m・南に40mの約1,440m²である。

堆積土層は、河川改修後の再堆積層である表土砂層下に灰褐色土・暗灰色粘土の順に重なり、最下層は湧水灰白色砂層となっており、各土層は調査区全域にわたってほぼ平行に堆積している。調査区西半では、表土砂層の下に東西6m×南北14mの範囲にわたって、こぶし大の河原石や50~60cm大の角礫の混じった砂層の広がりがみられたが、下部の灰褐色土との間に川砂がみられたことから、角礫などは本来この地域にあったものではなく、河川改修の際に集積したものとも思われる。また調査区南部のSX976とその南では表土砂層の下に黒褐色砂質土層がみられた。この下には本来SX976に伴う施設があったものと思われるが、腐蝕していた。なお黒褐色砂質土層は堆積の状況から判断するかぎり、二次堆積した形跡はなく、本来からこの地点に存在していたと思われる。

本調査区の遺構面は当初の予測に反してかなり削平されていたため、遺構の残存状態が悪く、井戸5、井戸状遺構1、曲物埋設遺構3を検出したにすぎない。

検出した遺構は上部が削平されているため断定はしかねるが、灰褐色土層ないしそれより上層から掘込まれているものと思われる。

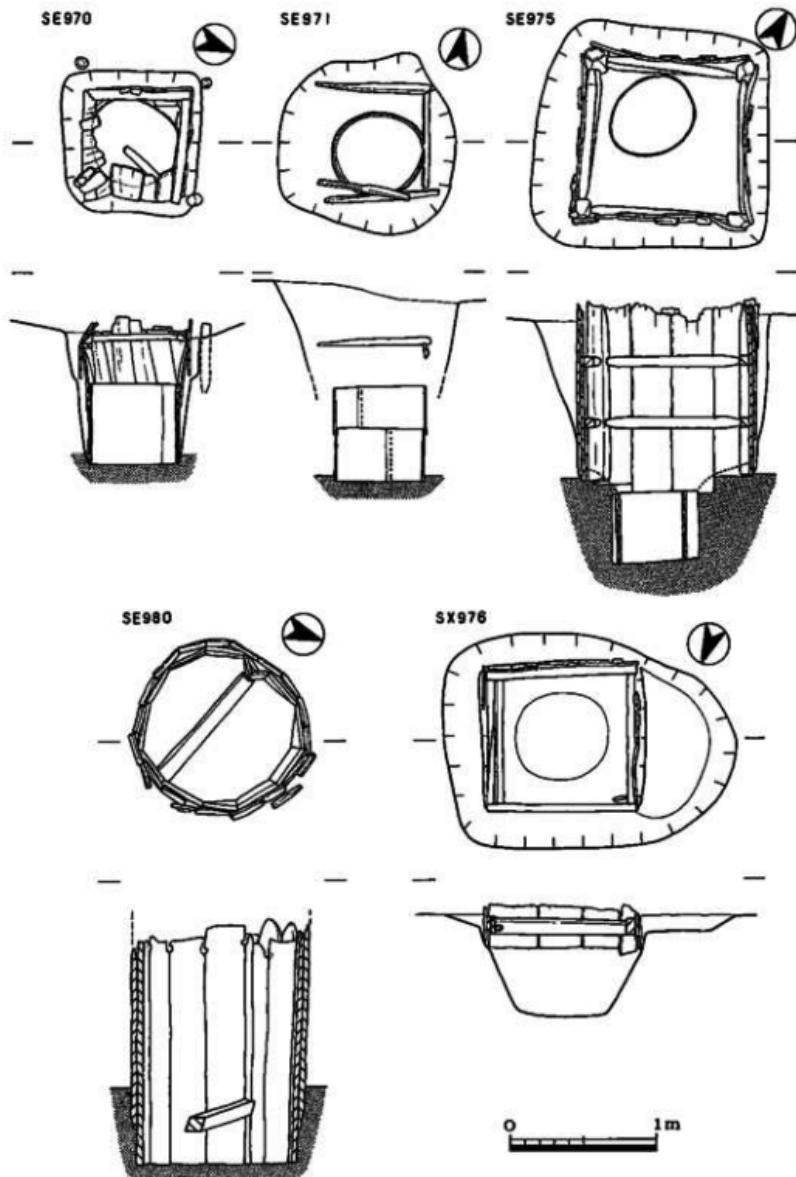
遺物は、井戸を中心に土師質土器・陶磁器・各種木製品・わら草履などが出土した。

A 遺構

遺構面の削平により本次調査では井戸5、井戸状遺構1、曲物埋設遺構3を検出したにすぎない。

a 井戸

SE970——調査区北部で検出されたもので東北方約4mにはSE971が存在する。一辺約1.0mの方形の掘方のほぼ中央には、一辺73cmの木組方形井側があり、内部底には井筒として径60cm・高さ55cmの曲物を据えている。掘方には井側と井筒の境あたりまで粗砂が、さらに湧水灰白色砂層までは黒色粘質土が埋まっている。内部には粗砂を含んだ暗灰色粘土が井筒下底面までつまっていた。井側の外側の四隅には径7~8cmの杭が打込まれていたが、下部しか残存していないため、どのような施設であったかは明らかでない。井側は方形横棟の外側に縦板をならべ、板の接合部外側に添板をあてたものである。さらに土砂の流入を防ぐために縦板下部と曲物との間に薄い板を斜めに添えている。なお、薄い板を固定するために、井側の四隅とこの板



第1図 第18次調査主要遺構実測図 (H : 1.5m)

との間には石をつめている。このような構造の井戸は本遺跡においては初見のものである。土師質土器碗のほか漆器や魚鱗・貝殻・種子(瓜・桃・梅・米・麦)が井戸内から出土した。

SE971—径1.2mのいびつな円形をした掘方のほぼ中央には、一辺78cmの木組方形井筒があり。井筒内には黒色砂と暗灰色粘土の二層の埋土が、掘方には青灰色粘土がみられた。縦板は抜きとられ、保存状態は良好とはいえない。下部には井筒として2段の曲物が据えてあった。曲物は上段が径62cm・高さ30cm、下段が径58cm・高さ37cmを測り、入子の形をとっている。土師質土器碗や木製ヘラが井戸内から出土した。

SE975—調査区西側中央で検出した木組方形井戸で、約2m東にはSX972が存在する。掘方は、一辺1.5~1.6mのいびつな隅丸方形を呈しており、粗砂を含んだ黒色粘質土がつまっていた。井戸内には最下段の横棟まで暗灰色粘土が、それから湧水灰白色砂層までは暗灰色砂が入っていた。井筒は、四隅に径10~15cmの柱をたて、それに二段以上の横棟をはめ、その外側に幅約30cmの縦板を打込んだ隅柱横型で一辺115cmを測る。なお縦板は打込んでいるために下端部は不揃いとなっている。本井戸は縦板と横棟とを釘を使わないので土圧で固定しており、さらに縦板下端から井筒として使用している曲物(径約60cm・高さ45cm)の上端部にむけて粘土を貼付けている。これは縦板を固定するとともに横からの汚水が浸透してくるのを防ぐためのものと思われた。土師質土器碗をはじめ、つちのこ・堅杵・わら草履や短刀身部さらには魚鱗・魚骨・種子(栗・梅・米・麦)が井戸内から出土した。

SE977—本井戸は、その南にあるSE980とともにSD978内に存在する。井戸上部はSD978によって破壊されており、加えて湧水がはげしかったため、細部を明らかにすることはできなかった。一辺1.4mの隅丸方形をした暗灰色砂質土の掘方中央に95×90cmの木組方形井筒を据えている。井筒は、方形横棟の間に支えの角柱を配した横棟支柱型で、内部には砂の混じった暗灰色粘土が入っていた。なお、井戸の底から出土した備前焼大甕は井筒として使用した可能性もある。土師質土器碗・中国産磁器皿・草履状木製品や魚骨が井戸内から出土した。

SE980—3.8×4.0mの円形の掘方中央に構築した12角形の木組井戸で、直径が内法で105cmを測る大型のものである。まず横で縦板をつなぎ、12角形にした筒を掘方内に置き、その外側には1~2重に添板をあてている。縦板の1枚は使用時に破損したためか割れて内側に入ってしまい、対角線上に1本の角材をあてて補修している。なお井戸の上部には50~60cmもある角礫や小石がつまっていたことから意識的に埋めた井戸のように思われた。また井筒底部には礫が敷詰められていたが、これは浄水を得るためにであろう。暗灰色砂質土の入った掘方からは土師質土器碗・皿が、井戸内からは土師質土器碗・皿・鍋・常滑焼甕・漆塗や魚骨・貝殻が出土した。

b その他の遺構

SX976—調査区南部で検出した本遺構は、横棟の外側に縦板をならべているなど構造が井戸に似てはいるものの、底部が湧水灰白砂層に達しておらず、井戸としての機能をもっている

とは考えられないことから「井戸状遺構」と仮称することにした。なお本遺構は、水溜めとも貯藏穴とも考えられるが、類例がないため現在では用途を明らかにしがたい。内部から土師質土器碗や魚鱗などが出土している。

SX972・973・974——調査区中央およびその南部で単独に検出した曲物を埋設した遺構である。掘方内部にそれぞれ直径50cm・35cm・70cmの曲物が据えてあり、SX974からは土師質土器碗・杯・鍋などが出土している。貯藏穴かとも思われるが、いずれも上部が削平されているため、用途は明らかでない。

B 遺 物

今次調査では旧地表面である遺構面が大幅に削平されており、明確に遺構に伴う遺物としては、単独に検出された井戸からの出土品があげられるにすぎない。また、SX976の上層及び周辺の黒褐色砂質土からは多量の土師質土器その他が出土したが、これも遺構に伴うものとしては捉えられなかった。

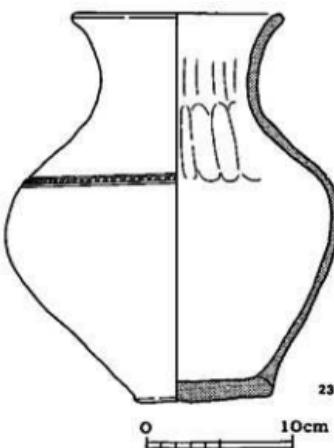
a 土製品類

土 器 弥生土器は少量出土している。そのうち西鶴砂層からは弥生時代前期の壺(23)の完形品が出土している。須恵器・土師器は表土砂層などから少量検出された。土師質土器は皿・杯・碗・鍋類など井戸内や上層から多量に検出された。陶器は備前・常滑・龜山焼の甕・壺・鉢・瀬戸焼の皿などが井戸内から検出された。磁器では中国産の青磁・白磁・青白磁の皿・碗類の他日本産の伊万里焼の碗などが井戸内や

表土砂層より出土したが、少量で一点以外は
いずれも破片である。

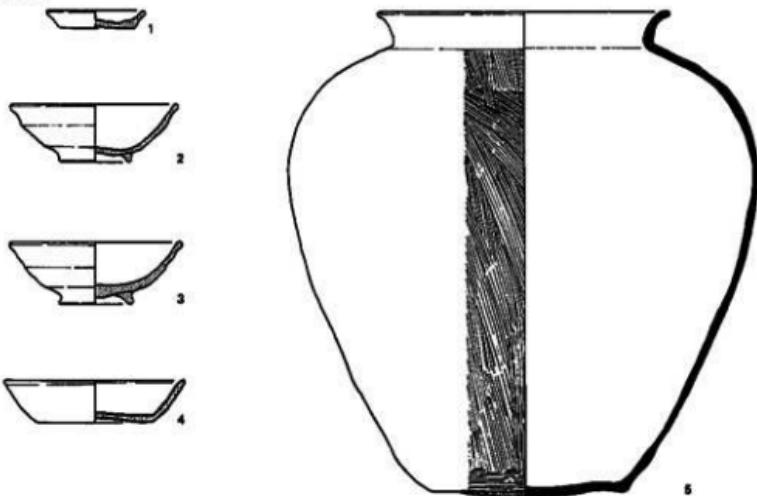
SE977——土師質土器皿A I (1)が数枚と
碗B I (2・3)が20枚、青白磁皿(4)、備前焼
大甕(5)が出土している。碗B Iはやや口径
が大きく、貼付高台は高い。青白磁皿は口元
で中国景德鎮窯産と思われるもので、完形品
である。備前焼大甕は口縁部を大きく外反さ
せ端部をやや尖らせた灰色を呈するもので、
備前焼編年(6)のII期に属すと思われる。井戸底
からの出土で曲物の代用として底に据えられ
たものとも考えられる。その他土師質土器鍋
・かまと、常滑焼・龜山焼の甕、こね鉢が出
土している。

SE975——土師質土器皿A I (6)が少量と

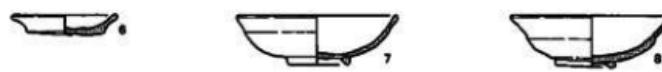


第2図 弥生土器実測図

SE 977



SE 975



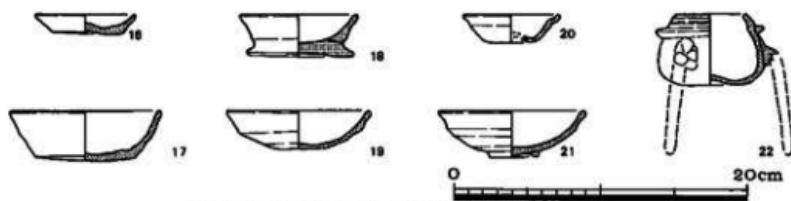
SE 980



SX 976

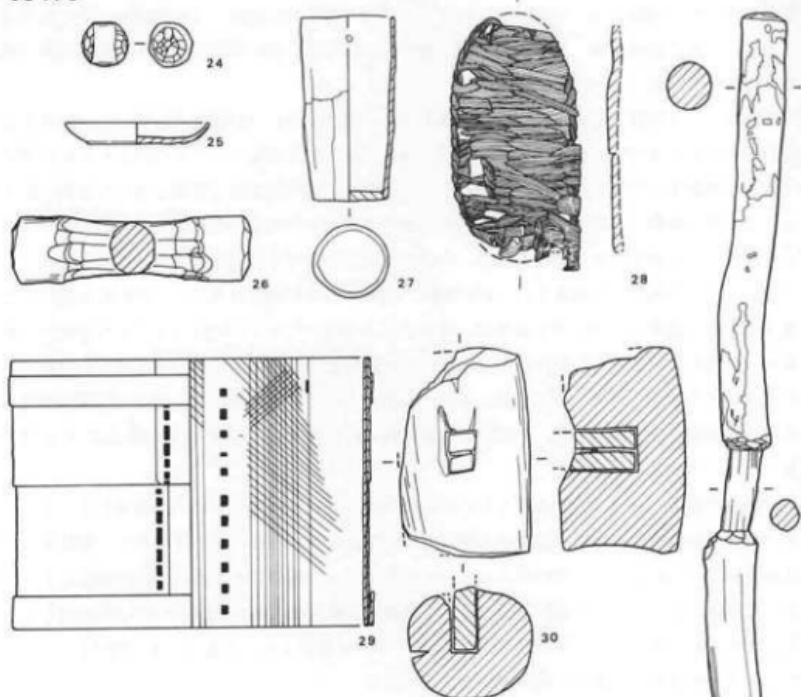


その他



第3図 第18次調査出土遺物実測図I(5は1:10)

SE 975



SE 971



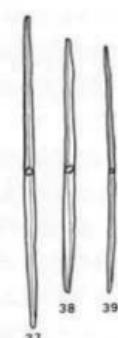
SE 977



SE 980



SX 976



20cm

第4図 第18次調査出土遺物実測図II (29(±1:10, 31(±1:8)

椀B I(7・8)が10数枚出土している。椀B IはSE977のものに比較してやや怪が小さく貼付高台も低い。その他備前焼・常滑焼の甕や、瀬戸焼の瓶子注口部、中国唐青磁や砥石、石鍋の破片が出土している。

SE980——土師質土器皿A I(9)、杯A I(10)、椀B I(11・12)が出土している。皿A Iと椀B Iがともに20枚位の出土で占める割合が高い。皿A Iは前記2つの井戸出土のものに酷似するが、椀B Iはやや怪が小さくSE975のものに似る。備前焼大腹口縁部は外反しⅢ期に属する。その他土師質土器鍋、常滑焼・龜山焼の甕や備前焼すり鉢などが出土している。9~12はともに掘方から出土したものであるが、井戸内から出土したものと類似している。

SX976——土師質土器皿A I(13)が40数枚、椀B I(14)が70数枚出土し、比較的多量にある。皿A Iは前記遺構出土のものと同様で、椀B Iはやや怪が大きくSE977出土のものと類似点が多い。鉢(15)は黒灰色をした片口の付くもので底部内面の磨滅は少ない。本遺跡からは初見の例で、従来多く出土しているこね鉢とも感じが違うようである。その他ここからは備前焼甕・すり鉢、常滑焼甕、脚付土鍋、中国唐青磁皿・椀の破片など、「五銖銭」「皇宋通宝」の古銭2枚が出土している。

その他の遺構——ここで取上げたものはSX976の上方周辺に広がっていた黒褐色砂質土内のもので遺構は不明であるが、多量の土師質土器が出土した。そのうち皿A I(16)・椀B I(21)は他遺構でみられたが、平底の杯A I(17)・杯C(18)・丸底の椀A I(19)・凹底の椀C I(20)など他遺構で出土しない器種がある。皿A Iは前記遺構同様であるが、椀B Iは100枚以上出土し、やや怪が小さく、高台の低いものでSE975・980に類似する。土釜(22)は三脚付のミニチュア土器で黒灰色をした薄手の焼成良好な瓦器である。

土 製 品 土瓶、瓦、壁土などが表土砂層中から多く出土したが遺構内からの出土は少ない。

b 石製品類 砥石、石鍋などが表土砂層中から出土した。

c 木製品類 広義にいえば各井戸材も含まれるが、ここではそれ以外について述べる。SE975からは比較的多くの遺物が出土したが、他の井戸からは少ない。それらは台所用具に限らず、日常生活の必需品や生産活動に必要なものが含まれており、意図的に埋められたと考えられるものもある。

SE975——玉状木製品(24)は木の両端を丸く削って玉状にしたもので用途は不明である。漆皿(25)は浅い高台を削出した黒地のものである。つちのこ(26)は中央部を両方から削込んで細くしたむしろ櫛具である。漆容器(27)は竹の節の間を切り取り、下部に丸板を嵌込んで容器としたもので、上部にある2個の穿孔や黒漆が内外面に付着し、それも所々厚く付着していることから漆塗の作業に使用したと思われる。わら草履(28)は両端が破損しているかほぼ原形を保っていると思われる。4本のたての芯繩にわらを横編しており、現在のものと作り方が同様である。上面には鼻緒が見えないので裏面と思われるが軟弱な為裏返せなかった。現在保存の為化学処理を行なっている。曲物(29)は井筒に使用したものである。木樽(30)は中央に貫通しない

枘穴を穿って柄装着部としている。柄の一部が中に残存し楔も入っている。両端打面部は使用の痕跡が著しい。豎杵(31)は曲った原木を用い樹皮も付いたままである。両端は丸味を帯び使用頻度が多かったことがわかる。その他箸状木製品、横櫛、草履状木製品、下駄、曲物底板などが出土している。

SE971——へら(32)は薄い板の先端を三角形に尖らしたものである。

SE977——草履状木製品(33)は弓形の板を半裁して広げ薄板としたもので、表裏面にわらや繊維質のものが付着している。他に曲物棒や曲物底板などが出土している。

SE980・SX976——箸状木製品(34~39)は長さ15~30cm位の木を削って細くし、更に両端を削って尖らしたもので、大部分は箸として使用したものと思われる。

d 古錢 古錢は14種22枚(うち判読不明3枚)が出土した。初鑄年が北宋時代のものが大半であり、確実に造構内からの出土は2枚にすぎない。

e 動植物遺体 動植物遺体は、米・麦・梅・桃などの種子や魚骨・魚鱗などが井戸内から出土している。

C 小 結

本次調査区はたび重なる洪水で流失したとも或いはまた昭和初年の河川改修の際削平されたとも考えられ、造構検出面は他の調査区に比べ低くなっている。したがって、本次調査では井戸や井戸状造構など、比較的深く掘込まれた造構を検出したにすぎなかった。このような状況下で、造構相互の関係を明らかにすることは困難を極めたが、ただSE980は出土遺物からSE977より若干新しい時期に埋没したものと考えられる。

次に出土した土師質土器をもとに、本次調査で検出した造構の時期について考えてみたい。土師質土器のうち出土個体数では皿A Iと椀B Iが大半を占める。このうち椀は、①口径がやや大きく(11~12cm)、器高の高い調整の丁寧なものと②口径がやや小さく(10~11cm)、器高の低い調整の粗雑なものの二種に分類できる。①の出土する第I期の造構(SX976・SE977)からは、鎌倉時代に比定される備前焼が共伴し、②の出土する第II期の造構(SE970・971・975・980・その他SX976上部の黒褐色砂質土)からは、土師質土器椀A I・C I・杯A Iおよび室町時代に比定される備前焼が伴出することから、第I期の造構を鎌倉時代、第II期の造構を室町時代前半期に想定できる。

注

- (1) 土器実測図の断面は、黒ぬき—須恵器・陶器、網目(粗)—土師質土器・瓦器、網目(密)—磁器で表示した。

(2) 土師質土器の分類

1 器種の分類

	器種・口徑	特徴		器種・口徑	特徴
供 請 形	椀A I (9~13cm) 椀B { I (9~13cm) II (約15cm) 椀C I (9~13cm)	丸底のもの。 高台を貼付けるもの。 底部を押さえ安定させたもの。	煮 沸 形 態	鍋B { I (約21cm) II (約30cm) III (約42cm)	口縁を外反させるもの。
	椀D	口縁が内湾し高台を貼付けるもの。		鍋C { I (約21cm) II (約30cm)	口縁を外反させ、端部を内湾させるもの。
	杯A { I (9~13cm) II (約18cm)	底部をへら切りして平底で高台が付かないもの。		鍋D	内耳の付くもの。
	杯B 杯C	器高3cm以上のもの。 高台を貼付けるもの。 高台をケズり出すもの。		鍋E	注口の付くもの。
盤 煮 沸 器	皿A { I (約7cm) II (10~12cm) III (14~15cm)	底部をへら切りして平底で高台が付かないもの。 器高3cm以下のもの。		鍋F	つばの付くもの。
	皿B	高台を貼付けるもの。		鍋G	3足の付くもの。
煮 沸 器	鍋A	口縁を外反させないもの。	蓋 蓋 かまど	蓋A	口縁を内湾させ、つばの付くもの。
				蓋B	Aの口縁を直立させるもの。
				蓋C	三足の付くもの。
調理 形 題			かまど	廟を貼付けないもの。	
				すり鉢 { I (約18cm) II (約30cm)	内面にカキ目を付けるもの。
				おろし皿	内面にカキ目を付けるもの。

*口径の大きさの数値はこれを中心とした大きさということであって明確に割り切れるものではない。

2 成形技法の分類

成 形 段 階	I	粘土総成形	粘土紐の巻上げ又は輪積み。
		粘土円板貼合	粘土円板を1箇所貼り合いで成形。
		手づくね	粘土のかたまりからじわり出す。
		ロクロ成形	紐作りの後ロクロで成形する。
	II	指押さえ	指で押さえて器体を成形する。
		へら切り	へらによって器体をロクロから切りはなす。
		糸切り	糸によって器体をロクロから切りはなす。
		へらヶズリ	へらによって器体を削る。
調整 段 階		ナデ	指で直接又は布、革などを使って器体をなでて平滑にする。
		ロクロナデ	ロクロの回転などを利用して一方向に付けられたナデ。
		ハケ目	板の木口によって器体をなでて平滑にする。
		へラナデ	へらによって口縁部をなでて平滑にする。

3 挽の外面調整手法

a 手法	上部横ナデ + 下部へラヶズリ	c 手法	上部横ナデ + 下部不調整
b 手法	外面横ナデ	d 手法	外面不調整

(3) 間號忠彦・間號貞子「備前焼研究ノート(1)~(3)」『倉敷考古館研究集報』1・2・5号 1965~67年)

2 第19次調査

第19次発掘調査は7月19日から10月18日まで、中州北部の第18次調査区に東接し、第7・8次(1971・1972年度)調査区の西側にある地域で実施した。この調査区は大地区表示の8LB B・C B区に含まれ、小地区割の8LB B1106を北西隅とする東西40m×南北30mの1200m²の範囲である。

今次の調査区では、第7・18次調査において井戸や底部に曲物を据えた土壙などの遺構を多数検出し、他の遺構はほとんど見られなかったことから、井戸を中心とした遺構の存在が予想された。なお、調査区の東南部は第8次調査のB1区にあたり、その際土器などの遺物を多量に含む石積遺構を検出していた。しかし、洪水による土砂の流入で埋まり、調査期間・予算の関係から調査の中止を余儀無くされたところである。

土層は上から表土砂層・灰褐色土層・暗灰色粘土層・灰白色砂層が調査区全体にはほぼ平行堆積し、遺構は灰褐色土層から掘込んだ状態で検出した。

検出した遺構は東西の既調査区の様相とは異なり、建物2、土壙9、櫛4、溝5、石組1、石敷1、石積2、柱穴などである。しかし、これらの遺構は出土遺物から時期の隔たるものが多く、また、時期を明確にし得ないものもあり、遺構相互の関係を明らかにすることは非常に困難である。

出土遺物は土壙、溝、石敷、石積の各遺構から土製品類をはじめ石製品類、木製品類、金属製品類、人骨および動植物遺体を多数検出した。土製品類は土師質土器と陶器の出土量が最も多く、特に、SK990からは土師質土器碗・杯・皿がまとまって出土し、土師質土器の幅年を考え上で貴重な資料を提供した。木製品は主にSX998の窓みから出土し、金属製品では懸仮が注目される。なお、暗灰色粘土層から弥生土器が若干出土している。

A 遺構

a 建物 柱穴は調査区南西部の高く残った地域でまとまって検出した。SB992・995建物はいずれも礎石を有する。

SB995——調査区南西部に位置する建物で、以後の調査において南へ1間分を検出し、合せて東西1間×南北5間の柱穴を確認した。西側はSD978溝が走り、第18次調査区でも関連する柱穴は見られず、梁行の間数を明らかにすることはできないが、梁行が1間か2間の細長い建物であったと思われる。柱間の長さは梁行が2.4m(8尺)、桁行が2.12m(7尺)の等間隔になっている。径20cm前後、厚さ約7cmの偏平な石が穴の底に据置かれていたが、ほとんど露出に近い状態で埋まっており、川の流れなどにより当時の生活面はかなり削られていると思われた。遺物は柱穴より土師質土器碗・皿・鍋などが若干出土したが、いずれも小破片のため建物の築造時期を明確にすることはできない。

SB995から直角に東へ延びるSX996は約2mの等間隔で2間並び、建物に付随する櫛か塀のような機能を果たしていたものと考えられる。

SB992—SB995の北側に近接した南北棟の建物で、東西1間×南北3間を検出した。SB995と同様に礎石はほとんど露出状態で、柱穴は底部しか残っていない。東側はSD1000溝に向かって下がり、東南部分の柱穴はすでに削平されていた。SD1000のため明らかにできないが、さらに東方へ広がっていた可能性もある。柱間は乗行が2.1m(7尺)、桁行が北から1.5+1.5+1.8m(5+5+6尺)である。SB995とほぼ平行しており、柱間は異なるがほぼ同時期の建物と考えられる。

b 土壙 SD978の西側とSK990土壙の周辺およびSX1001・1010石積の下部などから大小の土壙を検出した。遺物を含むものでも小破片が多く、性格・時期について明らかにし得たものは少ない。

SK990—調査区の中心部に位置する土壙で、長径6.7m、短径3.9mのいびつな形状をなす。壙は二段に掘込み、西側は深さ15cm、東側は深さ60cmを測る。東壁はSD1000に、西壁の一部はSD991溝によって切られている。土壙内には灰を多量に含む黒褐色土が埋り、多數の土師質土器碗・杯・皿・鍋をはじめ、備前焼窯・すり鉢、こね鉢、中国産青磁碗・白磁皿などの土器や石鍋、石板、漆椀、鉄釘、古錢、布、人骨片が出土した。埋めた時期は土器から室町時代初期と推定される。土壙の性格は土師質土器碗・皿などに数10点の完形品もあるが、多くは小破片で、さらに各種の遺物が出土していることからごみ捨て穴と考えられる。

c 横 棚 調査区北部とSX1001の下部から検出した。いずれも径5cm前後の細い杭が使用され、暗灰色粘土層まで打込まれている。時期・性格とも明らかにしがたいが、SA1005棚はSX999石敷の北東縁に添って打たれ、これに関連するものであろう。

d 溝 調査区の中央部と西部の広い範囲を占めている。SD1007溝以外は掘った溝というより自然の流れにより抉られてできたものと考えられる。

SD978—調査区西辺部を南北に走る溝で、第18次調査区南東隅と続いている。灰色細砂を主体にした土砂が堆積し、SD984・991溝は底部がSD978より約50cm高いが、同様の土が埋りS D978の支流といえる。層位や遺物からみて、いずれも昭和初期の河川改修後にできた溝である。

SD1000—中央部を南北に抜ける大きな溝である。黄褐色粗砂が堆積し粘土層は見られない。SX997石組、SX998の礎み、SX999石敷、SX1001石積はこの粗砂上にあり、SK990・SK1007を切っている。西岸の南半はゆるやかな傾斜で底部まで続き、溝の岸を明瞭にしがたいところもあるが、幅9~14m、深さ0.8mを測る。遺物は土師質土器碗・皿・鍋・すり鉢、備前焼窯・壺・すり鉢、中国産青磁碗、土瓶、瓦、石鍋、砥石、懸仏、鉄釘、古錢などが出土している。埋没の時期は土器からSD760溝(第15~17次調査)と同時期か若干古いと思われる。なお、SX999の上面から周間にかけSD1000下部の黄褐色粗砂と同様の砂が堆積し、伊万里焼染付椀などを含んでいたが、SX999からSD1000への石の落込みから両者が分かれる。近世以降にSD1000の堆

積層が抉られ石が落ち、再び粗砂が堆積したものと解釈できる。

SD1007—SD1000の東に位置し、これに添って南北に延びる溝である。幅60cm、深さ15cmと細長く浅い。出土遺物は全く見られず時期は明らかにしがたいが、両端をSD1000とSX1010の掘方によって切られている。用途については関連する遺構が検出できず不明である。

e 石組

SX997—調査区の北辺に位置し、中心に径23cm、深さ24.5cmを測る砲弾形の穴を穿った花崗岩を据え、周囲を長さ1m以上の大きな石を置いて動かさないように固定した遺構である。西側はSD1000の西岸に向かって平らな石を並べている。遺物は周辺の粗砂から土器片が見られたが、SD1000との区分が不可能である。時期はSD1000より新しいが、性格は不明である。

f 石敷

SX999—SD1000の上層に位置し、溝にはば平行して長辺16.5m、短辺3~4mと細長く、暗灰色砂質土の上に大小の砾を敷いた遺構である。北部には石がほとんど残っていないが、石の抜けた跡が暗灰色砂質土に残り、南側と同様に隙間なく敷いていたものと思われる。石敷道路の一部かとも推察されるが、延長部を検出していないため明らかでない。ただ、SX1010との間には両遺構よりレベルは低くなるが連続するよう石敷が延び、何らかの関係があったものと考えられる。石敷および暗灰色砂質土から出土した遺物は、土師質土器椀・杯・皿・鍋・釜・すり鉢、備前焼甕・すり鉢、こね鉢、瓦質土器火舎・灯籠、瓦、かまとおよび五輪石の火輪、石臼、石鍋、砥石などである。この遺構の時期は室町時代後半以降と考えられる。

g 石積

SX1001—調査区南縁中央に位置し、大小の砾が崩れた状態にある。半球状をなし、径6m、高さ0.8mを測る。中心部のみ石が積重なり、この下にある最下部の灰白色湧水砂層まで掘込んだSK1004土壤と何らかの関係があるものと思われる。遺物は土師質土器椀・皿・鍋、備前焼甕・すり鉢、こね鉢、伊万里焼染付椀・皿、瓦質土器火舎、瓦、木製の栓、古銭などが出土している。時期は伊万里焼の出土から近世以降である。

SX1010—調査区の東南部に位置し、第8次調査時に検出した石積である。第8次調査中断以後放置していたため、石は抜取られ、土器などの遺物も散逸していた。南北辺には7mの間隔をおいて深さ0.4mの掘方の一部を検出した。石積はこの掘方から内部に大小の砾を重ねたもので、特に北辺は0.4~1mを測る大きな砾の小口を南にそろえ、小さな石を裏込めにした石垣状の遺構となっていた。遺物は土師質土器椀・皿・鍋・すり鉢、備前焼甕・すり鉢、こね鉢、中国産青磁碗、瓦質土器すり鉢、瓦、ふいごの羽口、古銭などが出土した。時期はSX999とは同時期であろう。

h その他の遺構

SX998—調査区北部のSX999北側下層に位置し、SD1000に堆積した砂層の浅い窪みである。長径4.8m、短径3.1m、深さ0.3mのいびつな形状を呈する。木片や木葉を含む暗灰色粘土が埋

り、土師質土器碗・皿・鍋、壺前焼甕・すり鉢、中国産青磁碗、土甕、瓦、かまと、漆椀、下駄、木製蓋、人骨などが出土した。時期はSD1000とほぼ同時期である。

B 遺物

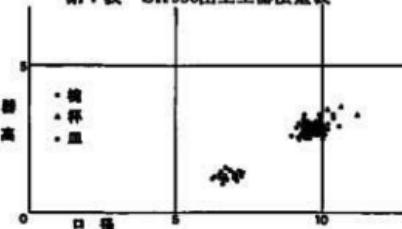
今次調査で出土した遺物には土製品類・木製品類・石製品類・金属製品類などがあり、特にSK990・SK998・SX999・SD1000からは大量の遺物が出土している。以下製品ごとに分けて報告する。

a 土製品類

土 器 土器には弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器がある。特にSK990・SK998・SX999からは土器研究の基準となる資料を得た。そこで今回はこの各種構から出土した一括土器を報告することにした。

SK990——土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器が出土した。土壤内の土層は一層となっており、かなり短期間に埋没したものと考えられる。このため土壤内の土器は時期的にまとまりを見せ、一つの様式を設定することができる。土師質土器は碗A・B・C、杯A、皿A I、鍋B・Fが出土している。碗はA(43・44)・B(45・46)・C(47)に分れ、碗Aが最も多くB・Cは少ない。c手法のものがほとんどを占め、d手法のものは少ない。さらに碗Aの中で粘土円板貼合せ成形を行なうものは9点見られる。また碗Cの小型のもの(48)は畿内で出土している「へそ皿」と呼ばれるものに形態・成形手法共に類似している。杯Aは出土量が少なく、皿AはI(40・41)しか出土していない。以上の供膳形態の器種だけで全体の90%以上を占めている。鍋にはB(49)とF(50)があり、Bの方が量が多い。瓦質土器は鍋C・F、すり

第1表 SK990出土土器法量表



第2表 SK990出土土器個体別数量表

土 器 種	器種	個体数	%	
土 師 質	碗 A I c	387	45.5%	
	A I d	3	0.4%	
	B I c	58	6.8%	
	B I d	6	0.7%	56.8%
	C I c	26	3.1%	
	C I d	1	0.1%	
	小型のC	2	0.2%	93.0%
土 器	碗 A I	119	13.9%	
	皿 A I	190	22.3%	
	鍋 B	25	3.1%	
	F	3	0.4%	3.5%

器種	個体数	%
瓦質土器		
鍋 C	1	0.1%
F	1	0.1%
すり鉢	1	0.1%
火合	1	0.1%
陶器		
甕	10	1.2%
壺	2	0.2%
こね鉢	3	0.4%
すり鉢	4	0.5%
磁器		
碗	5	0.6%
皿	2	0.2%
計	851	100%

鉢、火舎が出土しているがいずれも小破片であり図示できるものはない。陶器は甕・壺・すり鉢・こね鉢が出土している。甕には備前焼(55)と常滑焼(54)があり、出土量の比は7:3になる。すり鉢(52)はすべて備前焼で、こね鉢(51)は須恵質で产地は不明である。磁器は白磁・青磁の碗・皿が出土している。いずれも小破片で量が少なく、図示できるものはない。

以上の土壤内出土の土器は時期的にまとまりを持つと考えられる。土壤出土の土師質土器皿Aに形態・成形手法共に類似したものとして尾道市淨土寺阿弥陀堂の危腹から出土した土師質土器をあげることができる。この土器は阿弥陀堂が造営された貞和元年(1345)頃のものであると考えられることから、土壤内出土の土器を14世紀中頃に比定することができる。

SX999—SX999の石組の中からは土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器が出土したが、かなりの時期幅があり、これらのものを一括として捉えることはできない。しかしながら、石組の下部で土師質土器皿Aが一括して置かれた状態で出土しており、この遺構の年代を知る上で重要な遺物であると考えられる。一括土器は土師質土器皿Aのみで45個があり、I(56・57)・II(58~60)・III(61・62)に分けることができ、各数量は17個・25個・3個である。いずれも成形は同様で調整もきわめて似ている。また底部に「五」と墨書きされたもの(60)もある。この一括土器はSD610の土器に形態・成形手法共に類似しており、碗・杯も見られず器形構成も似ている。

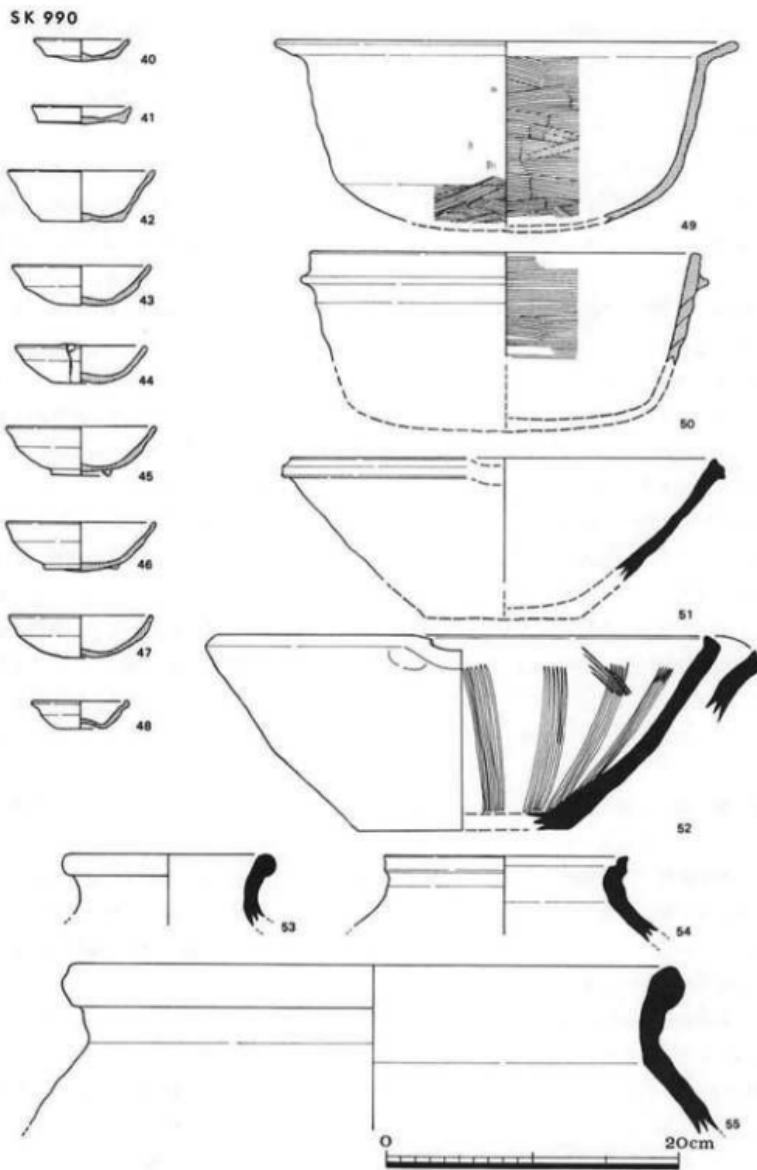
SX998—土師質土器・瓦質土器・陶器・磁器が出土している。土師質土器には碗B、皿A I・II、鍋Bがある。碗B(63)は体部外面のヨコナデが弱くなり、外面の棱がにくくなる。皿にはI(64)とII(66)がある。64のように古い要素を持ったものもあるが、ほとんどが底部と体部との境界に強い棱をつけ、口縁部をシャープに仕上げたものである。鍋はB(67)しか出土しておらず量も少ない。瓦質土器・陶器・磁器は小破片で器形も明らかでないため、図示できない。以上の土器はSD760の土器に形態・成形手法が類似しており、15世紀後半に位置づけられる。

土 製 品 土製品には土鍤(73)・円板状土製品・ふいごの羽口・瓦などがあるが、遺構に伴って出土したものは少なく、ほとんどが表土砂層からの出土である。

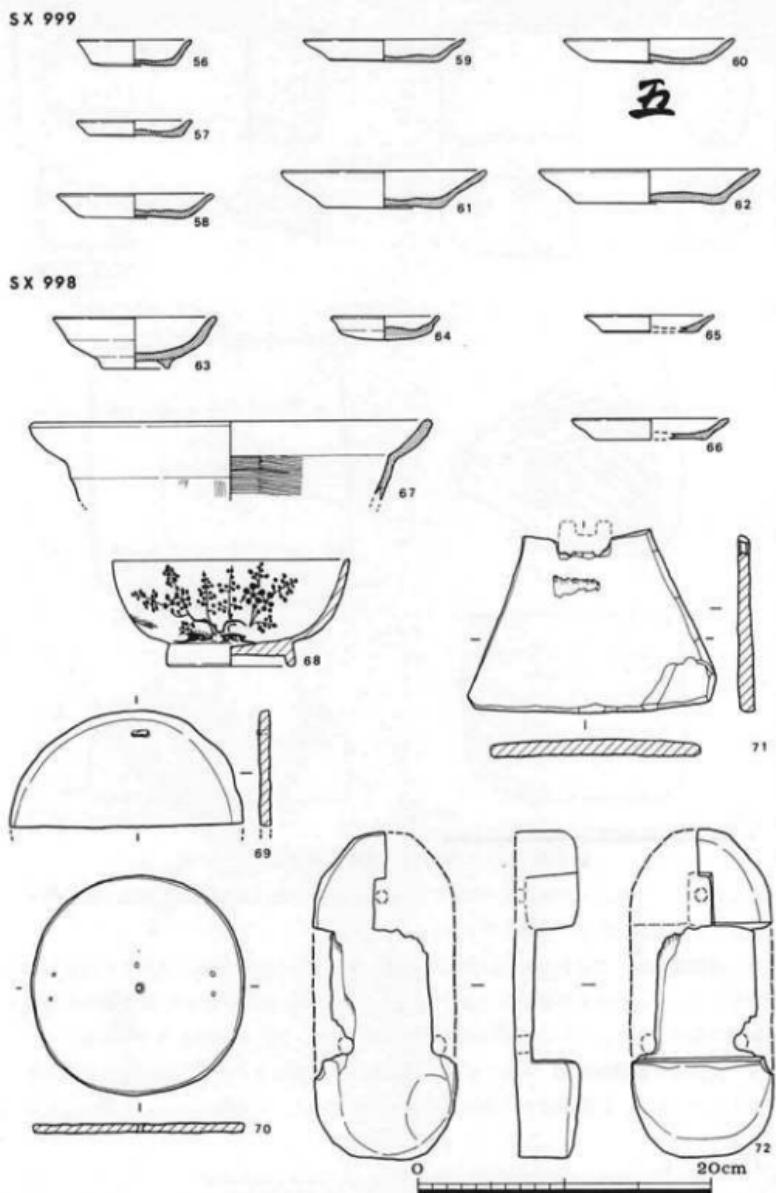
b 石製品類 石製品類には砥石・石鍋・五輪石・石臼・加工石などがある。砥石(74・75)・石鍋はSK990から出土している。五輪石(78)・石臼片(77)はSX999の石組の中から出土している。加工石と呼んでいるものはSX997の中心に据えてあったもので長さ55cm、幅62cm、厚さ38cmの花崗岩の中心に径23cm、深さ24cmの砲弾形の穴を穿ったものである。

c 木製品類 木製品類は主としてSK990とSX998から出土した。特にSX998からは多くの木製品が出土しており、今回はこの遺構から出土した一括木製品を報告することにした。

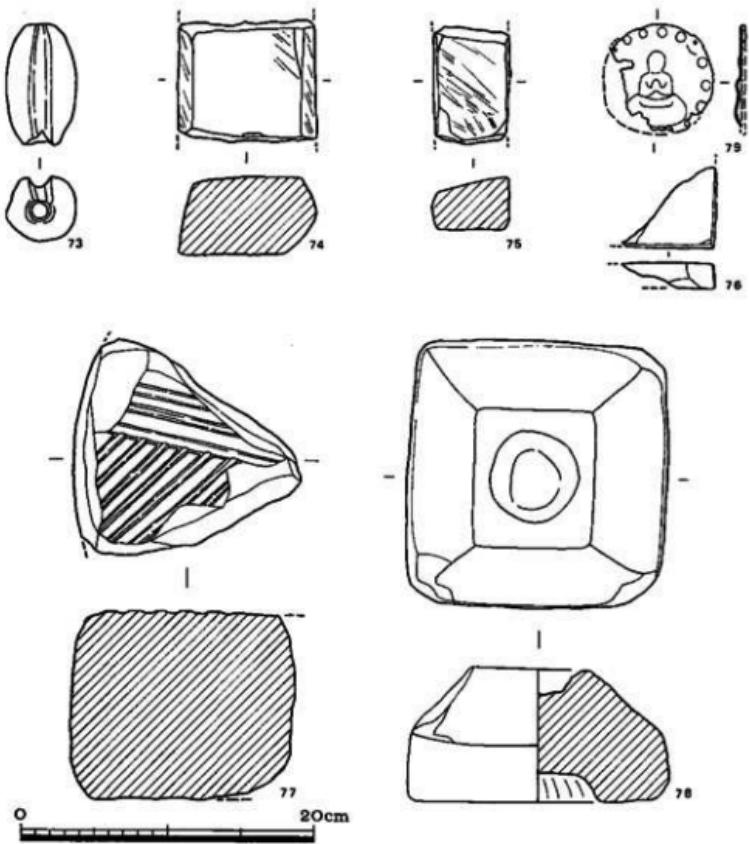
SX998—漆器碗・皿、円形板、下駄、箸状木製品などがある。漆器碗(68)は高台がやや高いもので、黒地に朱漆で文様が描かれている。皿は小破片である。円形板(69・70)は2点あり、いずれも片面に黒漆を塗ったものである。69は端部に木皮を通しておらず、縦板を止めたものと考えられ、蓋に使用したものであろう。70も両端と中央に穴を開けており、蓋に使用したもの



第5図 第19次調査出土遺物実測図 I



第6図 第19次調査出土遺物実測図II



第7図 第19次調査出土遺物実測図III(78は1:8)

と考えられる。下駄には差歎下駄の駄(71)と異形の連歎下駄(72)がある。連歎下駄は第8・12次調査出土の下駄に形態が類似している。

d 金属製品類 金属製品類には鉄釘・古銭・銅製懸仏などがある。遺構から出土したもののは少なくほとんどが表土砂層から出土している。その中で注目されるものはSD1000から出土した銅製の懸仏(79)で、円形の銅板に仏が押出されており、裏に円形板が当ててある。

e 人骨及び動植物遺体 入骨・獣骨・植物種子・貝殻などがある。ほとんどは表土砂層から出土しているが、SX998から人間の頭蓋骨が出土した。

C 小 結

今回の調査では建物、溝、石組などの遺構が明らかになった。検出した遺構は中世から近世

以降にかけて長期間に渡って形成されたもので、切合いや重なりなど複雑な様相を呈していた。さらには、昭和初期の河川改修時における掘削とその後の流水による削平により、遺構の破壊が相当進み、各々の遺構本来の状況や遺構相互の関係などを明らかにすることは非常に困難であった。

各遺構は時期を明確にしがたいものもあるが、出土遺物や切合の関係から大きく五期に分けることができる。第8表の編年表に対比して古い方から順に述べると、第II期からSD1000の両側に分布するSK985・988・990、SB992・995およびSD1007、SK1008、SX1009などで、第III期がSD1000、SX998、第IV期がSX997・999・1010、第V期がSX1001、SK1004で、第VI期がSD978・984・991である。第II期のSK990は室町時代初期に位置付けられ、第III・IV期が室町時代後半、第V期が近世以降、第VI期が現代といえる。他の調査区と比較して新しい時期の遺構が広い範囲を占めていた。

建物は全体の規模が確認できたものはないが、柱穴や礎石の並びから柱間や方位が明らかになった。柱間は5~8尺で、同一の建物でも異なる数値が使用されていた。二棟検出した建物とSX996は方位が類似し、同時期に存在し有機的な関係にあったものと推測される。

注

- (1) 1977年度の第21次調査で明らかになった。
- (2) 器形の分類や土器成形の用語については、広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡－第15~17次発掘調査概要－』(1977年)に従った。
- (3) 净土寺阿弥陀堂露滴庵及中門修理工事報告書(1970年)
志道和直『草戸千軒町遺跡出土の土師質土器編年試案』(調査研究ニュース『草戸千軒』No.48 1977年)第1図
- (4) 注2と同じ
- (5) 広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡1972年度発掘調査概報』(1973年)第17図-3、4
広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡－第11~14次発掘調査概要－』(1976年)第17図-51

D SE1015井戸

中州北西の河床に孤立していたSE1015井戸は、木組とその中に堆積した土器や礫が露出し流失の危険が大きいため、第19次調査と並行し7月23日から8月2日までの期間で発掘調査を行なった。この地点の区割は8LA A1706である。

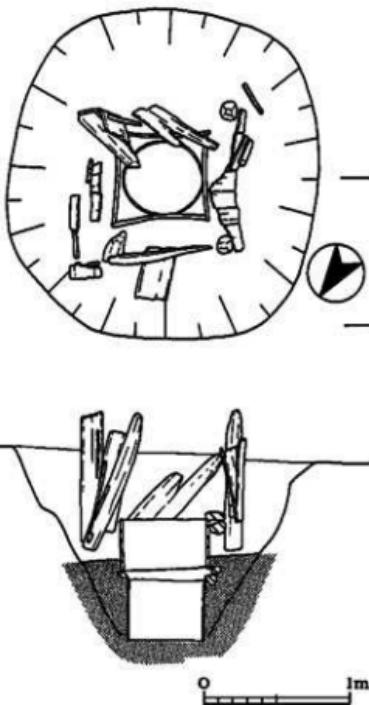
a 遺構

井戸の掘方は長径2.25m、短径2.1mを測るほど円形のプランで、深さは1.3m残っていた。壁は深くなるにつれて次第に狭く掘り、灰白色湧水砂層まで達している。掘方の底には径51cm、高さ41cmの曲物を据え、その上を石で押さえ、さらに一辺61cm、高さ35cmの升形に組んだ枠を重ねて井筒としている。この枠と井筒の隙間は石や亀山焼甕などを詰め、枠の上端を曲物と同様に石で押さえている。井筒は一辺1.1mの木組方形隅柱横棟型で、縦板には添板が見られた。上部はすでに消失し、横棟の二段目までしか残っていない。

井戸は土圧のため木組の板や柱が内側に傾き、使用が困難で危険になったため埋めたものである。井筒の縦板や添板のなくなっているものもあり、埋めた時期に抜取った可能性を考えられる。井戸内部からは土器・木製品などの遺物や礫が多数出土した。これらの堆積状況を見ると一度には埋められていない。即ち、最初に遺物をほとんど含まない灰色粗砂が曲物から枠の下部まで、次に土器や礫を含む暗灰色砂が枠から木組の下部まで、最後に遺物や礫が隙間なく詰った暗灰色砂質土が上部まで埋っていた。最初の灰色粗砂は井戸の底さらにをしないで放置されていたため、最下層の灰白色湧水砂層が入込んだものと思われる。次は上部から投入され、最後は塞ぐように詰めていったものであろう。

b 遺物

SE1015井戸内からは土師質土器・陶器・磁器・木製品・石製品・動植物遺体が出土した。井戸内出土の遺物は廃絶時に多量の礫などとともに投込んだもので時期的にまとまりを見せ、一つの様式を設定することができる。また、掘方埋土内からも若干の遺物が出土している。



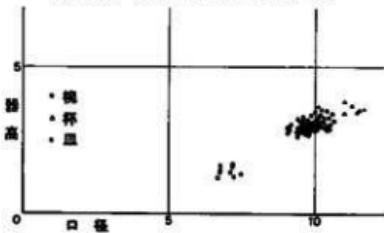
第8図 SE1015井戸実測図(H:1.8m)

第3表 SE1015出土土器個体別数量表

土 師 質 土 器	器種	個体数	%	
				%
楕 A I c	3	3.0%	30.3%	
B I c	27	27.3%		
杯 A I	3	3.0%		
皿 A I	19	19.2%	54.5%	
A II	2	2.0%		
鍋 A	2	2.0%		
B	2	2.0%	14.1%	
C	9	9.1%		
E	1	1.0%		
かまと	7	7.1%		

器種	個体数	%
甕	13	13.2%
壺	3	3.0%
すり鉢	1	1.0%
こね鉢	4	4.1%
磁器	2	2.0%
甕	1	1.0%
計	99	100%

第4表 SE1015出土土器法量表



(1) 土器 土師質土器は楕A・B、杯A、皿A I・II、鍋A・B・C・D、かまとBがある。楕はA(80)とB(81・82)があるが、いずれもc手法でAよりBが多く出土している。杯A(83)は出土量が少なく、皿AはI(86)とII(84・85)に分けられるがIIは量が少ない。鍋にはA・B・C・Eの各器形があるがCが

最も量が多い。陶器には甕・壺・すり鉢・こね鉢がある。甕は最も量が多く亀山焼(94)・備前焼(95)・常滑焼(96・97)があり、出土量の比は1:7:5となる。壺はほぼ完形になる常滑焼(92・93)が出土しているが、形態・成形手法が異なっている。すり鉢・こね鉢(90)も少量出土している。磁器には楕・皿・壺があるが、図示できるものは青磁楕(91)のみである。他の遺構でもそうであるが、きわめて量が少なく、日常品としての土器ではないことを示している。

(2) 木製品 木製品には下駄・漆器皿・楕が出土している他、用途不明の木製品が多数出土している。下駄(98)は連歯下駄が1点ある。漆器には皿と楕があり、いずれも黒漆塗りで、皿(99)には内面に鳥の文様が描かれている。

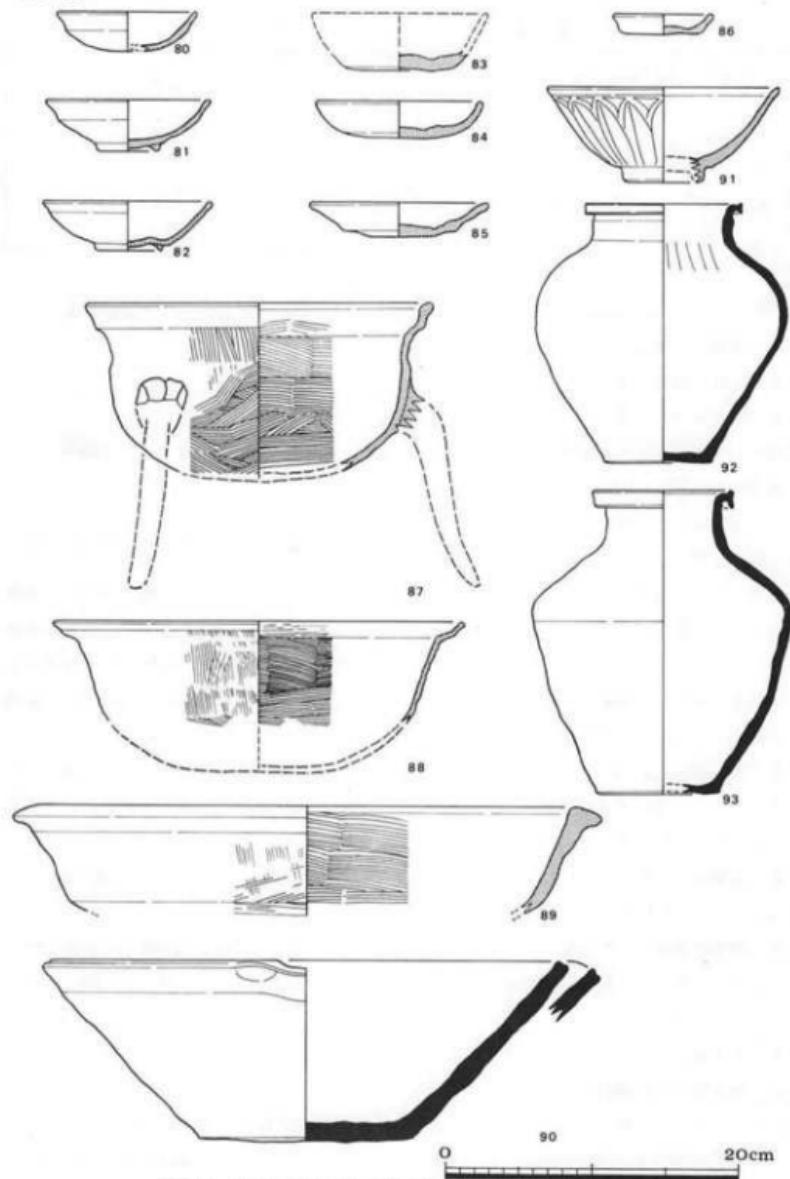
(3) 石製品 石製品には砥石・石鍋がある。砥石(101)は1点あり、小型の仕上砥であろう。石鍋は体部に台形のつばを付けるものである。

(4) 動植物遺体 動植物遺体には炭化米・栗の皮・桃・梅・くるみなどの種子・魚の骨やうろこなどが出土した。これらは廃絶時に投込んだというより、日常戸戸を使用する際に入込んだものであろう。

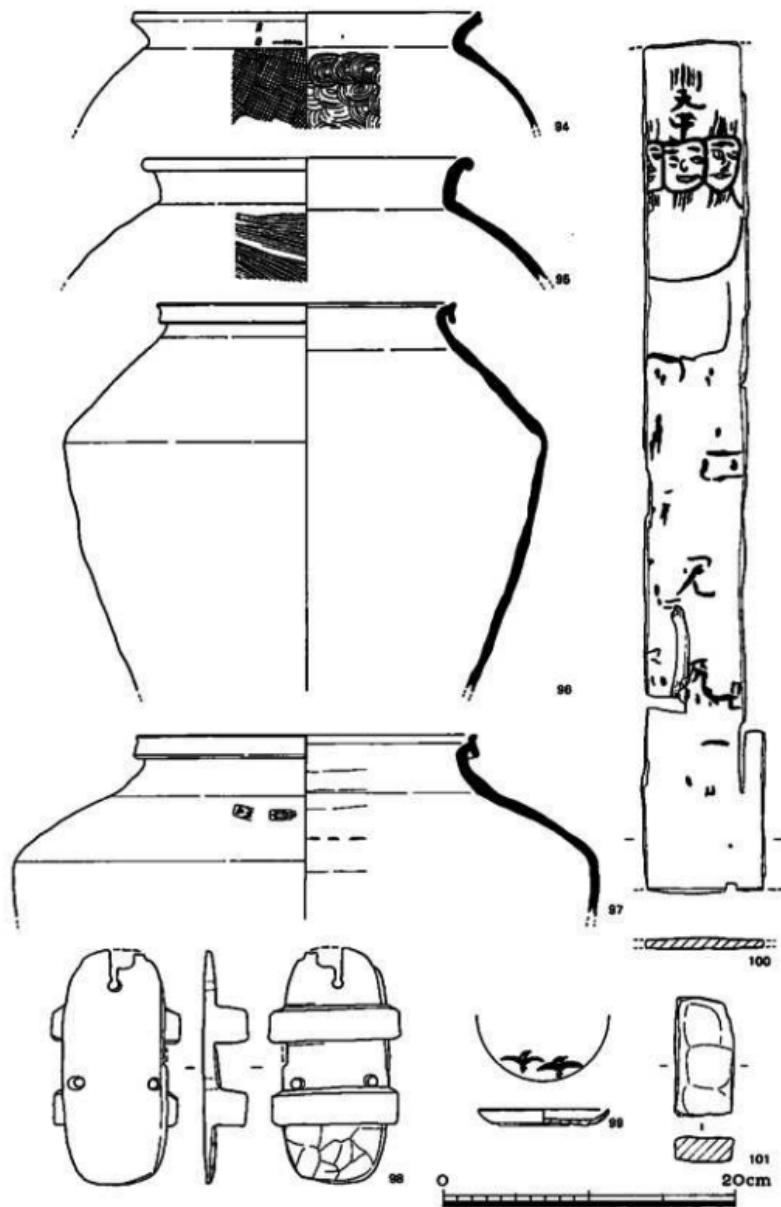
(5) その他 布片・スラッグが少量ある。

(6) 堀方埋土内の遺物 堀方埋土中からは土器片が若干出土したが図示できるものはない。木製品では井筒の添板に添って呪符(100)が出土している。この呪符には三宝荒神の図と「天中」の文字が墨書きされている。両側が欠失しており、堀方を埋める段階で意識的に入れたものか、埋める際に混入したものかは明らかでない。

SE 1015



第9図 SE1015井戸出土遺物実測図I (88, 92, 93は1:8)



第10図 SE1015井戸出土遺物実測図II(94~97は1:8, 100は1:2)

以上SE1015は掘方内から時期を示すほどの土器が出土しておらず、作られた時期は明らかではない。しかし廃絶した時期は、井戸内に入っていた一括遺物からうかがうことができる。すなわち、椀はSK990出土のものよりも調整が丁寧であり、外面のヨコナデも強く、高台端部をさらに平坦にするためにナデたものも見られる。また、椀Cが出土しておらずSK990よりも古い段階の遺物であると考えられ、室町時代前半頃に比定できる。

C 小 結

今回調査した井戸は川岸に露出していたもので、井戸と関連する他の遺構を検出することはできなかった。上部はかなり削平され、井側は土圧で崩壊が進んでいたが、下部の保存状態は良好で井筒として升形の枠と曲物を重ねて使用していることが明らかになった。当遺跡においては升形の枠の使用は初めての発見例である。

井戸内からは廃絶時に埋められたと思われる各種の遺物が多数出土した。これらから廃絶時期は室町時代初期と推定される。

掘方から若干遺物は見られたが、時期を明らかにできるものはなかった。ただ、木組の添板に添い、斜で裏返した状態で出土した木製の呪符は井戸の構築に際してこの当時の人々の信仰を知る上で貴重な資料と言える。

注

- (1) 水野正好「三宝荒神符と天中の呪符」(調査研究ニュース『草戸千軒』No.47 1977年)

3 第20次調査

第20次調査は10月19日から12月25日までの約2ヶ月にわたって実施した。今回の調査区は、大地区表示の8LCB・CC区に含まれ、小地区割の8LCB0621すなわち第19次調査の南東端を北西隅として東へ20~30m、南へ60mの約1,650m²で、それに第8次調査区との層位関係を確認するため南北30mでは東側に幅5m、約150m²を拡張した。

今回の調査区はかって第3次調査区で確認された石敷道路SC001の西側延長部にあたるため、道路の延長と町割の区画、さらにはそれに伴う建物群など、遺構の中心部の様相が明らかになるものと予想して開始したが、調査区北半では上層遺構面がほとんど削平されており、建物1、溝2、土壙8、埋葬土壙2、井戸5などを検出したにすぎない。南半では東側の第3次調査区から西側の調査区へ続く櫛SA003とそれに南北に直交する櫛SA1100、SA1110が明らかになり、SA003に伴って門と考えられる礎石群も2箇所(SX1085、SX1095)確認されたことから従前の調査区同様に櫛による区画があることが明らかになった。この他には多数の柱穴や土壙2、井戸7などがあるが必ずしも櫛に伴うものばかりではなく面的にも時期的にもその様相は複雑である。

層位的には標高約0.5mにみられる下部の湧水灰白色砂層上に厚さ約40cmの暗灰色粘土層、厚さ約90cmの灰褐色土層があり、部分的にはその上に黒色土の堆積がみられる。遺構はこのうち標高約1.9mの黒色土層、約1.6mの灰褐色土層上部の上下2層に掘込まれているが、断面図にみられるとおり北半では1.6m以上はほとんど削られており、上層遺構については深く掘込まれたものを除いてはほとんど残っていないことになる。なお、灰褐色土層は下半では鉄分を多く含み茶褐色土になるが、上半では間に1~2条の暗褐色土帯がみられ、下部の暗褐色粘土層と茶褐色土層との間には部分的にではあるが弥生土器、土師器、須恵器などを含む広がりも検出された。

遺物は井戸を中心に土器、土製品、木製品、石製品、古銭などが出土したが、量的には少なく、普遍的にみられるのは碗、杯、皿、鍋を中心とした土師質土器のみである。

A 遺構

今回の調査で検出した主な遺構には櫛3、建物1、埋葬土壙2、井戸12などがある。このうち上部の黒色土層から掘込んだことが明らかなものは南半の櫛1、井戸2、埋葬土壙2のみで、他の遺構についてはわずかな切合い関係や出土遺物の相対的編年から年代を類推することとなった。

a 櫛 調査区中央を東西に走る櫛SA003と、それに直交し南に延びる東西2条の南北櫛SA1100・SA1110がある。

SA003——第3次調査で発見以来、第8次調査までに長さ約35mが明らかになっており、そ

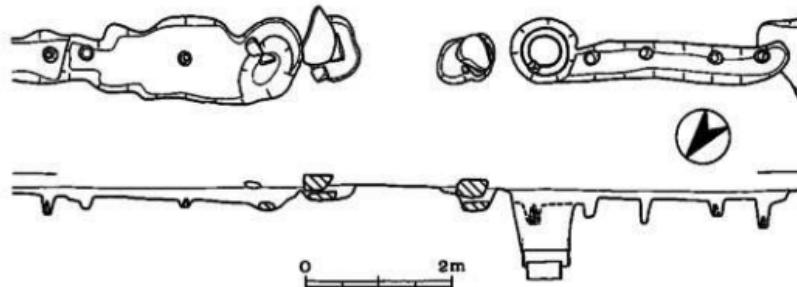
れが今回の調査区に連なって計80m以上におよぶ長大な柵である。柵はN70°Eの方向に一直線に延びているが、柵中にみられるSX1095門以南はやや南に方向をかえている。掘方は幅0.5~1m、深さ現遺構面より20~40cmに布掘りされているが、柱部分のみはさらに20~40cmも深く壠掘りしており当時の地表面からすると50~70cmも掘っていたことになる。また柱間は0.5~1.3mまで種々があるが、7割以上が0.5~0.7m間に含まれる。柱は径10~15cm大の広葉樹材を4~8角形に削り、底を平らにしたもので根石を据えたものも若干ある。なお、柵に伴って後述するII期の土師質土器椀・杯・皿・鍋やかまと、さらには「天禧通宝」「皇宋通宝」などの北宋銭も出土した。

SA1100—SA003には直交して南に延びる柵で調査区西側に位置するものである。柵は個々の柱を径30~40cm、深さ20~40cmに壠掘りしており、なかに根石をもつものもある。柱間は0.7~2.0mまで各種があるが、0.8m前後のものが多くそれを基準にしているようである。なお、掘穴は総体的にSA003より浅く柱根もやや小さめである。

SA1110—SA1100の東へ約22m離れてほぼ平行に走る柵で掘方は50cm幅で布掘りしている。掘方溝はSA003との交点から始まり南へ8mのび、それ以南は若干の間隔をあけて調査区南端へと続いている。深さは北部が20~30cmと浅いのに対し、南部は約60cmと深くしており様相を異にしている。構造はSA003に似るが、掘方溝は前者に比べ整っており、U字溝状をなす。柱間は0.8~1.0mまでのものがあるが大半は0.9mで柱間も他の2条と比べ規格化されている。なお、北端ではSA003と切合っているがSA1110はSA003の掘方埋土を明らかに切っており、前者より時期的にやや遅れるようである。遺物には土師質土器が若干あるが形態的にSA003よりは若干後出のものである。

b 門 SA003柵上で柱の間隔をあけ両側に礎石をおいたものがSA1100の東西にそれぞれ1箇所ずつみられた。

SX1085—SA1100の西2mに位置するもので、30~40cm大の平らな石が2.4mの間隔をおいて埋置してある。西側礎石は径約1m、深さ20cmの掘方に南北に2個並べており、西側には小



第11図 SA003柵・SX1095門実測図(H:1.8m)

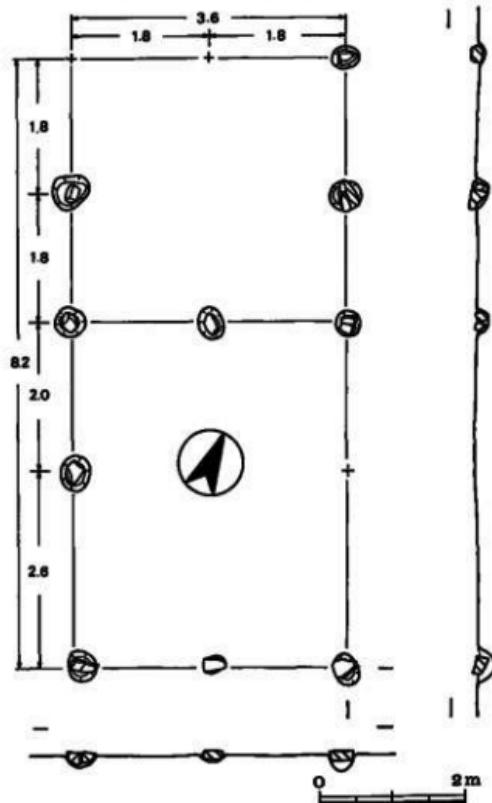
角礫の表込石もみられる。東側は根石が埋られるだけの穴を掘っており、全体はSA003にそってやや凹んでいる。根石上面は東西で約10cmの比高差がある。

SX1095—SA1100の東約4mに位置するもので50~60cm大の平らな石を約2.2m離して礎石として埋置している。掘方は東西とも石が入るだけの大きさにし、それぞれ2段に石を重ねている。上下段とも上面のレベルは東西で異なり約10cmの差をもつが、下段上面のレベルはSX1085のレベルに近くまた上段石との間に砂が堆積していることから、上段の石は使用時の補修と考えることができる。なお、これらの門はSA003の線上でつながっており、SA003と同時に作られたものと考えられる。

c 建物 柱穴はSA003の南側で多数発見されたが、建物としてまとまりをもつものは北側のSB1060のみで、南側ではSX1140の根石をもつ柱穴列が建物に関係する遺構と考えられるにすぎない。

SB1060—SA003の北約10mに位置する東西2間、南北4間の掘立柱建物で、棟はSA003に対し直角に近い方向つまりN25°Wに向っている。柱穴の検出面は標高1.6~1.8mの灰褐色土中で、柱間は梁行で1.8m、桁行は北から1.8+1.8+2.0+2.6mと必ずしもそろってはいない。北西端の柱穴はSE1050の掘方によって切られておりその位置を明らかにすることはできなかった。柱穴は検出面で径30~50cm大の比較的大きなもので、内部には15~30cmの根石があり、それに伴って土師質土器碗・杯の細片が出土した。

SX1140—調査区南端ならぶ根石をもつ6本の柱穴でN40°Eの方向にならんでいる。柱間は東より1.8+1.8+1.8+3.0+3.0mとなり、全長約12mを計るが、これに対応する柱穴は明



第12図 SB1060建物実測図(H:1.8m)

らかでない。

d 土壌 北半部を中心に径1m前後の土壌が若干みられたが、形態・内容とも不揃いで何に使用されたかは明らかでない。このほかに上部の黒色土層中に2基の埋葬土壌がある。

S K 1040—調査区西北部の灰褐色土に掘った土壌で長さ2.2m、幅1.0mの平面長方形をなす。底は深さ約30cmで平らにしており、内部よりII期の土師質土器碗が出土した。

S K 1042—S K 1040の東に隣接する径約2m、深さ30cmの円形土壌で内部より若干の土師質土器碗・杯・鍋などが出土した。

S K 1044・1049・1051—いずれも径1m前後の浅い不定形の土壌で若干の遺物を含んでいるが用途は明らかでない。

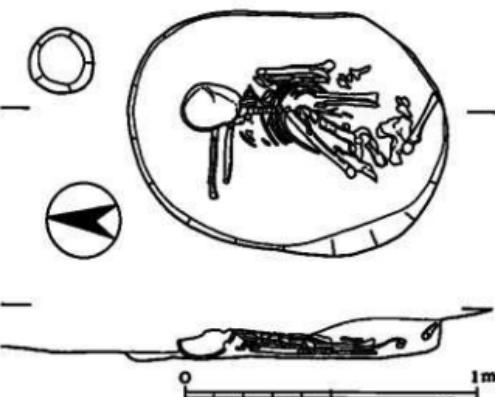
S K 1101—S A 1100の下層に掘られた土壌で、径約1m、深さ80cmを測り、壁面はほぼ垂直に底は平らにしている。從って平面の割に容積は広く、貯蔵穴とも考えられる。内部は砂や粘土が互層をなし、底より約10cmの位置には厚さ約5cmの木質層が堆積していたが、木や草の葉ばかりで、いわゆる木製品は含まれておらず土壤腐棄後は自然に埋没したものらしい。

S K 1070—上層の黒褐色土層で明らかになったもので、上部は削平されているが長径1.1m、短形0.8m、深さ10cm弱の楕円形をなす浅い土壌である。内部には人骨が埋葬されていたが、下腹部に鉄片がみられた他、副葬品は明らかにできなかった。人骨は頭を北に向け脚を折り曲げた保存状態の良好なもので、左上肢は西方に張出しており、顔面並びに上体はうつむいた不自然な形をしている。なお、頭部北方に若干離れて径約20cmの柱穴がある。

S K 1075—S K 1070の東約2mの位置にある埋葬土壌で、径約1m、深さ約10cmの不整円形をなす。人骨は背椎、肋骨、下肢の一部しか残っていなかったが、頭部などの上半身は土壌底部が暗褐色に変色しその痕跡をたどることができた。それによると頭位は北より東へ約50~60°ずれているようである。なお、本土壤の北側にも径40cm大の柱穴がみられた。このような埋葬土壌の頭部に接してみられる柱穴は、S K 1070の北約5mに位置し、かつて第7次調査で明らかになったSK 185にも伴っており、この種の土壌に普遍的に伴うものとすれば墓標様の柱がたっていたとも考えられる。

e 井戸 方形6基、多角形1基、円形5基の計12基の木組井戸が調査区全域に分布している。

S E 1030—調査区北西端で発見した方形井戸で、掘方は一辺1.5mの方形をな

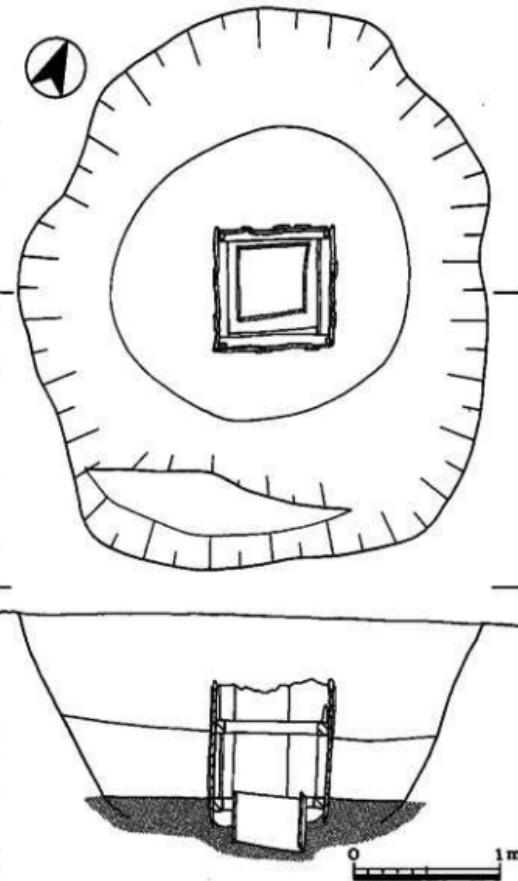


第18図 SK 1070 墓抜実測図 (H: 1.8m)

す。井側は掘方下端とそれより約40cm上方にある2段の横棊しか残っておらず原形の復原は困難であるが、一辺約70cm、深さ1.5m以上の方形横棊型になるらしい。井側内は2段目の横棊まで褐色砂がつまり、それに伴ってI~II期の土師質土器碗が出土した。上部には暗褐色土がつまっていたが添板と考えられる板材も散乱しており縦板のみ抜取ったものと考えられる。

S E1050——長径4m、短径3.5mのほぼ円形の掘方中央に方形井側を据えたもので、掘方は大きくS B1060の北西部の柱穴を切っている。井側は縦板を抜取り下端の一辺96cmの横棊しか残っていないため明らかにできないが、掘方埋土と井側内の堆積土とは明瞭に分離できた。井側は一辻1m弱の方形横棊型になるものと考えられる。また井側の中央底部には現存長40cm、径4.5cmの節を抜いた竹が立ててあり、井戸廃絶後古井戸となって埋戻す際のまじないが行なわれたものと考えられる。井側底部よりII期の土師質土器碗・杯・皿が少量、掘方中より土鏡が出土した。

S E1055——長径3.8m、短径3mの不整円形の掘方に方形の井側と升形の井筒を据えたものである。井側は2段以上の横棊の間に支柱をおき、その外側に縦板、添板をあてた横棊支柱型で、平面内法一辺75cm、現存の深さ約1mを測る。横棊は一方を凸に、一方を凹にして組んでおり、縦板は下端に丸みをつけて上部から打込んでいる。井筒は長さ47cm、幅32cmの板4枚を釘でとめ升にしたものを使っている。全体として保存状態は良く、井筒内には黄褐色砂が詰まり、井側内には多数の土器、木製品などと共に角礫や暗灰色粘土が入っていて、上部にはそれらを押える形で50cm大の平らな角礫が置いてあった。これはこの井戸が何らかの原因で使用できなくなり、種々なものを使って一時に埋戻し平らな石で封じたものと考えられる。したがって井戸内の遺物は一括遺物として捉えることができるが、掘方中の遺物と差はなく長期に使われた



第14図 SE1055井戸実測図(H:1.8m)

井戸とは考えられない。

S E 1065・1066——S E 1055の南に2基並んでみられる円形井戸で、S E 1066はS E 1065の掘方を切って造っている。S E 1065は径約1mの漏斗状の掘方中央に曲物を重ねて井筒。井筒としたもので、下段の径42cm・高さ32cm、中段の径47cm・高さ20cm、上段の径58cm・高さ20cm以上を測る。当初はこの上にもう2段以上あったものと考えられる。S E 1066はS E 1065の西に接して径約1mの掘方に曲物を重ねたもので下段は径36cm・高さ30cm、上段は径43cm・高さ26cmを測り、若干入子の形になっている。なお、これは掘方の切り合いで新旧関係を捉えることができたが遺物には変化はなく廃棄した痕跡もみられないことから、同時に使用された可能性も考えられる。

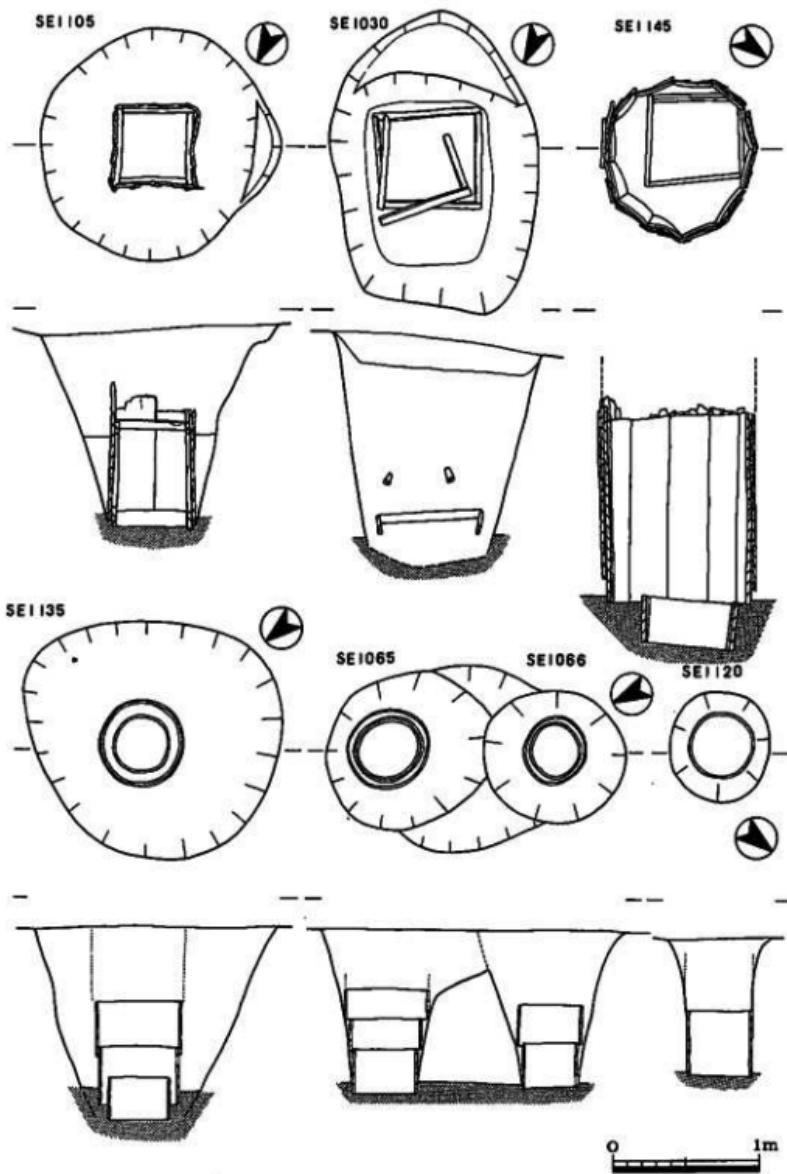
S E 1090——SA003の下層で明らかになった円形井戸で、径約80cmの垂直に近く掘込んだ掘方に径45cm・高さ28cm、径60cm・高さ22cm以上の曲物を2段以上重ねている。曲物の大きさに比して掘方径は小さく、曲物にあわせて掘ったと考えられる。内部には底にⅠ期の土師質土器碗Bがおちていた他、曲物残存部まで砂が詰まり、上半は暗褐色土が堆積している。なお、井土埋没後その上にSA003の柱根が埋めてあった。

S E 1105——径約1.5mの円形の掘方中央に一辺52cmの方形の井筒を据えた井戸である。井筒の上半は腐蝕しており下半しか残っていないが、2段以上の方形横棟の4隅を支柱で支え、その外側に縦板をあて埋めたもので、板によっては底まで届いていないものもあり釘は使わず土圧で全体を支えている。井戸内は底より約50cmまでは砂が詰っていたが、上半は暗褐色土となって井戸材や木片それに土師質土器碗が落ちており、廃棄した井戸と考えられる。

S E 1120——径70cmの掘方に曲物を据えたもので下段は径42cm、高さ45cmを測り、この上には同径の曲物の痕跡がさらに高さ30cm分残っていた。内部よりⅠ期の土師質土器碗が出土した。

S E 1130・1131——同一掘方内に2基並んでみられるもので、当初あった径約3mの掘方をもつS E 1130が何らかの原因で埋ったのち新たに同一場所にS E 1131を造ったもので、その際掘方はやや西にずれ当初あったS E 1130の井筒北西部を壊している。S E 1130は一辺98cmの方形横棟を支柱でつなぎ縦板をあてた横棟支柱型の井筒をもつが北、西側の縦板はS E 1131を造る際に崩されており、内部にも掘方埋土と同様の土が詰まっている。S E 1131は一辺75cmの方形横棟型井筒と常滑焼窯の井筒とからなる。製作にあたっては掘方底の湧水砂層中に底部を打ち欠いた、径約50cm、肩部最大径約80cmの窓を据え、方形に組んだ横棟をのせた後縦板・添板を加えており、他の井戸とはやや製作方法を異にしている。内部には底から掘方上部まで砂混じりの青灰色土が堆積しており、S E 1130内に掘方の暗褐色土が詰っていたのとは異っている。なお、S E 1130と1131の時期差については前者の遺物が少ないと明確でない。

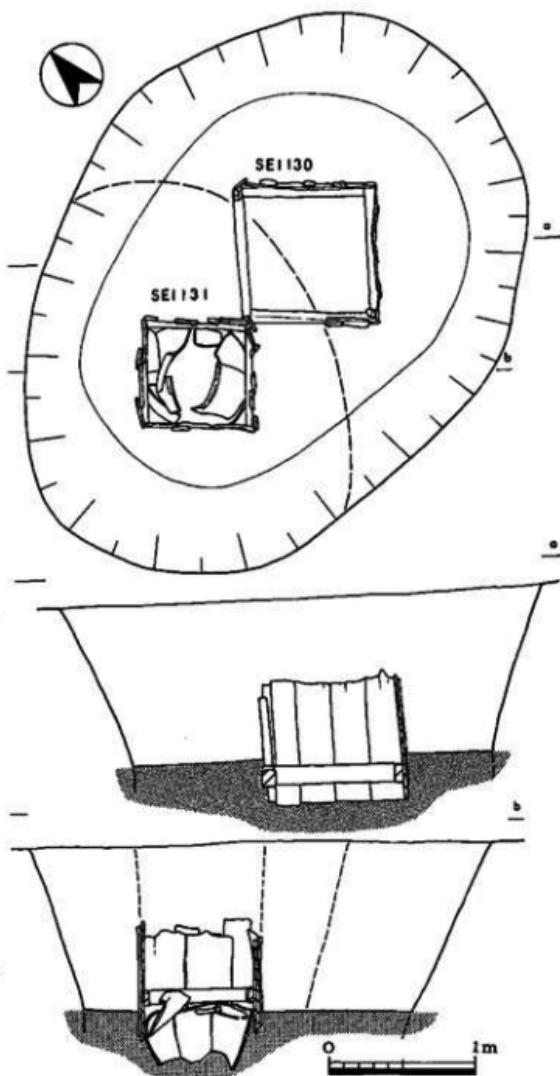
S E 1135——径1.6mの不整円形の掘方中央に曲物を重ねた井筒をもつもので、曲物は3段が残っていた。下段は径40cm・高さ28cm、中段は径53cm・高さ38cm、上段は径55cm・高さ36cmで、いずれも端部を重複させていた。なお、曲物径に比して掘方は大きいが、掘方部分は粘質土で



第15図 第20次調査井戸実測図(H:1.8m)

固めているのに対し、井側内
は砂が詰っており、湧水屑か
らの砂が吹上たものと考えら
れる。

S E 1145——調査区南端に
ある井戸で、径約 5 m の不整
円形の掘方北寄りに多角形の
井側と方形の井筒を据えたも
のである。井側は長さ 127~130
cm、幅 25~30 cm、厚さ 2~3
cm の断面台形の板 12 枚を鉄釘
と一辺につき 3 箇所の楔で 12
角形に組んだもので、上部に
は同様なものがつないであり、
外側には幅 20 cm 前後でやや薄
手の板が 2~3 重に添えてあ
る。井筒は長さ 60 cm、幅 22 cm
の板 4 枚を方形に組んだ升を
使用しており、東隅ではこの
上に井側の縦板がのっている。
内部は井側底より 30 cm まで褐色
色砂が詰り、その上には 40 cm
大の平らな角礫があって、それ
を境にその上部では木質を
多く含んだ暗灰色粘質土に変
っていた。さらに上では井側
は腐蝕しているが、その内部
では土が序々に褐色に變って
いき、最上部では 20~40 cm 大
の角礫が多数重なってみられ、
井戸底絶に際し、土と共に大
きな角礫を投込んだものと考
えられる。なお井戸内には遺
物は少なく掘方内の遺物と変



第16図 SE1130・1131井戸実測図 (H : 1.8m)

化はみられない。

f その他の遺構

SX009—SA003にそって北側に2条ならんでいる杭列で、東側の第3次調査区で北から西へ直角に曲ったものがここまで続いている。杭は径5cm内外の樹皮のついたままの松材の先端を尖らして20~40cm間隔で打込んでおりSA003・1100・1110などの標とは全く様相を異にしている。

SG030—第8次調査で明らかになった池で東西約11m、南北約7mの隅丸方形をなすが、後に西側は杭としながら画し埋めたてて規模を縮少している。近世以降の遺構である。

S X 1068—SA003の北7mにある幅0.5~1mの溝状の遺構で東側でやや南に曲る。平面底部とも整っておらず何の遺構であるか明らかでない。なお、内部よりⅢ期の土師質土器皿が出土している。

S X 1077—SA003の北に添う溝で溝内とその東西に70~80cmの間隔をおいて合せて8本の柱穴がある。S A 1068が曲っているため西側延長上にはS D 1068があり、あるいはつながっていたものかもしれない。

B 遺 物

遺構の数は他の調査区に比較して多く、なかでも井戸から出土した遺物にはかなりまとまったものがある。以下出土遺物を概観し、ついで主要な遺構ごとに述べてみることにする。

a 土製品類 今次調査によって出土した土製品類には弥生土器、土師器、土師質土器、須恵器、陶器、磁器、瓦器、瓦質土器、土錠などがある。

弥生土器は少量が出土し、井戸の掘方や溝状遺構などの遺構内に混入しているものもある。器種には壺・甕などがある。土師器は調査区中央東寄りと東南部の黒褐色土層から甕の破片などがまとまって出土しており、出土状況からみて二次堆積とは考えられない遺物もかなりみられた。

土師質土器は建物・櫛・土壤・溝・井戸などの遺構にともなうほか灰褐色土や黒色土からもかなりの量出土している。器種には碗・杯・皿・鍋・すり鉢・かまとなどがある。陶器は建物・櫛・土壤・溝・井戸などのほか灰褐色土から比較的多く出土している。大型の甕は備前焼・常滑焼・龜山焼があり、鉢は条溝の有るものと無いもの(117)があり、前者はほとんどが備前焼である。施釉陶器は井戸の掘方や表土砂層から若干出土している。いずれも灰釉で、瀬戸焼の皿(156)・花瓶(139)などがある。磁器は櫛・井戸のほか黒色土・灰褐色土などから少量が出土している。青磁・白磁はほとんどが中国産である。瓦器は若干出土しており、器種には皿がみられる。瓦質土製品は井戸や灰褐色土から出土しており、鉢・碗・小型の香炉などがある。

土錠は井戸から管状のもの(158)が數個出土しており、円板状土製品は土器片の周縁をすたもの(159)と打欠いたもの(160)が各1個出土している。

SA003——櫛の柱根を埋めるために掘られた布櫛りの溝や柱穴から出土した。土師質土器は皿(140・141)・杯(142)に比較して碗・鍋の出土量が多く、かまど(146)は一個体を完形に復元することができた。他に備前焼すり鉢・甕、常滑焼甕、亀山焼甕、中国産青磁、瓦質土器、土鍾などが少量出土している。土師質土器碗はB(144)のほかC(143)も出土しており、鍋B(145)は室町時代前半頃につくられたものと推定される。

S E 1050——土師質土器皿・杯・椀・鍋・すり鉢・かまと、備前焼窯、龜山焼窯などが少量出土している。土師質土器碗B(102~104)は比較的大きく、調整方法も丁寧であるところから鐵舟一室町時代前半に埋没したものと推定される。

S E 1055——第20次調査区の遺構のなかでは最も出土量が多い。土器では土師質土器皿・杯・椀・鍋が多量に出土し、土師質土器すり鉢・かまと、備前焼壺・甕、常滑焼甕・龜山焼甕、中国產青磁・青白磁が少量出土している。土師質土器の椀にはA(111・112)・B(114~116)・C(113)の形態がみられ、いずれもやや小型で、粗雑な作りが多く、Bの高台は低い。鍋はC(118)とB(119・120)の二種がある。室町時代前半頃に埋没したものと推定される。

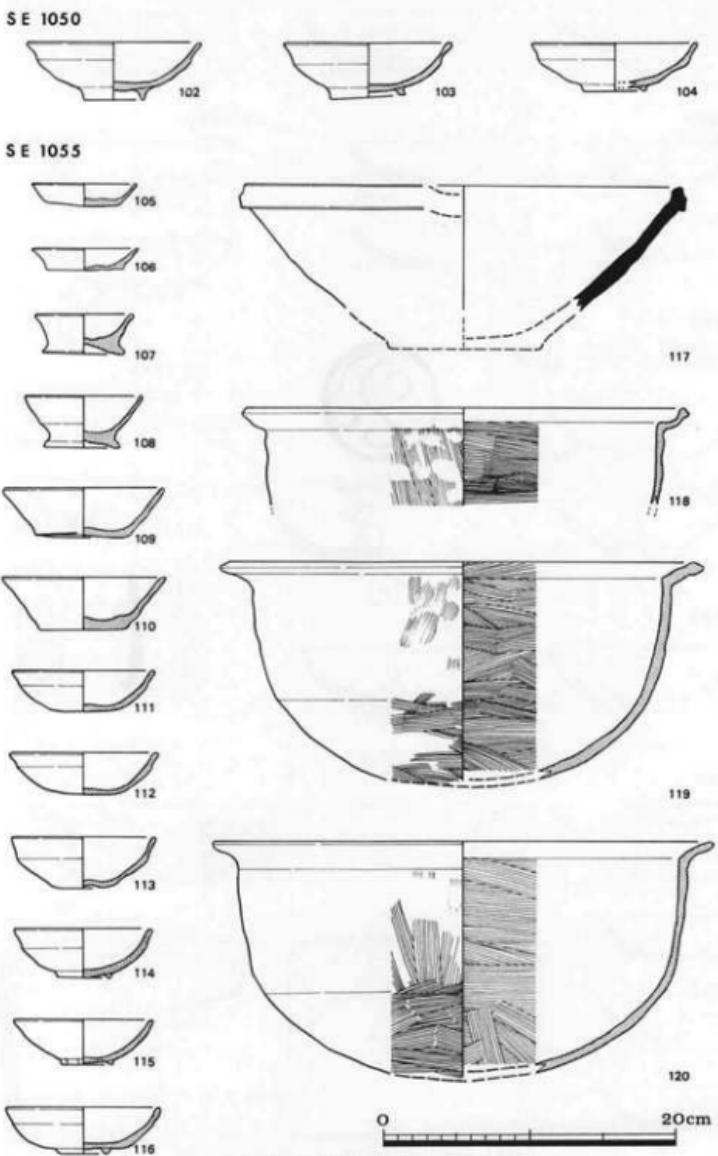
第5表 SE1055出土主器個体別数量表

	器種	個体数	%		器種	個体数	%
土 師 質 土 器	椀 A I c	125	50.2%	65.4%	甕	1	0.4%
	A I d	14	5.6%		こね鉢	2	0.8%
	B I c	15	6.0%		磁器 楠皿	2	0.8%
	C I	9	3.6%		計	1	0.4%
	杯 A I	35	14.1%			249	100%
	C I	4	1.6%	97.2%			
	皿 A I	28	11.3%				
	鍋 B	7	2.8%				
	C	4	1.6%				
	F	1	0.4%				
	すり鉢	1	0.4%				

S E 1065・1066——曲物の井戸 2 基が切合ったもので、切合関係から S E 1065の方が古い。遺物はほとんどが掘方から出土したもので、井戸の時期差を明確にすることはできなかった。土師質土器椀・杯・鍋・かまと、備前焼壺・甕、亀山焼甕、中国産青磁、土錐が少量出土している。土師質土器椀 B(121~123)は比較的大きく、口縁部は外反し、高台も丁寧に貼りつけてあることから鎌倉時代にまで遡るものと推定される。

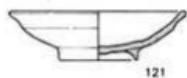
S X 1068——土師質土器椀・皿・鍋・かまと、備前焼すり鉢・甕、常滑焼甕、瓦質土器、須恵器、弥生土器が少量出土した。土師質土器椀B(124-127)はやや小型で高台も低いものが多いところから室町時代前半～中葉に埋没したものと推定される。

S E 1090——この井戸埋没後はSA003が造られており、SA003よりも古い。出土遺物は少ないが、土師質土器壺B(128・129)は比較的大きく、口縁が外反し、高台の貼付けも丁寧であるところから饅頭時代に位置づけられるものと推定される。

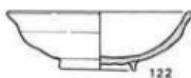


第17図 第20次調査出土遺物実測図 I

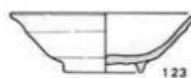
SE 1065,66



121

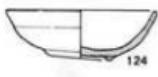


122

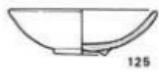


123

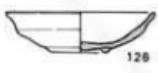
SX 1068



124



125

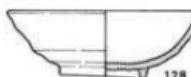


126

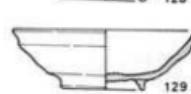


127

SE 1090



128



129

SE 1105



130



131



132

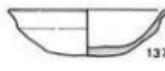


133



134

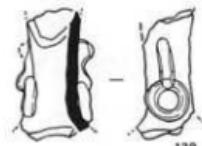
SE 1145



137

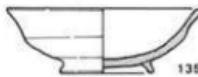


138

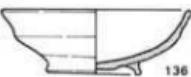


139

SE 1120



135

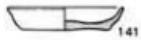


136

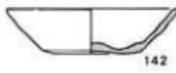
SA 003



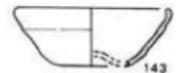
140



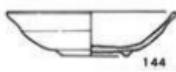
141



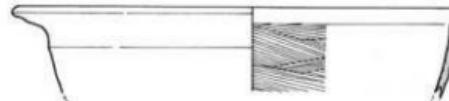
142



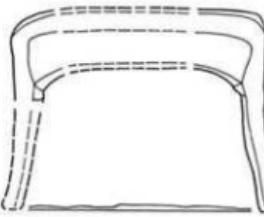
143



144



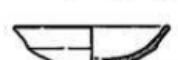
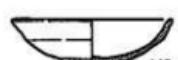
145



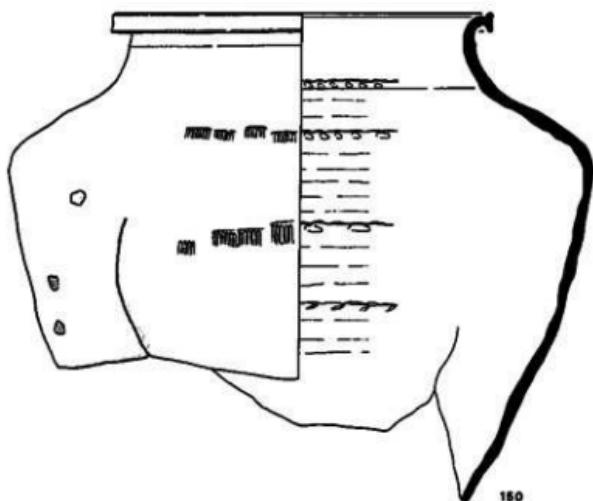
146

第18図 第20次調査出土遺物実測図II(146は1:6.5)

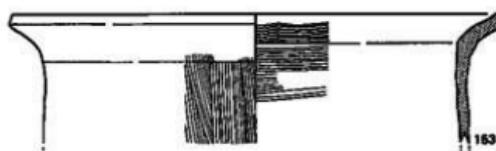
SE 1131



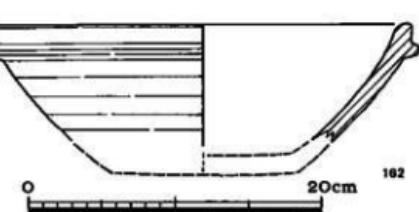
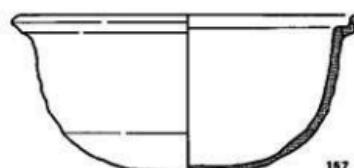
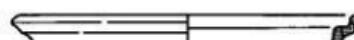
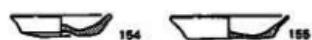
SE 1130



黒褐色土

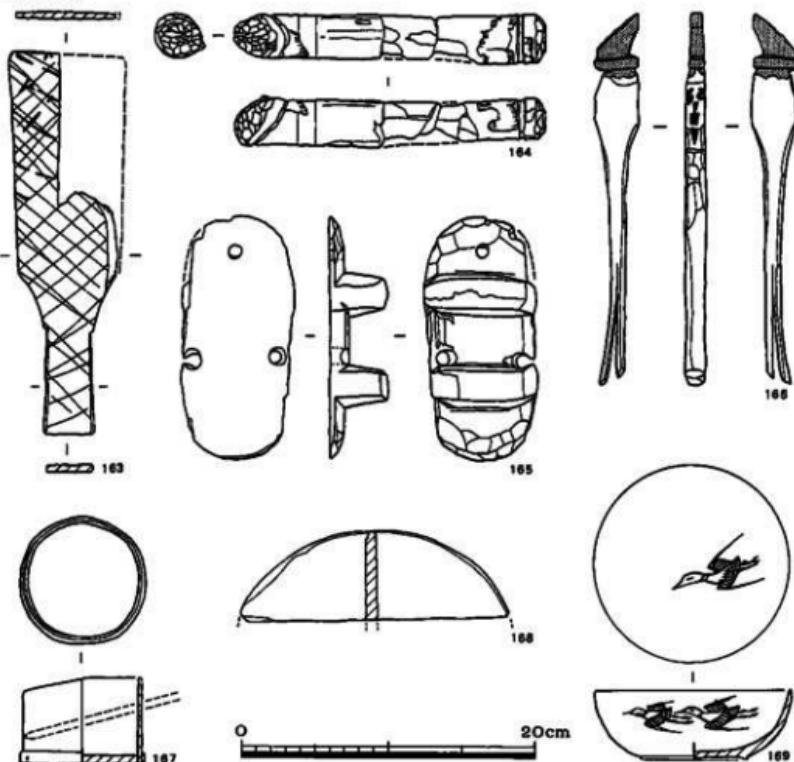


その他



第19図 第20次調査出土遺物実測図III(150+11:8)

SE 1055



第20図 第20次調査出土遺物実測図IV (166は1:2)

SE 1105——土師質土器碗・杯・皿・鍋・すり鉢・かまと、備前焼窯、亀山焼窯、瓦質土器鉢・碗、中国産青磁碗などが少量出土している。土師質土器碗B(133)はその形態の特徴がSE 1090出土の碗に似ているところからほぼ同時期のものと推定される。青磁碗(134)は体部内面と見込みにヘラ文様のある同安窯系のもので、形態の特徴などから元時代頃と推定される。

SE 1120——土師質土器碗・鍋、備前焼すり鉢が出土している。土師質土器碗はB形態(135・136)のみが出土し、他の造構から出土するものに比較して大きく、口縁部が外反し、高台も高く貼付けも丁寧であるところから第20次調査区の造構のなかでは最も古く位置づけることができ、鎌倉時代に埋没したものと推測される。

SE 1131——SE 1130の埋没後に掘られた井戸で、掘方から土師質土器碗が比較的多く、土

師質土器鍋・鉢・かまと、備前焼甕、常滑焼甕、亀山焼甕、瓦質土器、中国産青磁が少量出土している。井戸内からは土師質土器椀・鍋・かまと、備前焼甕、常滑焼甕、亀山焼甕、瓦質土器、中国産青磁碗が少量出土した。井筒に使用した底をぬいた常滑焼甕(150)はその形態から室町時代前半頃のものと推定される。

S E 1145——堀方から土師質土器椀(137・138)の出土量が比較的多く、土師質土器皿・杯・鍋、備前焼すり鉢・甕、常滑焼甕、亀山焼甕、瀬戸焼花瓶(139)、瓦質土器鉢・椀、中国産青磁・白磁、弥生土器が少量出土している。井戸内からも土師質土器椀の出土が多く、土師質土器皿・杯・鍋・かまと、瀬戸焼椀、備前焼甕、常滑焼甕、亀山焼甕などが少量出土している。土師質土器には皿A IIIがあり、室町時代後半頃に埋没したものと推定される。

黒褐色土——調査区中央東寄りと東南部において灰褐色土の下で部分的にみとめられた。土師質土器皿・椀・かまと、亀山焼甕などと弥生土器、土師器(153)、須恵器(152)など平安時代以前に属する遺物がまとまって出土している。

その他——灰褐色土から土師質土器椀が多量に出土し、土師質土器皿・鍋(157)・すり鉢・かまと、備前焼甕、常滑焼甕、亀山焼甕、須恵器合子、弥生土器などが少量出土している。黒色土からは土師質土器椀・鍋、備前焼甕、常滑焼甕などが比較的多く、土師質土器皿(154・155)・かまと、備前焼すり鉢、須恵器などが少量出土している。

b 石製品類 砥石が2点と石鍋の破片数点が黒色土や表土砂層から出土している。砥石(161)は2点とも扁平のもので、2面あるいは4面に使用痕がみられる。キメ細かく仕上砥であろう。石鍋(162)は口縁部下に鋤がめぐっているので、いずれも滑石製である。

c 木製品類 S E 1055から人形をはじめ信仰に関係のあるものや生活用具などがまとまって出土している。

羽子板状木製品(163)は薄板を羽子板状に切って作ったもので、片面のみに刀物や焼ゴテによる格子目がみられる。陽物(164)は樹皮のついた木の両端を削って作ったもので、一端を亀頭部とし反対側は面取りがおこなわれている。この種の陽物は本遺跡では3点目である。人形(166)は横向きの小型の人形で、顔面は板側面に墨で眉・目・鼻・口・ヒゲを描き、鳥帽子、頭髪も墨で塗っている。下端は側面から削ってある。下駄(165)は平面が長方形をなす小型の連曲下駄で、井戸内からこの他にも破片が数点出土している。柄杓(167)は小型の曲物に斜めに柄をつけた痕跡のあるもので、柄と反対側の口縁部は使用によって磨耗している。漆椀(169)は低い高台の付いた椀で、全面黒漆地に朱で鳥の絵を内・外面に描いている。その他底板・橋・草履状木製品・箸状木製品・墨書き木札類などが出土している。

d 金属製品類 鉄釘數点と古銭26枚が出土した。古銭はSA003から天禧通宝・皇宋通宝など4枚が出土したほかは、灰褐色土・黒色土・表土砂層などから出土している。北宋銭が出土の大半を占める。

e 布 S E 1055, S E 1145から平織布片が若干出土している。

f 人骨および動植物遺体 S E 1070・1075には成人骨が各一体埋葬されており、S E 1055から魚鱗やウメ・モモの種子が若干出土した。

C 小 結

今回の調査区は、従来の調査の知見から最も良好な状態で造構が検出されるであろうと予想されていた。しかし、調査区を東西に走るSX009を境に、北半では造構面である灰褐色土上部がかなり削られており、井戸や土壤などの個々の造構を面的なつながりとして捉えることはできなかった。南半では灰褐色土上に黒褐色土が堆積しており、東西に走る櫛SA003とそれに直交する2条の櫛S A 1100, S A 1110が検出され、それに伴って多数の柱穴や井戸などが明らかになった。

調査区内からは多数の造構が検出されたが、時期的には長期にわたっており、造構間の切り合いや出土遺物から大きくは次の4期に分けることができる。I、大ぶりの櫛Bを伴出し、S A 003の柱根下で発見されたSE1090を中心とした時期。II、櫛Cを伴出するSA003の時期。III、櫛A IIIを伴出し、黒褐色土上からSA003に間連づけて掘込んだS A 1110を中心とした時期。IV、SA003の存在は忘れられ单なる空地に掘られたSG030。すなわち近世磁器を伴出する時期である。このうちII、III期については互いに関連しており部分的には連続して使用されたものもある。I期の造構にはS E 1065, S E 1066, S E 1090, SK 1101, S E 1105, S E 1120などがあるが、量的には少なくそのうちでは曲物井戸の井戸が多い。II期ではSA003をはじめ、SK1020, SK1040, S E 1050, S E 1055, S B 1060, S X 1068, S E 1135などの櫛、建物、井戸が調査区全体に広がっており、最も集落らしい様相を示している。これに続くIII期ではSA003に直交してS A 1100, S A 1110の2条の南北櫛があり、櫛内にはS E 1145、櫛外にはSK1070, SK 1075の墓壙がみられる。IV期にはSG030のほか、それ以後と考えられるSX009もある。このように調査区内の多くの造構は時期別に分類できるが、中心となるのはII・III期の櫛による区画の時期であり、櫛とその他の造構との関連性の充実が急がれる。なお、これらの時期はそれぞれI期を鎌倉時代、II期を宝町時代前半期、III期を宝町時代後半期、IV期を江戸時代以降に比定することができる。

櫛はSA003とS A 1100, S A 1110で多少の時期的な差をもって作られているが、SA003は東方の第3次調査区まで続いており、これに南北に直交する櫛は南方の第9・10次調査区にもS A 008, SA010がみられ、長期にわたって櫛を加えていき最終的には東西20~30m、南北50m前後の南北方向に長い方形区画が東西に並んだものと考えられる。ただ本調査区の南側については未だ調査が行なわれていないため明らかではない。また北側についても流失または削平されているために明らかでないが、東側の第3次調査区ではSC005とそれにそってSD006が確認されており、北側にも櫛による区画ないし道路があったことが考えられる。この区画については、内部に多数の柱穴はあるもののどのような構造の建物があったかを推定することはできず、井

戸も櫛も同時期と考えられるものは少ないとから、櫛とその内部がどのような性格・内容をもっていたかは今次の調査では明らかにすることはできなかった。

注

- (1) 広島県教育委員会『草戸千軒町遺跡1971年度発掘調査概報』(1972年)には“e2-g区の埋葬土壙”としてある。
- (2) 第8表ではV期にあたる。第20次調査区ではIV期に相当する遺構は明らかでない。
- (3) 第IV章・第8表に示してある。

付1 掲載遺物観察表

土製品類

●土器

SE977

器種	押印番号	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備考
土師質土器	A I 1	径 6.7 高 1.2	体部外反。平底。底部回転ヘラ切り。体部内外共ロクロナデ。	黄白色。微砂を含む。
	B I 2 3	径 11.4 高 4.0	体部外面に弱い稜。内面丁寧なナデ。体部外面上部ヨコナデ、下部不調整。3 = 径11.8高4.3	黄白色。微砂を多く含む。
磁器	皿 4	径 12.3 高 2.9	平底。口唇部を除き淡青白色の釉がかかる。底部ヘラ切り。ロクロ成形。	景德鎮窯か。
陶器	甕 5	径 50.3 高 83.6	平底だが不安定。口縁外反。端部はやや尖る。最大径80。内外面共タチ・ヨコナデ。内面下部指による引上げ。	偏前燒。灰色。砂粒を含む。完形。

SE975

土師質土器	A I 6	径 7.1 高 1.2	体部外反。平底。底部内面凸凹。回転ヘラ切り。体部内外共ロクロナデ。	黄白色。砂粒を含む。
	B I 7 8	径 11.0 高 3.4	口縁部やや外反しゆがむ。体部外面に弱い稜。内面丁寧なナデ。体部外面上部ヨコナデ。下部不調整。8 = 径11.0高3.6	黄白色。細砂を含む。

SE980

土師質土器	A I 9	径 6.3 高 1.3	体部外反。平底。底部ヘラ切り。体部内外共に手持ちナデ。	茶褐色。微砂を含む。掘方出土。
	A II 10	径 11.5 高 2.8	体部やや内湾。平底。底部ヘラ切り。板目疵。内面・体部外面上部ヨコナデ。	灰白色。細砂を少し含む。掘方出土。
	B I 11 12	径 10.2 高 3.5	体部やや内湾。体部外面に弱い稜。内面・体部外面上部ヨコナデ。下部不調整。12 = 径10.9高3.2	黄灰色。微砂を少し含む。掘方出土。

SX976

土師質土器	A I 13	径 7.2 高 1.5	体部外反。平底。底部回転ヘラ切り。板目疵。内面・体部外面上部ヨコナデ。	明茶色。砂粒を少し含む。
	B I 14	径 12.0 高 4.4	口縁部若干外反。内面丁寧なナデ。体部外面上部ヨコナデ。下部不調整。	黄白色。細砂を含む。
	鉢 15	径 22.0 高 6.8	平底。体部外反。指で押さえて片口をつくる。内外面荒いハケの上をヨコナデ。還元焰焼成。	黒灰色。砂粒を多く含む。瓦器か。

その他

土師質土器	A I 16	径 6.8 高 1.4	体部外反。平底。底部回転ヘラ切り。内面・体部外面上部ヨコナデ。	明茶色。細砂を含む。
	A I 17	径 10.4 高 3.3	体部やや内湾。平底。内面底部凸凹。体部外面に弱い稜。底部回転ヘラ切り。内面・体部外面上部ヨコナデ。	黄白色。細砂を含む。

器種		持闊 番号	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備考
土 師 質	杯 C	18	径 8.0 高 2.9	体部と底部の境がえぐれる。平底。底部へラ切りの後ナデ。内面・体部外面ヨコナデ。	青茶色。微砂を含む。
	椀 A I	19	径 10.0 高 2.6	丸底。底部へラ切り。内面丁寧なナデ。外面上部ヨコナデ、下部三段のヘラケズリ。	黄白色。微砂を含む。灯明皿として使用。
	椀 C I	20	径 6.6 高 1.9	口縁部外反。凹底。内面と外面上部ヨコナデ、下部不調整。底部指で押さえて四ます。	黄白色。微砂を含む。
土 師 質	椀 B I	21	径 10.0 高 3.1	体部外面に弱い後。内面・外面上部ヨコナデ、下部ヘラケズリ。	灰白色。砂粒を多く含む。
	土 盆	22	径 4.7 高 4.8以上	両手。凹底。つば貼付け。三脚は折損して不明。内面ヘラで成形後ヨコナデ。外圍軽いナデ。ミニチュア土器。	墨灰色。瓦器。
	臺	23	口径14.5 最大径 22.8 高 26.3	口縁部外反。平底。肩部は2本のヘラ括き比線の間に列点文。外面と口縁部内周はヘラ調整後ナデ調整。	單出土。外面象褐色、内面暗灰色。
SK990					
土 師 質	皿 A I	40 41	径 6.6 高 1.5	底部と体部の境に強い後。底部・体部共内面ヨコナデ。内面中央一方向ナデ。底部回転ヘラ切り。41=径6.8高1.2	青茶色。微砂を含む。
	杯 A	42	径 10.0 高 3.5	底部と体部の境に強い後。底部内面、体部内外面共ヨコナデ。内面中央一方向ナデ。底部は回転ヘラ切り。	黄灰色。微砂を含む。
	椀 A	43 44	径 9.5 高 2.8	口縁部やや外反。体部の境に弱い後。内面は丁寧なナデ。外面上部弱いヨコナデ、下部不調整。44は粘土円板貼合せ。44=径9.0高2.6	黄灰色。砂粒を多く含む。
土 師 質	椀 B	45 46	径 10.2 高 3.3	口縁部やや外反。体部の境に弱い後。内面は丁寧なナデ。外面上部弱いヨコナデ、下部不調整。高台部ヨコナデ。46=径10.2高3.4	黄白色。微砂を少し含む。
	椀 C	47	径 9.8 高 2.9	口縁部やや内湾。体部の境に弱い後。内面は丁寧なナデ。外面上部弱いヨコナデ、下部不調整。	青白色。微砂を含む。
		48	径 6.6 高 1.9	口縁部外反。体部の境に強い後。内面は丁寧なナデ。外面上部ヨコナデ、下部不調整。	白色。微砂を少し含む。
陶 器	盤 B	49	径 31.5 高(12.4)	口縁部外反。口縁部内外面ヨコナデ。体部底部内面ヨコハケ目。体部外面不調整。底部外面ヨコハケ目。	青白色。微砂を多く含む。スス付着。
	鍋 F	50	径 29.1 高 (7.6)	口縁端部上面を平坦にし、角ばる。体部外面に断面台形のつばを付ける。口縁部外面・つば部ヨコナデ。体部・口縁部内面ヨコハケ目。体部外面不調整。	灰色。微砂を多く含む。遺光焼成。
陶 器	こね鉢	51	径 29.1 高 (8.3)	口縁端部を下外方へ抜型。抜型部は角ばる。口縁部・体部内外面共ヨコナデ。	灰黑色。微砂を含む。口縁部外面に自然釉。

器種		押出番号	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備考
陶器	すり鉢	52	径 33.3 高 13.1	口縁端部を内面へ若干反張。口縁部・体部内外面共ロクロナデ。底部外面不調整。	茶褐色。砂粒を少し含む。備前焼。
	盃	53	径 14.4 高 (4.2)	口縁部若干外反、端部を外方へ折曲げ玉縁とする。口縁部内外面共ロクロナデ。	灰色。細砂を含む。備前焼。
		54	径 16.5 高 (5.0)	口縁部外反、端部を上下に反張。口縁部内外面共ロクロナデ。体部内外面共ヨコナデ。	暗茶色。砂粒を少し含む。常滑焼。
	甕	55	径 42.4 高(11.1)	口縁部や外反、端部を外方へ折曲げ玉縁とする。口縁部内外面共ロクロナデ。体部内外面共ナデ。	灰白色。砂粒を少し含む。備前焼。

SX999

土師質土器	皿 A I A III	56 51 62	径 7.8 高 1.3	口径の大きさによって I・II・III に分ける。口縁部外反。底部と体部の境に強い後。61には底部外面に「五」の字を墨書。57=径7.8高1.1, 58=径10.7高1.6, 59=径11.0高1.6, 60=径11.6高1.7, 61=径13.9高2.5, 62=径15.0高2.3	黄白色。砂粒を少し含む。
-------	----------------	----------------	----------------	--	--------------

SX998

土師質土器	皿 A I A II	64 51 66	径 7.3 高 1.6	底部内面、体部内外面共ロクロナデ。内面中央は一方向ナデ。底部は回転ヘラ切り後ナデ。65=径8.7高1.6, 66=径10.6高1.4	黄白色。細砂を含む。
	椀 B	63	径 11.1 高 3.5	口縁部ほとんど外反せず、体部の後も無い。内面は丁寧なナデ。外面上部ヨコナデ。下部不調整。高台部ヨコナデ。	黄緑色。砂粒を少し含む。
	鍋 B	67	径 27.4 高 (5.4)	口縁部外反。体部内面に強い後。口縁部内外面共ヨコナデ。体部内面ヨコハケ目。外面部分的にタテハケ目。	黄白色。砂粒を含む。

SE1015

土師質土器	皿 A I	86	径 6.8 高 1.4	底部と体部の境に弱い後。体部内外面、底部内面ロクロナデ。中央部は一方向ナデ。底部回転ヘラ切り。板目疵。	黄灰色。砂粒を少し含む。
		84	径 11.3 高 2.6	体部内外面、底部両面ロクロナデ。中央部は一方向ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。板目疵。	黄白色。細砂を含む。
	皿 A II	85	径 12.1 高 2.4	体部外反。底部と体部の境に強い後。体部内外面、底部両面ロクロナデ。中央部は一方向ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。板目疵。	黄灰白色。微砂を含む。
	杯 A	83	高台径 7.6 高 (1.4)	底部と体部の境に弱い後。体部内外面、底部内面ロクロナデ。中央部は一方向ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。板目疵。	黄灰色。細砂を少し含む。
	椀 A	80	径 9.4 高 2.7	口縁部外反。体部との境に後。内面丁寧なナデ。外面上部弱いヨコナデ。下部不調整。	黄白色。細砂を多く含む。

器種	神岡番号	法尺(cm)	形態・成形手法の特徴	備考
土 鉢 質 土 器	椀 B	81 · 82	径 11.2 高 3.5	口縁部外反。体部との境に後。内面丁寧なナデ。外面上部弱いヨコナデ。下部不調整。高台部ヨコナデ。 82=径11.6高3.4
	鍋 A	89	径 40.0 高 (7.2)	口縁端部を外側に拡張。器頸が長い。口縁端部ヨコナデ。体部内面ヨコハケ目、外面タテハケ目。
	鍋 C	88	径 56.0 高(13.8)	口縁部外反。体部内面に弱い後。口縁部ヨコナデ。体部内面ヨコハケ目、外面タテハケ目。
	鍋 G	87	径 23.7 高(11.4)	口縁部外反。体部内面純い後。体部中位に3足を貼付ける。口縁部ヨコナデ。体部内面ヨコハケ目、外面タテハケ目。3足部タテナデ。
陶 器	こね棒	90	径 35.9 高 12.2	口縁端部を外間に折曲げ片口にする。体部内面・外面上部ロクロナデ。下部ナデ。底部外面ナデ。
	甌	92	径 21.3 高 35.3	口縁部外反。端部を上下に拡張。口縁部内外面丁寧なロクロナデ。体部内面ロクロナデ。外面タテナデ。底部内面指押さえ。外面不調整。
		93	径 19.2 高 41.1	口縁部外反。端部を上下に拡張。肩部が張り、体部中位に後。口縁部内外面丁寧なロクロナデ。体部内面ナデ。外面中位までロクロナデ。以下ナデ。底部内面ナデ。外面不調整。
		94	径 47.2 高(15.8)	口縁部外反。口縁部内外面丁寧なロクロナデ。体部内面同心円印きの後ナデ。外面格子目印き。印き縫めの円弧あり。
	甌	95	径 45.2 高(16.6)	口縁部外反。端部を下方に折曲げる。体部内面弱い後。口縁部内外面丁寧なロクロナデ。体部内面ヨコナデ、外面ヨコハケ目。
		96 · 97	径 40.6 高(52.8)	口縁部外反。端部を上下に拡張。肩が張り。体部中位に後。口縁部内外面丁寧なロクロナデ。体部内面ヨコナデ、外面中位までヨコナデ、以下タテナデ。97は肩部に印き。97=径46.6高(24.7)
	磁器	椀	91	径 15.7 高 (6.5)
素地灰白色。高台部を除き薄緑色釉を施す。屯泉窯。				

SE1050

土 鉢 質 土 器	椀 B	102 · 104	径 11.9 高 3.9	体部・口縁部内溝。体部との境に弱い後。底部・体部内面丁寧なナデ。体部外面上部ヨコナデ。下部不調整。高台部ヨコナデ。103=径11.5高3.8、104=径11.3高3.3	淡褐色。砂粒を含む。内面底部に重焼きの痕跡(102)
-----------------------	-----	-----------------	-----------------	--	----------------------------

SE1055

土 鉢 質 土 器	皿 A I	105 · 106	径 7.1 高 1.5	体部や内溝(105)、外反(106)。体部内外面共ロクロナデ。底部内面中央のみ一方向ナデ。底部回転ヘラ切り。106=径7.1高1.5	茶褐色。細砂を含む。
-----------------------	-------	-----------------	----------------	--	------------

器種		神田番号	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備考
土師質土器	杯 C	107 108	径 6.7 高 2.7	底部を厚くし、高台を削出す。体部内外面共ロクロナデ。底部内面のみ一方向ナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。108=径8.0高3.5	褐色(107)、淡茶灰色(108)。スス付着。細砂を多く含む。灯明器に使用。
	杯 A	109 110	径 11.0 高 3.3	体部内外面共ロクロナデ。底部内面中央は一方向ナデ。底部回転ヘラ切り。板目痕(109)。110=11.2高3.6	茶褐色(109)、灰褐色(110)。砂粒を多く含む。
	碗 A	111 112	径 9.7 高 2.8	体部・口縁部内湾。体部との境に弱い棱。底部・体部内面丁寧なナデ。体部外面上部ヨコナデ。下部不調整。(112)は粘土内板貼合せ成形。112=径10.2高2.9	淡褐色。砂粒を少し含む。
	碗 C	113	径 9.8 高 3.4	体部・口縁部内湾。体部との境に弱い棱。底部・体部内面丁寧なナデ。口唇部ヘラナデ。体部外面上部ヨコナデ。下部不調整。	淡黄褐色。器面に凸凹多し。
	碗 B	114 116	径 9.4 高 3.4	体部・口縁部内湾。体部との境に弱い棱。(114)は丁寧なナデ。(115, 116)は雑なナデ。体部外面上部ヨコナデ。下部不調整。115=径9.6高3.0. 116=径10.5高3.1	淡褐色(114, 115)、灰白色(116)。小砂粒を少し含む。
	鍋 C	118	径 30.4 高 (7.6)	体部内湾。口縁部外反させ内湾。頭部内面に棱。体部内面ヨコハケ目、外面タテハケ目。口縁部内外面ヨコナデ。	淡茶褐色。細砂を含む。外面スス付着。
	鍋 B	119 120	径 32.8 高(15.1)	体部内湾。口縁部外反。頭部内面に棱。体部内面ナデ後、ヨコハケ目。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上部タテハケ目、下部ヨコハケ目。120=径34.0高(16.3)	淡茶褐色(119)、淡黄白色(120)。砂粒を少し含む。外面スス付着。
陶器	こね鉢	117	径 29.5 高(11.2)	口縁部を下方に拡張。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面上部ヨコナデ。	暗青灰色。砂粒を含む。

SE1065・1066

土師質土器	碗 B	121 123	径 12.1 高 3.4	体部・口縁部内湾(121, 122)。体部直線的。口縁部外反(123)。底部・体部内面丁寧なナデ。体部外面上部弱いヨコナデ。下部不調整。高台部ヨコナデ。122=径12.7高4.0. 123=径13.0高4.1	淡赤褐色(121)、淡褐色(122, 123)。砂粒を少し含む。底部内面に重焼きの痕跡(121, 122)。
-------	-----	------------	-----------------	--	--

SX1068

土師質土器	碗 B	124 127	径 10.3 高 3.3	体部・口縁部内湾。体部との境に棱。底部・体部内面丁寧なナデ。体部外面上部ヨコナデ。下部不調整。125=径10.2高3.0. 126=径10.1高2.8. 127=径9.9高3.1	淡暗褐色(124, 125) 淡褐色(126, 127)。
-------	-----	------------	-----------------	---	----------------------------------

SE1090

土師質土器	碗 B	128 129	径 13.3 高 4.5	体部・口縁部内湾(128)。体部内湾、口縁部や外反(129)。体部外面上部ヨコナデ。下部不調整。高台部ヨコナデ。129=径12.8高4.1	淡黄白色。砂粒を少し含む。重焼きの痕跡。
-------	-----	------------	-----------------	---	----------------------

SE1105

器種	神國番号	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備考
土師質土器	皿 A 130 131	径 7.0 高 1.4	体部外反(130)。直線的(131)。体部内外面共ロクロナデ。底部内面中央のみ一方向ナデ。底部ナデにより平滑(130)。回転ヘラ切り後不調整(131)。131=7.4高1.5	黄白色。細砂を含む。
	杯 A 132	径(12.7) 高(4.0)	体部やや内湾。体部内外面共ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。	淡茶色。細砂を含む。
	椀 B 133	径 12.0 高 4.1	体部内湾。口縁部外反。体部との境に強い稜。底部・体部内面丁寧なナデ。体部外面上部弱いヨコナデ、下部不調整。高台部ヨコナデ。	灰白色。砂粒を多く含む。重焼の痕跡。
磁器	椀 134	径 16.2 高 6.3	体部内湾。底部・体部・口縁部内外面共ロクロナデ。底部外面、高台部ヘラで削出。体部内面・見込にヘラ引き文様。	素地灰色。暗緑灰色の透明釉。中国産青磁。

SE1120

土師質土器	椀 B 135 136	径 13.2 高 4.4	体部内湾。口縁部外反。体部との境に強い稜。内面丁寧なナデ。体部外面上部弱いヨコナデ、下部不調整。高台部ヨコナデ。136=径13.0高4.4	黄白色。細砂を含む。内面底部に重焼の痕跡。体部外面に布の压痕。
-------	-------------------	-----------------	---	---------------------------------

SE1145

土師質土器	椀 A I 137	径 10.7 高 3.1	体部・口縁部内湾。体部との境に弱い稜。底部・体部内面丁寧なナデ。体部外面上部ヨコナデ、下部不調整。	掘方出土。黄白色。砂粒を含む。
	椀 B 138	径 10.5 高 3.5	体部・口縁部内湾。底部・体部内面丁寧なナデ。体部外面上部ヨコナデ。高台部ヨコナデ。	掘方出土。淡赤褐色。砂粒を少し含む。
	花瓶 139	頸部径 3.0~ (3.6)	長颈瓶の頸部。中央に粘土紐で作った環を別の粘土紐で貼付ける。外面ナデ、内面上部のみナデ。	掘方出土。素地茶色。灰色釉。潮戸焼。

SA003

土師質土器	皿 140 141	径 6.6 高 1.5	体部内外面共ロクロナデ。底部内面中央のみ一方向ナデ(140)。底部回転ヘラ切り(140)、後ナデ(141)。141=径7.9高1.5	赤褐色(140)、茶褐色(141)。
	杯 142	径 11.6 高 3.1	体部直線的。体部内外面共ロクロナデ。底部内面のみ一方向ナデ。底部回転ヘラ切り、板目底。	淡黄白色。細砂を含む。
	椀 C 143	径 10.2 高 4.0	口縁部内湾。底部・体部丁寧なナデ。口縁部内外面共ヨコナデ。体部外面不調整。底部外面ナデ。	淡黄白色。砂粒を少し含む。
	椀 B 144	径 10.5 高 3.0	体部・口縁部内湾。体部との境に弱い稜。底部・体部丁寧なナデ。口縁部内面ナデ。体部外面上部弱いヨコナデ。下部不調整。高台部ヨコナデ。	淡黄白色。砂粒を少し含む。

器種		種別番号	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備考
土師質土器	鍋 B	145	径 32.6 高 (6.2)	体部やや内湾。口縁部外反。頭部内面に棱。体部内面ヨコハケ目。口縁部内外面ヨコナデ。体部外面不調整。	淡茶白色。細砂を含む。
	かまと A	146	上部径 28.5 高 22.0	輪広円筒形の前面に方形の突口。上方前面に瘤。天井部吹放し。粘土帶皮形。円筒部内面ヨコナデ、外面ナデ、端部丁寧なタテナデ。瘤部外面上部ヨコナデ、下部ナデ、端部丁寧なヨコナデ。	黒褐色。砂粒を多く含む。内面上部スス付着。

SE1131

土師質土器	楕 B	147 149	径 11.7 高 3.2	体部・口縁部内湾。体部との境に棱。底部・体部内面丁寧なナデ。体部外面上部ヨコナデ、下部不調整。高台部に指圧痕。148=径11.0高3.4、149=径10.6高3.1	灰褐色。
陶器	甕	150	径 51.6 胴部最大 径 61.4 高(48.4)	体部内湾。口縁部外反、端部折曲げ、上下に拉張。粘土模塑形。体部内面ナデ。口縁部内外面共ロクロナデ。体部外表面長方形の叩き痕。体部割れ目には漆を付ける。	赤褐色。砂粒を多く含む。底部を削り、井筒に使用。當滑焼。

SE1130

土師質土器	楕 B	151	径 11.6 高 3.4	体部・口縁部内湾。底部・体部内面丁寧なナデ。体部外面上部ヨコナデ、下部不調整。高台部ヨコナデ。	淡褐色。砂粒を多く含む。重焼きの痕跡。
-------	-----	-----	-----------------	---	---------------------

黒褐色土

須恵器	壺	152	高台径 11.9 高 (5.5)	体部外反ぎみ。底部低い高台。底部内面・体部内外面共ロクロナデ。底部ヘラ切り後ナデ。	青灰色。細砂を少し含む。
土師器	甕	153	径 32.8 高 (8.8)	体部内湾ぎみ。口縁部外反。頭部内面弱い棱。体部内面ヨコハケ目後ヨコナデ。口縁部内外面共ヨコナデ。体部外表面タテハケ目後ナデ。	淡黄白色。砂粒を多く含む。

その他

土師質土器	皿	154 155	径 6.7 高 1.4	体部内外面共ロクロナデ。底部回転ヘラ切り後ナデ。板目痕。155=径8.0高1.5	黑色土出土。赤褐色(54)、淡褐色(55)。
土師質土器	鍋	157	径 22.6 高 10.6	体部内湾。口縁部外反させ内湾。頭部内面強い棱。体部内面ヨコナデ。底部丁寧なナデ。口縁部内外面共ヨコナデ。体部外表面指揮さえ。底部ナデ。	灰褐色土出土。灰白色。細砂を少し含む。還元焰焼成で瓦質に成る。
施釉陶器	おろし皿	156	径 13.2 高 3.5	体部内湾。口縁部外方へ拡張。その一箇所内側から押出した片口。体部内外面共ロクロナデ。底部回転糸切り。底部内面ヘラで格子目。	素土砂層出土。素地淡灰褐色。緑色透明釉。瀬戸焼。

●土製品

器種	標図番号	法量(cm)	形態・成形の手法の特徴	備考
土錐	73	長 (8.2) 径 4.8 重 160g	管状。上部に半円形の溝。両端磨滅。棒に粘土を巻き全体をナデる。上部の溝も棒状のもので押引く。	表土砂層出土。 赤褐色。砂粒を含む。
	158	長 5.5 幅径 4.0 重 110g	管状。棒に粘土を巻き手すくね。	SE1050出土。 赤褐色。
円板状土製品	159	径 3.2 厚 0.7	土師質土器片の周縁を磨く。	SD1068出土。
	160	径 4.2 厚 1.0	陶器片の周縁を打欠く。	黒色土出土。

石製品類

砥石	74	長 (8.2) 厚 5.4	断面5角形。表面平滑。磨滅著し。	SX999出土。砂岩製。
	75	長 (8.0) 厚 3.6	断面4角形。表面平滑。磨滅著し。	SX999出土。石英粗面岩製。
	101	長 (8.1) 幅 4.0 厚 1.7	直方体。上面は磨減して凹。側面、上下面共削る。	SE1015出土。 頁岩製。
	161	長 (5.8) 幅 4.2 厚 0.9-1.3	直方体。折損部以外は全面磨って面取り。使用により一方が傾斜。仕上砥。	表土砂層出土。
石板	76	長 (5.4) 幅 (6.4) 厚 0.9	直方体の破片。表面に磨耗痕跡。全体を刀子で削り、調整。	SK990出土。滑石製。
石臼	77	径 32.8 厚 12.6	円筒形を成し、上面に断面半円形の刻目を入れる。上面、側面は研磨調整。	SX999出土。花崗岩製。
五輪石	78	一辺 35.6 高 18.4	五輪石の火輪。笠は上下面共円形の線込みあり。全面削り成形。	SX999出土。礫灰岩製。
石鍋	162	口径 28.0 高 (8.0)	外面はノミ状工具で調整。内面は磨く。口縁部外面に舌形のつば。体部内湾。	黒色土出土。外面スス付第。滑石製。

金属製品類

懸仏	79	径 厚	7.6 0.6	周囲に珠文、中心に仏を押出した円形の銅板を木製円板に取付けたもの。銅板端部3箇所を折曲げ板に止め。木製円板は側面を削り調整。銅板は裏から叩いて押出す。	SD1000出土。銅製品。
----	----	--------	------------	---	---------------

木製品類(わら製品も含む)

SE975

器種	神田番号	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備考
玉状木製品	24	長 3.1 径 3.0	丸木の両端を切断、刃物で削って全体を球形にする。	広葉樹材。
漆 風	25	径 9.9 高 1.5	内外面共黒漆塗。	高台内側は漆が剥げる。
つちのこ	26	長 16.3 径3.5~4.5	丸木の両端を切断し削る。中央部は両方から中へ削込み細くする。	広葉樹材。
漆 容 器	27	高 12.7 底径 5.2	竹の両端を切断し、下部に厚0.5cmの板をはめる。内外面共黒漆が付着。上部に2箇所穿孔。	漆塗に使用か。
わら草履	28	長 16.6 幅 8.8	前後両端部欠失。わら繩4本を縄の芯としてわらで横編。裏面と考えられる。厚0.7cm以上。	保存科学措置。
曲 物	29	径 62.0 高 45.8	薄板の内面に刻目を入れて曲げ檜皮で締じる。2重で外側は上下2段に分かれ、上下端にタガ状に軸の扱いものを巻く。	井筒に使用。
木 槌	30	長 14.0 径7.5~8.8	丸木の両端を切断し中央に柄穴を穿ち柄を差込む。柄一部残存。打面は使用痕跡有。	広葉樹材(カシ)。
豊 杵	31	長 127.5 径6.0~7.0	原本の両端を切断し枝を落し、樹皮の付いたまま使用。中央部は長11cm程削って細くし握部とする。両端削減著し。	広葉樹材。

SE971

わ ら	32	長 幅 22.5 2.1	薄い板の先端を削り、三角形に尖らす。	針葉樹材。
-----	----	-----------------	--------------------	-------

SE977

草 履 状 木 製 品	33	長 幅 厚 22.4 9.5 0.2	平面長円形で両側中程に方形の抉り。先端に穿孔。表裏共わら・小枝が付着。板目材。	針葉樹材。
----------------	----	--------------------------	---	-------

SE980

箸状木製品	34 1 36	長 径 24.1 0.8	木を割り細い棒状とし、更に両端を削り尖らす。断面は方形ないし円形。 $35 = \text{長}19.6\text{径}0.8$, $36 = \text{長}15.8\text{径}0.7$	針葉樹材(ヒノキ)。
-------	---------------	-----------------	---	------------

SX976

箸状木製品	37 1 39	長 径 21.2 0.6	34に同じ。 $38 = \text{長}17.3\text{径}0.6$, $39 = \text{長}16.9\text{径}0.4$	針葉樹材。
-------	---------------	-----------------	--	-------

SX998

漆 槌	68	径 径 16.0 0.6	口縁端部を鋭角的。高台はやや高くロクロで削出す。全面黒漆塗り。外面に梅と松を一組として朱絵で描く。横木取り目材。	針葉樹材。
-----	----	-----------------	--	-------

器種	神國番号	法量(cm)	形態・成形手法の特徴	備考
漆塗円形板	69	径 厚 15.9 0.8	端部に穴を開け、木皮を透す。上面に黒漆を塗る。柾目材。	針葉樹材。
	70	径 厚 14.3 0.6	端部垂直。中央に2つ穴を開け、両端に2穴ずつ開ける。上面黒漆を塗る。柾目材。	針葉樹材。
下駄	71	高 厚 12.3 1.0	前齒下駄の底。全体を台形に削る。2箇所に納あり。柾目材。	広葉樹材。
	72	長 幅 22.2 9.6	異形の連齒下駄。後穴は対称位置に開ける。板目材。木表を台として使用。全体は刀子で削り、曲は鋸で成形。	広葉樹材。

SE1015

下駄	98	長 幅 (15.9) 7.2	平面長円形の連齒下駄。前蓋は台の中央。後穴は対称位置に焼火箸で穿孔。板目材。木裏を台として使用。全体を刀子で、齒は鋸で成形。	針葉樹材。全体磨滅。
漆椀	99	径 高 8.8 1.1	全面に黒漆を塗り、内面に朱墨で鳥を2羽描く。横木取り。柾目材。全体をロクロで削出す。	針葉樹材。
呪符	100	長 幅 厚 (4.0) 0.3	短母型の一端を圭頭にする。上部に墨で天中の文字と三宝荒神を描く。下部にも墨痕あり。柾目材。上下端は刀子で、成形し表面は鉈削りか。	針葉樹材。両側欠損。

SE1055

羽子板状木製品	163	長 厚 26.3 0.5	柾目材薄板を羽子板状に削出す。片面に刀物や焼ゴテで格子目。柄の部分に面取り。	針葉樹材。
陽物	164	長 径 21.3 2.9~ 3.1	木皮のついた棒の両端を削る。先端は斜めに溝を切り0.5~1.0cmの間隔を置いて先端を丸く削り、中央部に切込み、先端に沿って鋭利な刃物で2条の線を入れる。基部は1条の溝をめぐらし、先端を丸く削る。	広葉樹材。
下駄	165	長 幅 16.5 7.4	齒を削出した小型の連齒下駄。平面は長円形。鼻緒孔は焼火箸で穿孔。前蓋と先端の間は使用のため凹む。	広葉樹材。他に下駄破片4以上出土。
人形	166	長 幅0.5~1.5 厚0.4~0.7	柾目板を削った横向きの人形。頭部・鳥帽子を削出す。胴部以下細く削り、下端は側面から削る。顔面は墨で眉・目・鼻・口・ヒゲを描き、鳥帽子・頭髪も墨を塗る。	針葉樹材。
柄杓	167	径 高 8.0 (6.0)	薄板を曲げ、底に円形の板をはめる。曲物と底板は木釘で止め。曲物胴部に1穴を開け、柄を差込んだ痕跡あり。柄差込口の反対側の曲物口縁部使用により斜めに磨耗。内部に有機物付着。	針葉樹材。
底板	168	厚 0.7	柾目板を円形に削ったもの。側面に2箇所の木釘穴あり。	半欠。
漆椀	169	径 高 13.0 4.5	内溝する器体に低い高台を削出した浅めの椀。内外面共黒漆地。鳥の上絵を外面に2以上、内面に1、朱で描く。	

注) 301~319は写真図版のみで、観察表には入っていない。法量欄の()は現存値を示す。

付2 古銭一覧表

銭種	初鑄年(西暦)	第3次~第17次	第18次	第19次	第20次	合計
五銖	前漢 元狩5年 (前118)	1	1	0	0	2
貨泉	新 天鳳元年 (14)	1	0	0	0	1
昭光通寶	唐 武德4年 (621)	28	3	0	1	32
乾元重宝	唐 乾元2年 (759)	3	0	0	0	3
宋通元宝	北宋 開宝年間 (968~975)	2	0	0	0	2
太平通宝	宋 太平興國年間 (976~983)	3	0	0	0	3
淳化元宝	宋 淳化元年 (990)	2	1	0	0	3
至道元宝	宋 至道元年 (995)	11	0	0	0	11
咸平元宝	宋 咸平年間 (998~1003)	5	2	0	1	8
景德元宝	宋 景德元年 (1004)	9	0	0	1	10
祥符元宝	宋 大中祥符元年 (1008)	9	0	0	0	9
祥符通宝	宋 " " (")	9	0	0	0	9
天禧通宝	宋 天禧年間 (1017~1022)	11	0	1	1	13
天聖元宝	宋 天聖元年 (1023)	24	0	0	3	28
天聖通宝	宋 " " (")	2	0	0	0	2
明道元宝	宋 明道元年 (1032)	1	1	0	0	2
景祐元宝	宋 景祐元年 (1034)	5	0	0	0	5
皇宋元宝	宋 宝元2年 (1039)	1	0	0	0	1
皇宋通宝	宋 " " (")	56	1	0	2	59
至和元宝	宋 至和元年 (1054)	4	1	1	0	6
至和通宝	宋 " " (")	0	0	1	0	1
嘉祐通宝	宋 嘉祐元年 (1056)	9	0	0	0	9
治平元宝	宋 治平元年 (1064)	9	0	0	0	9
熙寧元宝	宋 熙寧元年 (1068)	34	1	4	0	39
熙寧重宝	宋 熙寧年間 (1068~1077)	1	0	0	0	1
元豐通宝	宋 元豐元年 (1078)	49	2	2	2	55
元祐通宝	宋 元祐元年 (1086)	27	1	2	4	34
紹聖元宝	宋 紹聖元年 (1094)	9	1	0	0	10
元符通宝	宋 元符元年 (1098)	7	0	0	1	8
聖宋元宝	宋 建中靖国元年 (1101)	16	0	0	1	17
大觀通宝	宋 大觀元年 (1107)	9	0	0	0	9
政和通宝	宋 政和元年 (1111)	20	1	2	2	25
宣和通宝	宋 宣和元年 (1119)	4	0	0	0	4
紹興元宝	南宋 紹興元年 (1131)	1	0	0	0	1
淳熙元宝	南宋 淳熙元年 (1174)	1	0	0	0	1
紹熙元宝	南宋 紹熙元年 (1190)	1	0	0	0	1
慶元通宝	南宋 慶元元年 (1195)	4	1	0	0	5
嘉泰通宝	南宋 嘉泰元年 (1201)	1	0	0	0	1
嘉定通宝	南宋 嘉定元年 (1208)	3	0	0	0	3
紹定通宝	南宋 紹定元年 (1228)	1	0	0	1	2
淳祐元宝	南宋 淳祐元年 (1241)	1	0	0	0	1
咸淳元宝	南宋 咸淳元年 (1265)	2	0	0	0	2
大中通宝	元 至正21年 (1361)	1	0	0	0	1
洪武通宝	明 洪武元年 (1368)	7	0	0	0	7
永樂通宝	明 永樂6年 (1408)	10	0	0	0	10
寬永通宝	日本 寛永13年 (1636)	24	2	3	1	30
不明		100	3	5	5	113
合計		538	22	22	26	608

第18次調査出土古銭一覧

出土地点・層位	枚数	銭種(枚数)
SE975暗灰色粘土	1	不明1
SE975暗灰色砂	1	不明1
暗褐色砂質土(SX976内か)	2	五铢1・皇宋通宝1
黒褐色砂質土	4	淳化元宝1・咸平元宝2・元祐通宝1
暗灰色粘土	1	不明1
混礫砂	10	開元通宝3・明道元宝1・至和元宝1・熙寧元宝1・元豐通宝1 紹聖元宝1・政和通宝1・寛永通宝1
表土砂層	3	元豐通宝1・慶元通宝1・寛永通宝1
計	22	

第19次調査出土古銭一覧

出土地点・層位	枚数	銭種(枚数)
SK990 黒褐色土	4	至和元宝1・熙寧元宝1・不明2
SD991 灰白色砂	3	熙寧元宝1・元豐通宝1・不明1
SX1001白色砂	1	天禧通宝1
SX1010石組裏込内	1	政和通宝1
SE1015暗灰色砂	1	熙寧元宝1
表土砂層	9	天聖元宝1・至和通宝1・元祐通宝2・政和通宝1・寛永通宝2 不明2
表採	3	熙寧元宝1・元豐通宝1・寛永通宝1
計	22	

第20次調査出土古銭一覧

出土地点・層位	枚数	銭種(枚数)
SA003茶褐色土	4	天禧通宝1・皇宋通宝2・不明1
SA1100黒褐色砂質土	2	開元通宝1・元祐通宝1
SX1063暗褐色土	2	咸平通宝1・不明1
灰褐色土	9	元豐通宝2・元祐通宝1・元符通宝1・聖宋元宝1・政和通宝2 紹定通宝1・不明1
黑色土	5	景德元宝1・天聖元宝1・元祐通宝2・不明1
表土砂層	3	天聖元宝1・寛永通宝1・不明1
表採	1	天聖元宝1
計	26	

IV 遺構・遺物の検討

1 層位と遺構の年代について

各次調査区を通じての基本的な層位は、下部の湧水灰白色砂層、暗灰色粘土層、灰褐色土層、黒色土層、表土砂層の順ではほぼ平行に堆積している。このうち生活面として使用されたのは灰褐色土層と黒色土層である。灰褐色土層は下牛では鉄分を多く含み茶褐色に変色するが、この灰褐色土の茶褐色部分への境界付近には土師器や須恵器を包含する箇所がある。上半では部分的に暗褐色土の間層をはさむが、遺物はほとんど含まない。上面には柱穴、井戸、土壙などが掘込まれているが全調査区を通じて上部はかなり削平されており、この層の上面ならびに上層の黒色土が残存していたのは第20次調査区の南半のみである。上部の黒色土層から掘込まれた遺構には S A 1110, S E 1131, S E 1145, S K 1070, S K 1075などがあり、他とは識別することができるが、この層はかつて第8次調査で“上層の黒色有機質土層”と呼ばれていたもので上面は標高2.05~2.20mを測り、SC001石敷道路ならびにその周辺の建物はこの層にあったとされている¹¹⁾。これに対し灰褐色土層上部はかつて“下層の暗褐色粘土層”と呼ばれていたもので“上部の黒色有機質土層との間に5~10cmの暗灰色細砂層をはさんでいる”とされているが今回の調査ではS E 1145付近ではそれがみられたが、他では明らかにできなかった。この層は標高1.7~1.9mの間に含まれSA003櫛ならびに下層建物群が検出されているが、今回の調査でもSA003の延長部はこの面まで下げないと明らかにできなかった。なお、第18・19次調査区では前述のとおり上部の黒色土層はみられないが、切合いの状況、出土遺物からすると明らかに新しいとされるものが含まれており、上部は削平されたものと考えられる。ただ部分的に残る黒色土層あるいはS X 999, S X 1001などの高さからすると上層といえども標高でいえば2.00mをやや越すレベルと考えられる。

層位による遺構の検出状況は前述したが、これを土師質土器の編年と対応すると第8表のようにI~VIの6期に大別できる。以下各期毎に主要遺構を挙出しその様相をさぐってみよう。

I期ではS E 1120, S E 1090, S E 977, S E 1105などの井戸、S X 976の井戸状遺構などがある。つまり明らかなものでは井戸などの地下深く掘った遺構のみで、それに伴う建物、柱穴などは明らかでない。井戸は円形曲物型井筒が多く方形井筒でも比較的小型のものがめだっている。

II期の遺構は最も多い。主要な遺構には東西に延びるS A 003櫛をはじめとしてS B 1060建物、S K 990, S K 1101などの土壙、S E 975, S E 980, S E 1055, S E 1145などの井戸があり、調査区全域にわたって分布している。また、この時期の遺構は東側の第3・8次調査区にもS A 003の延長、ならびに下層遺構とされるC 2-S区土壙群、C 2-W・X・Y建物群などがあり、

広い範囲に比較的密集していたものと考えられるが、これらの周囲に広がる遺構群については未だ遺物の再検討が行なわれていないため明らかでない。

III期では18次調査区の場合、上部がほとんど削平されているため明らかではないが、他の地区ではS A 1110などの櫛、あるいはS D 1000などの溝があり、さらには第3次調査区のS C 001、S C 005石敷道路などもある。これは遺構の保存状態にも影響されたと考えられるが、中州の東側部分に比較的多いといふことから、II期の東西櫛SA 003に対し、南北櫛S A 1110、S A 008、S A 010などはやや時期が遅れて作られたということになる。なお、S K 1070、S K 1075の墓塚は層位的にはこの層で発見されたがより上層から掘られた可能性もある。

IV期にはS X 999、S X 1010があるが、その他は明らかではない。ただS X 999は石敷をなしており、III期のS C 005と方向がほぼ一致することからこれと何らかの関係があったとも考えられる。

V期ではS X 1001、S G 030池などがあるが、いずれも単独な形で検出した。時期的にも草戸千軒という集落が洪水により消滅して以後のものであり、集落に伴うものとするより田畠などに関係する遺構と考えられる。

VI期では南北に走る溝S D 978・984・991などがあるが、いずれも昭和初年の河川改修以後のもので流水などにより抉られたと考えられるものもある。

以上のように本年度の各種遺構は6期に分けることができるが、I・V・VI期を除いては相互に関連をもっていたものと考えられる。すなわち、道路・櫛・建物など方向性をもつものについては、東西に延びるS A 003を標準にして今回明らかになったS A 1100、S A 1110、さらに第3・8・9次調査区のS C 005石敷道路、S A 008、S A 010、S A 330、さらにS X 999はほぼ直角方向、すなわちN 20°～30°Wの方向にあり、S B 992、S B 995、さらにはS B 1060もほぼ同方向に向いている。つまり時期的には異なるものが方向では合致するのであり、ここでは当然のこととして連続的に拡張あるいは古い時期のものを踏襲したことが考えられよう。

なお櫛による区画、ならびにそれに含まれる諸遺構の面的な関係については、今回の調査では明らかにできなかった。

2 井戸について

今年度は18基の井戸を調査した。これでこれまでに計70基の井戸を調査したことになる。

井戸はその構造上、井桁・井側・井筒の3部分からなるが、本遺跡の井戸の場合、すでに使用されなくなつて長期間を経ており、また河中に立地することもあって井桁の残ったものはほとんどない。従って以下井側を中心にその概略を記すこととする。

本遺跡の井戸は、内径90cm前後、深さ2m以下の小規模のものが主流を占めるということに特徴がある。材質により大きさは石組井戸と木組井戸に分けることができるが、大半を占める木組井戸は井側の平面形から、方形・多角形・円形に分けることができ、方形井側はさらにその構造から、横桟に縦板をあてるもの(横桟型、横桟支柱型)、隅柱に横桟を組み縦板をあてる

もの(隅柱横桟型), 横板を用いるもの(隅柱横板型)に、円形井側は曲物を重ねるもの(曲物型)と桶側を重ねるもの(桶側型)にそれぞれ細分できる。これらの形態・構造別の調査数は第6表に示したが、方形横桟型、方形横桟支柱型の井側は計35基が調査されており、本遺跡における代表的な井側形態ということができる。この他円形曲物型、方形隅柱横桟型、多角形型などがこれに続くが、全体としては方形井側が多く全体の7割を占めている。

また井側の下部については、約半数の34基が曲物を中心とした井筒をもっており、底に礫を敷くものは7基が確認されている。形態別では円形曲物型ではすべて、方形井側では約半数が井筒をもっており、多角形井側ではほとんどみられないということになる。

こうした井戸の製作は、場所の決定、材料の調達、穴掘り、組立、付属施設の設置などの順に行なわれるが、本遺跡の場合、低地の三角州上に立地し、その底には湧水の灰白色砂層が広がっていることから、どこを掘っても地下水を得ることができる。したがって井戸の場所の決定はもっぱら人間生活とのかねあい、たとえば住居、集落、あるいは他の給水源との関係で選ばれたようである。材料はスギ・コウヤマキなどの湿気に強く割り易い針葉樹が用いられており、曲物、桶側などの既製品を利用するものを除いては、井戸用に斧、楔などを使って割り、手斧で製材したものを使用している。井戸の掘方穴掘りと組立については井側の構造に規制されたようで、円形井側のように既製品を用いるもの、例えば曲物型では掘方は井側径の1~1.5倍と小さくてすみ、多角形井側のように地上で一旦組んだものを掘方内で再度組立てるものでは井側径の4.5~5倍の掘方を必要としている。ただ方形井側の場合は種々な組方があり掘方も1.5~3倍と一様ではない。

次にその分布については、70基のうち中州中で他の遺構と関連をもって調査されたものは34基しかない。これを便宜的に中州北部(大地区表示のD以北:南北約150m)、中部(E~I:南北250m)、南部(J以南:南北約200m)に分けてみると、それに含まれる既調査の井戸は第7表のようになる。つまり、今回を含めた北部では約300m²に1基と比較的密集しているのに対し、中・南部では1,500~5,000m²に1基と分布が粗くなっている。これはこれらに含まれる井戸が

木組	方形	横桟型・横桟支柱型	35基
		隅柱横桟型	6基
		隅柱横板型	1基
		その他	6基
	多角形		6基
	円形	曲物型	8基
		桶側型	3基
	石組		4基

注 不明1があるため総数は69基となる

第6表 井戸形態分類表

地 域	発 掘 面 積	井 戸 数	1 基 当 面 積
北 部 (D 以北)	8,800m ²	29基	303m ²
中 部 (E~I)	6,600m ²	4基	1,650m ²
南 部 (J 以南)	4,400m ²	1基	4,400m ²

第7表 井戸地域別数量表

必ずしも同時期ではなく長期間に作られたり作り替えられたりした、すなわち大づかみにみて北部では時期的に古い造構と新しい造構が混在しているのに対し、南部では古い造構が比較的小ないということ、また南部では発掘区中央にSD760大溝が走っており、飲料水を除いた給水は必ずしも井戸でなくとも可能なことなどによることがあげられよう。

なお、井戸の縦年の位置づけについては未だ明らかでないが、大づかみにみて、方形井側は全時期を通じてみられるのに対し、円形曲物型井側には古いものが多く、円形桶型井側や石組井側には新しいものが多いという傾向がある。

こうした状況にある本遺跡の井戸において、今回調査した井戸はどういった位置づけがなされるであろうか。まず位置的には調査区が北部の井戸の多い地域に位置していることもあって18基を調査し、面積との対比では実に240m²あたり1基の密度になる。これは現実的には想像できないほどの密度であり、同時期に併存していたものの摘出が必要である。次に形態・構造と時期差について考えてみると、今回方形11基、多角形2基、円形5基を調査したが、その縦年の位置づけは第8表のようになる。これはいずれも井戸内の遺物の年代で必ずしも製作時の年代ではないがI・II期に限られていることがわかる。I期には8基あるが、うち4基までは円形曲物型井側で他は方形横桟型井側が占めている。その他はすべてII期に含まれるが、II期では前記したものの他、方形隅柱横桟型や多角形井側が含まれ多様化の様相を示していく。また規模では形態・構造に関係なくI期のものは比較的小さなものが多いのに対し、II期ではやや大型になっており掘方も円形曲物型井側では曲物に入るだけの小さなものから曲物径の3倍以上もある大きなものへと移っていることがわかる。

次に井戸と他造構との関係については、前述のとおり各調査区毎に造構の保存状態は異なっており、また造構自体も長期間のものが混在していることもあって、一時期に併存していたと考えられるものはごく限られ、住居・集落の中での井戸の位置づけは困難である。たとえばI期では明らかな造構は井戸しかなく、他造構との関係は全くわからないし、IV期以降では他の造構は若干あっても井戸がないという状況がみられる。またII期にあってもその中ではさらに時期的に細分されるし、それに伴って各造構間のつながりが薄れていくということから遺跡内での井戸の位置づけは現在のところ非常に困難であると言えよう。ただ井戸と住居・集落との関係については、たとえば戦国大名の館跡で知られる福井県朝倉氏遺跡本館跡では広い敷地内に多数の建物と3基の井戸が確かめられており、用途によって井戸を変えていたことが知られ、鎌倉初期の農村とされる大阪府宮田遺跡、室町末期の農村とされる京都府上久世荘城の内遺跡などでは、住居の規模の差こそあれ個々の住居は一つの井戸を伴っていたとされている。また同時期の村落とされる大阪府都家川西遺跡では竪穴式住居跡に伴って数戸に1基の割で井戸があったとされており、「洛中洛外図屏風」などの絵にみられる室町末期の京都では道路に囲まれた数戸の家が共同で1基の井戸を使用しているという情景も描かれており、井戸の所有にも種々のあり方を見ることができる。こうした井戸とその使用者との関係は各種造構の保存状態の

必ずしも良くない本遺跡においては重要な意味をもち、遺跡内で単独に発見されることの多い井戸を手がかりとした集落復原の方法も試みる必要があろう。

3 土器の編年について

各次調査で報告された各遺構の一括遺物は古いものから新しいものまで各時期のものがある。これらの遺物の編年的研究はまだ始まったばかりであるが、先に報告した土師質土器編年試案に基づいて、各遺構相互の時期関係を考えてみたい。

遺構を述べる前に先のニュースと重複するが編年案の概要を述べておく。

今回の編年案は土師質土器の中でも、比較的変遷の捉えやすい椀・杯・皿について行なった。草戸千軒町遺跡の場合、層位的に土器を捉えることが極めて困難なために型式的な編年にたよらざるをえないのが現状である。そこで編年を行なうにあたっては一時期に埋没したと考えられる井戸や土壙などの遺構から一括して出土した土器群を一応ひとつの様式と見て、それらの比較検討を行なった。

さて、これらの土師質土器の編年を考えるために土師質土器の中では最も出土量が多く、ほとんどの土器群の中に含まれており、他の器形に比べ形態の変化、成形手法の違いが捉えやすい椀Bをとりあげ、それをもとにして土器群の変遷を考えてみよう。

11~12世紀頃に比定される大門八幡神社遺跡出土の椀Bと15世紀後半頃に比定される草戸千軒町遺跡SD760出土の椀Bとを比べると、口径・器高共に小型化していること、口縁部外面のヨコナデが狭くなり弱くなっていること、口縁部の外反が少なくなり、外面の後が弱くなっていること、高台が矮小化し形骸化していることなどがあげられ、これらの変化が時間的推移に比例していると考えられる。草戸千軒町遺跡から出土している椀Bを含む土器群を以上の変化の度合に基づいて並べると第21図のようになる。SE1120の椀Bは大門八幡神社遺跡出土の椀Bに形態・成形手法共に類似しており、草戸千軒町遺跡の中でも最も古く位置づけられる。SE1120からSD760までの間にはSE1105からSK790の各土器群が位置づけられ、小型化とともに調整が粗雑化しており、SK990では口縁部外面のヨコナデを施さないd手法の椀が出現し、次第にその量が多くなっている。このような椀で見られる変化は他の杯A・皿Aなどでも見られ、時間的推移と共に小型化・調整の粗雑化が現われている。これら椀・杯・皿はそれぞれが独自に変化しているのではなく、互いに関連しあいながら変化している。

SD760では新たに皿A II・IIIが出現しており、それ以前では見られない。皿A II・IIIは付近の16世紀から17世紀にかけての山城跡で出土しており、皿のみの組合せであり、椀・杯類は全く見られない。そうすると草戸千軒町遺跡で皿A I・II・IIIしか出土していないSD510やSD550などはSD760の後に位置づけられる。以上のことから各土器群の変遷を図にすると第21図のようになる。次に土器群の変遷過程の概略を述べる。

草戸千軒町遺跡の遺構に伴う土器のうちで最も古い段階のものはSE1120の土器である。S

E 1120の組合せは椀B・杯A・皿A Iである。S E 1120からS E 977までの段階は調整が粗雑になるものの、形態成形手法は大きく変化することなく、器形の組合せも変化していない。S E 1015の段階には椀Aが出現しており、各器形共に形態が大きく変わり、小型化が著しくなり、全体の調整も粗雑になっている。SK990の段階では椀Cが出現している。杯・皿類においても底部外面が不調整となり、器壁が薄くなっている。また、この時点以降には杯・皿類の中には硬く焼けてしまい、赤褐色を呈するものが見られる。S E 990からSK790までの段階では調整が粗雑になり、d手法の椀が見られるようになり、小型化が進んでいる。しかしながら器形の組合せは変化していない。SD760の段階には皿A II・IIIが出現している。また椀にはd手法の椀が多くなり、調整の粗雑化が著しくなる。またこの時点から椀・杯類の数量が減少している。S D 510の段階には椀・杯類がなくなり、皿A I・II・IIIのみの組合せとなる。皿はロクロを使用して成形するためか、以前のものに比べほとんど形態・成形手法の変化が見られない。

以上のように土器の形態・成形手法・器形構成の変遷を中心にしてS E 1120からS D 510の段階まで9段階を設定した。さらにこれらの変遷の中での大きな画期的段階としてS E 1015・S D 760・S D 510の3つの段階をあげた。これら3つの段階で区切られる4つの時期をI期(S E 1120～S E 977)、II期(S E 1015～S K 790)、III期(S D 760)、VI期(S D 510以後)と区分した。さらに伊万里焼等の日本製磁器が出現し、土師質土器が急速に減少する時点をひとつの画期と考え、それまでをIV期とし、それ以降をV期と区分した。

各時期の絶対年代については、年代の決め手となる資料が少ないとからほとんど明らかにならないが、大まかな年代は推定することができる。I期の上限はS E 1120の土器が大

第8表 遺構編年表

時 期	第 18 次	第 19 次	第 20 次
I 期	S X 976		S E 1120 S E 1090 S E 1105 S E 1065 S E 1066・S E 1030
	S E 977		
II 期	S X 974	S E 1015	S E 1135 S E 1050・S K 1101 S A 003 S E 1055
	S E 975・S E 971	S K 990	
III 期	S E 980・S E 970	S K 1009	S X 1068・S K 1040
		S X 998 S D 1000	S A 1110・S A 1100 S E 1145
IV 期		S X 999 S X 1010	
V 期		S X 1001	S G 030
VI 期	S D 978	S D 978・S D 984 S D 991	

第21図 土師質土器編年図

器形 様式	椀B	椀A	椀C
SE 1120			
SE 1105			
SE 977			
SE 1015			
SK 990			
SE 1055			
SK 790			
SD 760			
SD 510			

門八幡神社遺跡の土器と類似しており、それらの土器が11世紀頃に比定されているザブ遺跡F区No.3土壤のものよりも新しく考えられることから、12世紀頃と考えることができる。II期はSK990が14世紀前半、SD760が15世紀後半と考えられることから上限を13世紀後半から14世紀前半頃、下限を15世紀後半頃に位置づけられる。IV期はSD760よりも新しいことから上限を15世紀後半から16世紀前半頃と考えることができる。V期の上限は日本で磁器生産が始まる17世紀前半をあてることができ。V期の下限については寛文13年(1673)の大洪水で草戸千軒町が埋没したという文献の記載の時点を考えているが、その後も田畠が作られており、それらに伴う遺構の存在が考えられることから、土器によって寛文13年以前と以降とを明確に分けることができない。そこで一応大正12年に始まった芦田川改修工事までの長い期間をV期とした。さらに改修工事やその後の流れによってできた溝などの遺構をVI期として区別した。

以上の時期区分は土器の編年の上での区分であって遺構の作られた時期と一致するかどうかは不明であるが、現状では遺構相互の時期関係が層位や切合いなどで具体的に明らかにならない以上、一応土器の時期区分をもって、遺構の時期を考えたい。表にすると第8表のようになる。これらの遺構の時期はさらに伴出遺物によって細分することができるが、現在のところはこのままで掲げておく。

4 土器の使用状況

一遺構内で出土した土器の数量表は各調査の章中と1975年度年報に掲載した。これらの数量表を基にして当時の土器の使用の状況を考えてみたい。

食器として使用された供膳の土器には陶器や磁器も少量出土しているが、基本的には土師質土器が使われている。SK990・SE1055などの遺構では全土器の90%以上を占めている。器形としては碗・杯・皿の三種があり、この三種が組合されて使われていたものであろう。I～II期には碗・杯・皿A Iがあり、碗が最も多く、その内の60%以上を占めており、続いて皿A I・杯となる。III期には皿A II・皿Bが出現しており、皿の方が碗・杯よりも量が多くなっている。IV期には碗・杯がほとんどなくなり、全て皿となっている。皿I・II・IIIの比はSD510で約14:6:1である。

以上、食器として使われた碗・杯・皿の中には口縁に煤が付着し、灯火器として使用されたものもある。SE1055の完形土器碗A・Bの163箇の内10箇、SD510の完形土器皿A 650箇の内45箇には口縁に煤が付着している。また杯Cはほとんどのものに口縁に煤が付着しており、灯火器として使用されている。

煮炊きを行なう煮沸の土器は瓦質土器の鍋もあるがほとんどは土師質土器の鍋・蓋が使用されている。SK755・SE1015では全土器の10%以上を煮沸土器が占めている。鍋・蓋には用途の違いによるものであろうか、様々な器形があるが、鍋B・C・Fが量的に多く、一般的に使用されていたものと考えられる。他の煮沸器としては石製の鍋があるが、量は非常に少なく、土

製の鍋とは用途が違うのではあるまいか。また煮沸の土器に比べ、移動できるかなどの出土量は少なく、作り付けのかまどや鉄製の五徳などの使用が推定される。

調理を行なう土器には材質による違いがあまりないためか陶器・瓦質土器・土師質土器が共用されている。器形にはすり鉢・こね鉢・おろし皿などがあり、備前焼すり鉢が最も量が多い。SK755で全土器の10%、SE1015で全土器の5%を調理の土器が占めている。

貯蔵を目的とした土器は全て陶器で占めており、小型の壺と大型の甕との器形がある。小型の壺は量が非常に少なく、備前焼・常滑焼がある。大型の甕は備前焼が最も多く、常滑焼・鬼山焼と続いている。SD760で全土器の25%、SE1015で全土器の20%を甕が占めている。

また、灰釉陶器や輸入磁器には供膳の土器や小型の貯蔵の土器などの器形があるが、非常に量が少なく、SE1015で全土器の3%、SK990で全土器の1%以下しか出土しておらず、これらの土器が全器種構成の一要素とはなりえないことを示している。これらの土器は日常だれでもが使えるというものではなく、使用者はかなり限られた人々であったと考えられる。

注

- (1) 広島県教育委員会「草戸千軒町遺跡1972年度発掘調査概報」1973年
(2) 井戸の各部分について、本研究所では以下の名称を用いている。

井桁…井戸の地上部分、人畜が落ちたり汚

水の流入を防ぐ

井側…井戸の地下部分、井戸本体

井筒…井側の底に埋める小型の筒

掘方…井戸設置のために掘った穴

縦板…井側を構成する中心的材で板を縦に使

用

横板…縦板と同じで板を横に使用

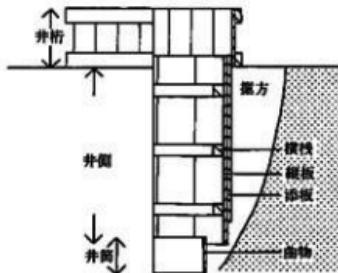
添板…縦・横板接合部を外側から補強する材

隅柱…縦・横板の骨組として井側四隅に立てた柱

横桟…縦板の骨組として横に枠組した材

支柱…横桟間を支える柱

- (3) 小都隆「草戸千軒町遺跡の井戸I-形態分類を中心として-」(調査研究ニュース「草戸千軒」No43 1977年)
(4) 山内文「植物性出土品・木材」(『草戸千軒町遺跡-第11~14次発掘調査概要-』、1976年)
(5) 小都隆「草戸千軒町遺跡の井戸II-製作方法を中心として-」(調査研究ニュース「草戸千軒」No49 1977年)
(6) 掘方内と井戸内の出土遺物を各種井戸で比較検討したが、大半は同一様式内に含まれるものであり井戸構築から埋没まではそれほど時間差をみとめられない。
(7) 福井県教育委員会「特別史跡-衆谷朝倉氏遺跡IV」1973年



第22図 井戸の名称

- (8) 高根市史編さん委員会「高根市史」第6巻考古編 1973年
- (9) 歴史手帖編集部「上久世荘の発掘」(『歴史手帖』5-4 1977年)
- (10) 原口正三「古代・中世の集落」(『考古学研究』23-4 1977年)
- (11) 志道和直「草戸千軒町遺跡出土の土師質土器編年試案」(調査研究ニュース『草戸千軒』No.48 1977年)
- (12) 志道和直「平安時代の土器生産II」(調査研究ニュース『草戸千軒』No.45 1977年)
- (13) 広島県教育委員会「草戸千軒町遺跡-第15次~17次調査概要」 1977年
- (14) 神辺町教育委員会「神辺城跡発掘調査報告」 1977年
- (15) 河瀬正利他「ザブ道路」(広島県教育委員会「山陽新幹線建設地内遺跡発掘調査報告」 1973年)
- (16) 宮原直仰「備陽六郡志」 1804年頃

V おわりに

本年度は中州北部の8 LAB～CC区を横断する約4,400m²を第18～20次調査として実施した。この地域は從前の第3・7・8次調査区の東側にあたり、石敷道路や橋、それに関連する建物・井戸などの遺構が面的に明らかになるものと予想されていたが、調査区によっては上部遺構がかなり削平された部分もあり、必ずしも予想通りの成果をあげるには至らなかった。各次調査の概要についてはできるだけ客観的な立場で田章に記し、それらが派生する二・三の問題についても田章で若干の検討を行なった。

以下本年度の調査成果を簡単に整理しておく。

遺構について 層位と遺構の関係については隣接する從前の調査区でも種々の観察が行なわれているが、それらが狭い範囲の部分的な層位観察、あるいは切合い関係だけでの検討に留まっていたため必ずしも広範囲にわたる普遍的な相対年代を明らかにするものではなかった。そこで今年度は発掘調査と併行して進みつつある土師質土器の編年と層位・遺構とを対比させて年代を考えることとした。その結果遺構は、I、曲物井戸を中心とした鎌倉時代、II、SA003東西橋や建物・井戸など広範に遺構の広がる室町時代前半期、III、SA1100、SA1110などの南北橋や井戸のみられる室町時代後半期、IV、SX999石敷などの室町時代末期、V、近世磁器を出土するSG030の時期、VI、現代。の6期に大別できた。つまりこのことは遺構は多くても同時期に併存した遺構の数はそれほど多くないということを示しているのであり、しかも遺構面は流水などにより相当削られており、同時期の遺構の揃出、その相互関係などについてはまだ明らかでない部分が多い。

本年度の検出遺構で特筆されることにはまず橋、石敷、建物などの遺構の方位・規格があげられよう。これは前述のとおりII～IVと時期的に幅があつても方向的には一致しており、遺跡自体が前時期のものを踏襲しながら発展していったことがうかがえる。また井戸については本年度18基を調査したことから從前のものもあわせて分類し、ごく大づかみながら方形横桿型井戸が全時期を通じてみられるのに対し、他の形態では円形曲物型井戸→方形隅柱横桿型井戸→多角形型井戸→円形桶型井戸→石組井戸などといった変遷があることが明らかになった。さらに建物・埋葬土壤についても若干ながら調査例を増し、遺跡の全体像解明のため貴重な資料となつた。

遺物について 今年度も土師質土器、陶磁器などの土製品が多量に出土した。このうち土師質土器については、井戸などからの一括遺物を器種構成、陶磁器の編年などと成形・調整手法の分類により、はじめてその編年を試みた。その内容については細分化、絶対年代との対比、伴出遺物との比較などにおいて未だ検討を要するが、他の遺物・遺構との比較において重要な年代決定の手がかりとなっている。これに比して木製品の出土は少なかったが、そのうちでは

井戸内より呪符、人形、陽物など信仰に関するものが多く出土しており、呪符・人形についてはそれぞれ個別に検討も加えられている。この他には完形のわら草履も出土したが、本遺跡では初発見であり、全国的にも出土例が少ないとから現在保存のため科学処理を行なっている。

以上のように本年も与えられた遺跡に対し、できる限りの努力をつくして調査を行なった。しかし遺跡は広く、今年度までの広範囲の調査を合しても全体からみれば遺跡のごく一画にしかすぎない。調査の歴を入れれば入れるだけ全体像の解明には近く、しかし反面検討すべき問題も多く出てきつつある。今後は遺跡の調査のみならずそれに倍した総合的な比較研究が必要である。

注

- (1) 福山市教育委員会「草戸千軒町遺跡1965年度調査概報」 1966年
広島県教育委員会「草戸千軒町遺跡1972年度発掘調査概報」 1973年
- (2) 水野正好「三宝荒神符と天中の呪句」(調査研究ニュース「草戸千軒」No.47 1977年)
松下正司「中世の人形—草戸千軒にみる俗信資料の一端—」(『考古論集』 1977年)

既往の調査成果一覧表

次数	期間	面積	調査主体・調査費	調査地域	主要遺構	主要遺物
第1次	1961年 (昭和36) 8月7日 ~ 8月12日	150m ²	福山市教育委員会 福山市文化財保護委員会 福山市教育委員会 100,000円	中州中央部 (A地区) B + C + D +	礫石 砾石柱 柱列 井戸.....1	●土製品…青磁・青白磁・灰白磁・傷痕地・瓦滑地・龜山地・瓦質土器・土師質土器 ●木製品…建築用材、漆椀 ●金属製品…鉄鉋 ●古鏡
第2次	1962年 (昭和37) 8月9日 ~ 8月14日	160m ²	同上	中州中央部 (B地区) (E +)	礫石 砾石柱 柱列 井戸.....4	●土製品…青磁・珠光青磁・灰白磁・傷痕地・瓦滑地・龜山地・碧津地・瓦質土器・土師質土器 ●石製品…石鏡 ●木製品…火ア、屋、下駄、桶、漆塗用材 ●金属製品…鉄鉋 ●古鏡
第3次	1965年 (昭和40) 12月11日 ~ 12月26日	750m ²	福山市教育委員会 広島県教育委員会 文化財保護委員会 500,000円 福山市教育委員会 250,000円 広島県教育委員会 250,000円 計 1,000,000円	中州東側北部 (F - G区) 福助東 約100m (E区) 西方明王院参道 (W区)	礫および柱列 石造道路.....1 長方形区画 圓形周溝 土壤.....2	●土製品…青磁・青白磁・灰白磁・傷痕地・瓦滑地・龜山地・瓦質土器・土師質土器・土器 ●石製品…石鏡 ●金属製品…鉄鉋、鉄刀、環状刀資金具、鐵錠 ●古鏡…22
第4次	1968年 (昭和43) 7月15日 ~ 11月9日	1,000m ²	広島県教育委員会 文化庁..... 1,500,000円 広島県教育委員会 1,500,000円 (福山市教育委員会委託費) 750,000円 計 3,750,000円	中州東側高水側部 (H地区)	礫石建物 柱穴 窓 土壤 井戸.....4	●土製品…青磁・青白磁・灰白磁・傷痕地・瓦滑地・龜山地・瓦質土器・土師質土器・土器 ●石製品…鏡・石鏡・砾石・石鏡 ●木製品…舟物・杓子・きぬた・下駄・漆器 ●金属製品…鉄鉋、山刀・鉄棒・小銅鏡 ●古鏡…163
第5次	1969年 (昭和44) 7月15日 ~ 9月30日	1,400m ²	広島県教育委員会 文化庁..... 1,500,000円 広島県教育委員会 1,500,000円 計 3,000,000円	中州東側北部 小中州 高水側部 (C 1 - 2区) (D 1 - 2区)	礫および柱列 (壁?) 石造建物 砾石 井戸.....11	●土製品…青磁・珠光青磁・青白磁・白磁・傷痕地・瓦滑地・瓦質土器・土師質土器・土器・くいごの洞口 ●石製品…鏡・砾石・石鏡 ●木製品…舟物・櫛・下駄・人形・施錠工具・木札・漆器 ●金属製品…鏡・杓子・斧・斧 ●古鏡…50
第6次	1970年 (昭和45) 7月20日 ~ 10月30日	600m ²	同上	中州東側南部 小中州 (C 9 - 11区) (D 6 - 11区) 各地區井戸	《台風による洗失、倒壊》 井戸の調査 井戸.....14	●土製品…青磁・青白磁・傷痕地・瓦滑地・瓦質土器・土師質土器・土器 ●木製品…櫛先・櫛・草蓆櫛・人形・木札 ●金属製品…刀子・茎・鍔口・刃・鍔把子 ●古鏡…27
第7次	1971年 (昭和46) 7月20日 ~ 10月22日	1,200m ²	同上	中州東側北部 (C 1 ~ 2区)	柱穴 土壤.....11 窓.....4 基壇.....1 櫛.....1 井戸.....11	●土製品…青磁・珠光青磁・傷痕地・瓦滑地・瓦質土器・土師質土器・円形土板 ●石製品…砾石 ●木製品…下駄・きぬた・杓子・舟物・箆木玉・漆器 ●金属製品…刀子・小柄・包丁・鉤・剪・懸仏(?)・笄 ●古鏡…45

次数	期間	面積	調査主体・調査費	調査地域	主要遺構	主要遺物
第8次	1972年(昭和47) 7月27日 10月6日	700m ²	広島県教育委員会 文化庁……1,500,000円 広島県教育委員会 ……1,500,000円 計 3,000,000円	中州東側北部 (B1区) (C1~2区)	柱穴 礫石 柱列 土壤 塗……1 井戸……1	●土製品…青磁、焼光青磁、青白磁。吉州窯鉢片、建物焼天目片、備前焼、瀬戸焼、伊万里焼、唐津焼、須恵器、綠釉陶器、瓦質土器、土師質土器、土器、かまと、よいごの羽口 ●石製品…鏡、礫石、石板 ●金屬製品…刀子、鏡、灯 ●木製品…下駄、草履技术製品、筈状木製品、刷毛、櫛、木香、漆器 ●古鏡…32
第9次	1973年(昭和48) 7月23日~ 9月8日	600m ²	広島県教育委員会 (草戸千町造跡調査所)	中州東側中央部 (CD区)	柱穴 土壤……31 塗……2 繩……2	●土製品…青磁、吉州窯鉢片、高麗青磁、青白磁、白磁、綠釉陶器、須恵器、土師器、黒色土器、灰陶陶器、備前焼、瀬戸焼、龜山焼、土師質土器、土器、かまと、大倉、瓦、埴輪草状土製品、円筒状土製品
第10次	1973年(昭和48) 9月11日~ 11月24日	600m ²	文化庁……5,836,000円 広島県教育委員会 ……9,112,000円 計 14,948,000円	中州東側中央部 (CD区)	建物……2 土壤……26 繩……5 塗……7 地……2	●石製品…鏡、礫石、石鏡 ●木製品…筈状木製品、杓子、漆器、曲物 木札、人形、瓶、壺、墨等水刀、刀状木製品、下駄、草履技术製品、平縫袋、撚先籠 ●金屬製品…鏡 ●古鏡…133
第11次	1973年~24年(昭和48、49) 11月26日~ 12月27日 2月25日~ 4月23日	600m ² 200m ²	中州東側中央部 (CD・CE・ DD・DE区)	建物……1 土壤……5 墓塚……1 繩……6 塗……11 井戸……1	●土製品…青磁、高麗青磁、白磁、施釉物、瀬戸焼、龜山焼、瓦質土器、土師質土器、円筒状土製品、よいごの羽口、埴輪草状土製品	
第12次	1974年(昭和49) 4月30日~ 7月4日	600m ²	広島県教育委員会 (草戸千町造跡調査所)	中州東側中央部 (CE・DE区)	柱穴……3 繩……2 土壤……3 塗……6 通学石槽……2	●土製品…青磁、高麗青磁、白磁、施釉物、瀬戸焼、龜山焼、瓦質土器、土師質土器、円筒状土製品、よいごの羽口、埴輪草状土製品
第13次	同年 7月22日~ 11月22日	1,600m ²	文化庁……8,500,000円 広島県教育委員会 ……10,518,000円 計 19,018,000円	中州東側中央部 (CE・CF・ DE・DF区)	繩……2 土壤……10 しがらみ……1 通学石槽……1 地……1	●石製品…石鏡、礫石、宝鏡印塔、五輪塔等 塔塔、石鏡、鏡 ●木製品…筈状木製品、漆器、折敷、笠形、柄付櫛、木札、下駄、草履技术製品、轡輪、つちのこ、杓子、えり、籠 ●金屬製品…くわわ、鉄瓶 ●古鏡…34
第14次	1974、75年(昭和50、51) 10月7日~ 12月25日 2月4日~ 3月13日	3,600m ²	中州東側中央部 (CG・CH・ CI区)	土壤……4 繩状……1 地……1 石槽……1 しがらみ……3 井戸……4	●土製品…青磁、白磁、染付、繪付、綠色陶器、須恵陶器、須恵器、土師器、備前焼、瀬戸焼、龜山焼、土師質土器、土器、円筒状土製品、土器、よいごの羽口 ●石製品…礫石、石鏡、鄭九石製品、石鏡	
第15次	1975年(昭和50) 4月1日~ 7月31日	1,800m ²	広島県教育委員会 (草戸千町造跡調査研究室)	中州東側南部 (BJ・BK・ CJ・CK区)	柱穴 柱列……2 繩……6 土壤……18 墓塚……1 地……3 繩……13	●土製品…青磁、白磁、染付、繪付、綠色陶器、須恵陶器、須恵器、土師器、備前焼、瀬戸焼、龜山焼、土師質土器、土器、よいごの羽口 ●石製品…礫石、石鏡、鄭九石製品、石鏡
第16次	同年 8月1日~ 9月30日	900m ²	文化庁……9,105,000円 広島県教育委員会 ……12,424,000円 計 21,529,000円	中州東側南部 (BK区)	土壤……1 繩……1 しがらみ……3 地……7	●木製品…箸、筈状木製品、杓子、漆器、折敷、柄付櫛、曲物成板、ヘラ、つちのこ、えり、籠、木札、伝袋、平縫袋、腰袋 ●金屬製品…鉄瓶、斧、懸仏 ●古鏡…33
第17次	同年 10月1日~ 12月25日	1,700m ²	中州東側南部 (AK・AL・BK・ BL・BM区)	柱穴 土壤……7 井戸……1 繩……10		

付編 調査・研究・普及活動年報1976

I 調査研究活動

a 草戸千軒町遺跡調査研究

1976年

4月5日 第18次調査開始

6月11日 第18次調査終了

6月18日 草戸千軒町出土わら草履の保存指導（奈文研・沢田正昭氏）

7月21日 第19次調査開始

10月18日 第19次調査終了

10月19日 第20次調査開始

12月3日 第5回草戸千軒町遺跡調査研究指導委員会開催

12月25日 第20次調査終了

1977年

2月14日 第21次調査準備開始

b 外部調査

尾道市中世遺跡の立会調査 尾道市土堂一
丁目 6月26日・6月28日 尾道市教委
(松下・篠原)

福山旧上水道実測調査 福山市御船町 1
月11日 福山市教委 (福井)

c 研究発表

1976年広島史学研究会大会 考古・民俗部
会 10月31日 (於広島大学)

「草戸千軒町遺跡第16・17次の調査」(鹿
見)

「備後国分寺の調査」(松下)

第2回考古学の研究会 2月20日 (於草戸
千軒町遺跡調査研究所)

「草戸千軒町遺跡第18~20次調査の成果」

(篠原)

「備後国分尼寺について」(松下)

「広島県の家形石棺」(福井)

「大門八幡神社遺跡出土の土師器」(志道)

II 普及活動

a 現地説明会

第10回 5月29日 (志田原) 第18次調査

第11回 9月18日 (篠原) 第19次調査

第12回 11月20日 (小郡) 第20次調査

b 草戸文化財教室

第34回 4月17日「平城宮跡の発掘」(奈文
研・森郁夫氏)

第35回 5月15日 「遺跡・遺物の保存」

(文化庁・坪井清足氏)

第36回 6月19日 「海外における文化財の
科学」(奈文研・沢田正昭氏)

第37回 7月17日 入門教室I「考古学入
門」(松下)

第38回 8月21日 入門教室II「旧石器時
代」(福井)

第39回 9月18日 「草戸千軒町遺跡第18次
調査の概要」(志田原)

第40回 10月16日 入門教室III「縄文時代
I」(福井)

第41回 11月20日 入門教室IV「縄文時代
II」(小郡)

第42回 12月18日 「草戸千軒町遺跡第19次

調査の成果」(篠原)

第43回 1月22日 「吉備の中の備後—6世紀を中心としてー」(岡山山陽学園・西川宏氏)

第44回 2月19日 「イランにおける考古学的調査II」(広島大学・潮見浩氏)

第45回 3月19日 「草戸千軒町遺跡第20次調査の成果」(小都)

c 調査研究ニュース発刊

『草戸千軒町遺跡』

No34 <3巻12号> (4月17日発行)

1975年度草戸千軒町遺跡調査の概要(松下・鹿見)

研究日誌抄(1975年12月~1976年3月)

『草戸千軒』

No35 <4巻1号> (5月15日発行)

開所3周年をむかえて(松下)

草戸千軒町遺跡出土の下駄(県教委文化課・加藤光臣)

資料紹介「神辺御領遺跡出土の石棒」(福井)

No36 (6月19日発行)

竹筒をのこした一井とその秘呪(文化庁・水野正好氏)

No37 (7月17日発行)

草戸千軒町遺跡出土の木製塔婆類(志田原)

資料紹介「中島・丹花遺跡出土の土師器」(志道)

No38 (8月21日発行)

草戸千軒町遺跡第18次発掘調査概要(志田原・小都・福井)

資料紹介「草戸千軒町遺跡第18次調査区出土の弥生式土器」(福井)

隨想「出土木製品の保存」(松下)

No39 (9月18日発行)

草戸千軒町遺跡出土の硯(篠原)

隨想「中世の尾道」(松下)

草戸千軒町遺跡関係文献目録1975

資料紹介「備後国分寺跡採集の有茎尖頭器」(小都)

No40 (10月16日発行)

平安時代の土器生産I(志道)

草戸千軒出土墨書き木札類の紹介(志田原)

草戸千軒町遺跡出土墨書き木札類(×)訣文(一)

No41 (11月20日発行)

草戸千軒町遺跡第19次発掘調査概要(篠原・鹿見・志道)

草戸千軒町遺跡出土墨書き木札類(×)訣文(二)

No42 (12月18日発行)

吉州窯の鉄絵(東京国立博物館・長谷部樂爾氏)

草戸千軒出土の日本陶磁(松下)

草戸千軒町遺跡出土墨書き木札類(×)訣文(三)

No43 (1月22日発行)

草戸千軒町遺跡の井戸I(小都)

S E 1015井戸について(鹿見)

草戸千軒町遺跡出土墨書き木札類(×)訣文(四)

No44 (2月19日発行)

草戸千軒町遺跡第20次発掘調査概要(小都・福井・志田原)

No45 <4巻11号> (3月19日発行)

草戸千軒町遺跡と高位の海平面について(福井)

平安時代の土器生産II（志道）

d 講演

- 5月15日 草戸千軒町遺跡調査研究所第3回開所記念展公開講演会「遺跡・遺物の保存」（文化庁・坪井清足氏）於中国新聞福山文化会館（第35回草戸文化財教室と共に）
- 6月2日 神石郡三和町文化財保護委員会講義「文化財について」於三和町中央公民館（松下）
- 6月13日 草戸老人会講演「草戸千軒町遺跡について」於明王院（藤原）
- 8月8日 黒川古文化研究所夏期講座「埋もれた中世の町—草戸千軒と尾道—」於西宮市夙川公民館（松下）
- 8月27日 福山市納涼文化財講座「土馬と人形—草戸千軒にみる中世の習俗—」於福山市中央公民館（松下）
- 8月29日 尾道市文化財協会総会講演「草戸千軒と尾道」於浄土寺（松下）
- 9月4日 「草戸千軒町遺跡」三次展講演「埋もれた中世の町—草戸千軒町遺跡の発掘—」於三次市文化会館（松下）
- 11月7日 神石会講演「郷土の歴史について」於福山市立東小学校（松下）
- 12月22日 奈文研埋蔵文化財発掘技術者第2回特殊調査技術課程研修「草戸千軒町遺跡出土の陶磁器について」於奈文研埋蔵文化財センター（松下）
- 12月27日 昭和51年度福山管内採用教員研修会講演「歴史を掘る—草戸千軒町遺跡の調査から」於福山教育事務所（松下）
- 3月25日 尾道ロータリークラブ例会講演「中世の尾道について」於尾道ロイヤルホール

テル（松下）

e 展覧会出展

- 「草戸千軒町遺跡」三次展 於三次市文化会館（9月1日～5日）
「民具でたどる食生活史」展 於伊丹市立博物館（10月9日～11月7日）

f 遺物展示

- 「草戸千軒町遺跡調査研究所開所3周年記念展」於研究所講堂（5月12日～18日）
○「常設展示」於調査研究所展示室

III 草戸千軒町遺跡関係文献目録

- 松下正司「草戸千軒町遺跡—掘り出された中世の町」（『用と美』第15号；1976・5）
松下正司「埋もれた中世の町“草戸千軒”」（『せとうち』第60号；1976・9）
村上正名「幻の草戸千軒町」（『国税ひろしま』；1976・9）
福井万千「草戸千軒町遺跡の調査概要」（『広島県文化財ニュース』第71号；1976・10）
鹿見啓太郎「草戸千軒町遺跡第16・17次の調査」（1976年広島史学研究会大会プログラム・部会発表要旨；1976・10）
村上正名「陶磁の海道—草戸千軒町出土の中國陶磁が意味するもの=」（『福山市立博物館友の会だより』No.7；1977・3）
志田原重人「溝と櫻に囲まれた町“草戸千軒町”」（『文化財ふくやま』第12号；1977・3）
広島県教育委員会「草戸千軒町遺跡—第15～17次発掘調査概要—」（草戸千軒町遺跡調査研究所年報1975；1977・3）
松下正司「中世の人形—草戸千軒にみる俗信資料の一端—」（『考古論集』1977・3）

発掘調査組織(1977年12月現在)

第3期 草戸千軒町遺跡調査研究指導委員会(1977年7月～1979年6月)

委員長	松崎寿和	広島大学名誉教授	考古学
副委員長	村上正名	福山市立女子短期大学教授	考古学
	江本義理	東京国立文化財研究所保存科学部長	保存科学
	岡崎敬	九州大学教授	考古学
	金丸昭治	広島大学教授	土木工学
	河合正治	広島大学教授	歴史学
	後藤陽一	修道大学教授	歴史学
	近藤義郎	岡山大学教授	考古学
	沢村仁	九州芸術工科大学教授	建築史学
	潮見浩	広島大学助教授	考古学
	杉原莊介	明治大学教授	考古学
	田中琢	奈文研・埋蔵文化財センター研究指導部長	考古学
	豊田武	法政大学教授	歴史学
	長谷部樂爾	東京国立博物館東洋課長	古陶磁学

広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

(1) 所在地

広島県福山市花園町1丁目5-2(〒720) 電話0849-31-2513

(2) 調査組織

所長	松下正司(考古)	指導主事	藤原芳秀(保存科学)
主任主事	北川英雄(庶務)	指導主事	志田原重人(史料)
文化財保護主事	小都隆(考古)	調査補助員	志道和直(考古)
指導主事	福井万千(考古)	調査補助員	糸井崇雄(史料)
指導主事	鹿見啓太郎(考古)		

(3) 施設概要

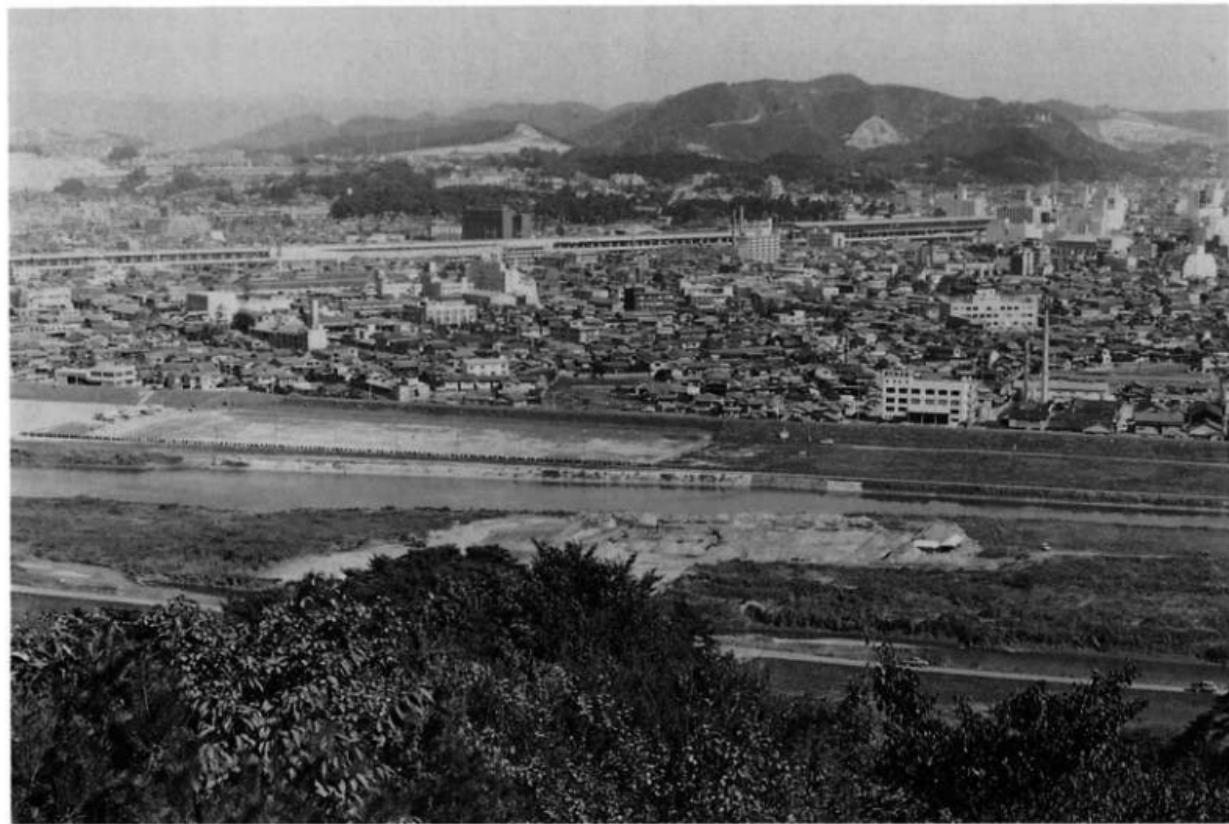
建物 鉄筋・木造モルタル2階建および軽量鉄骨平屋2棟
(広島県教育委員会所管)

建物延面積 1,229.42m²

土地面積 1,860.46m²

図 版

図版Ⅰ 草戸千軒町遺跡北半遠景



西方山上から

図版2 第18次調査区全景



▲南から ▼東から

図版3 第19次調査区全景



▲南から ▼東から

図版4 第20次調査区全景



▲南から ■南半・東から ▼北半・東から

図版 5 検出遺構 I



▲◀ SA1100柵 ▲▶ SA1110柵 ▼ SX1095門

図版 6 検出遺構II



▲SB1060建物 ▼SK990 土壙

図版 7 検出遺構III



▲SX999石敷 ▼SX1010石積

図版 8 検出遺構IV



▲SX1001石積 ▼SK1070墓壙

図版 9 検出遺構 V



▲SE1130・1131井戸 ▼SE977・980井戸

図版10 檢出遺構VI



SE975井戸 ▲遺物出土状況 ▼全景

図版II 検出遺構VII



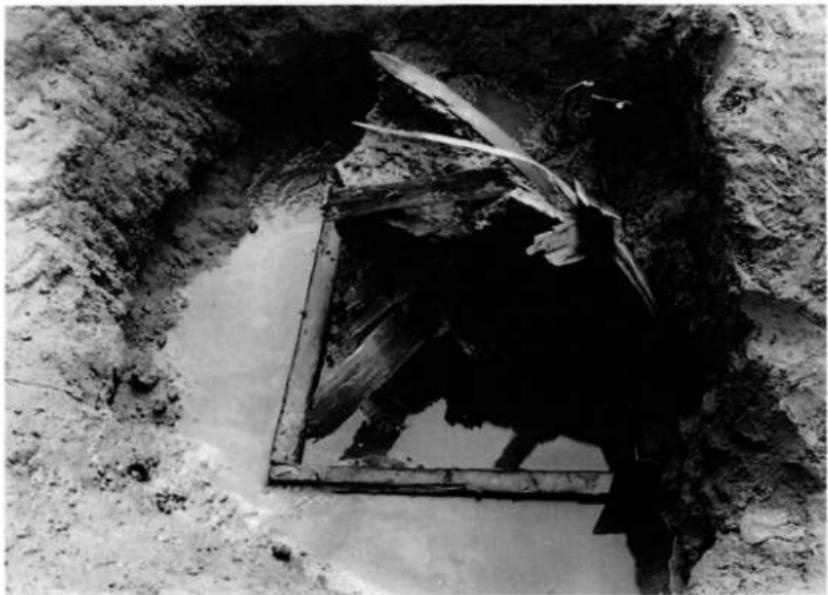
SE1055井戸 ▲遺物出土状況 ▼全景

図版12 検出遺構VII



▲SE1131井戸 ▼SE1015井戸

図版I3 検出遺構IX



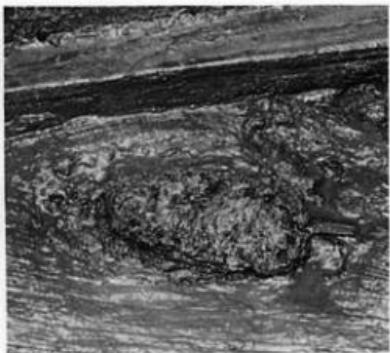
▲SE1050井戸 ▼SX976井戸状遺構

図版14 検出遺構X



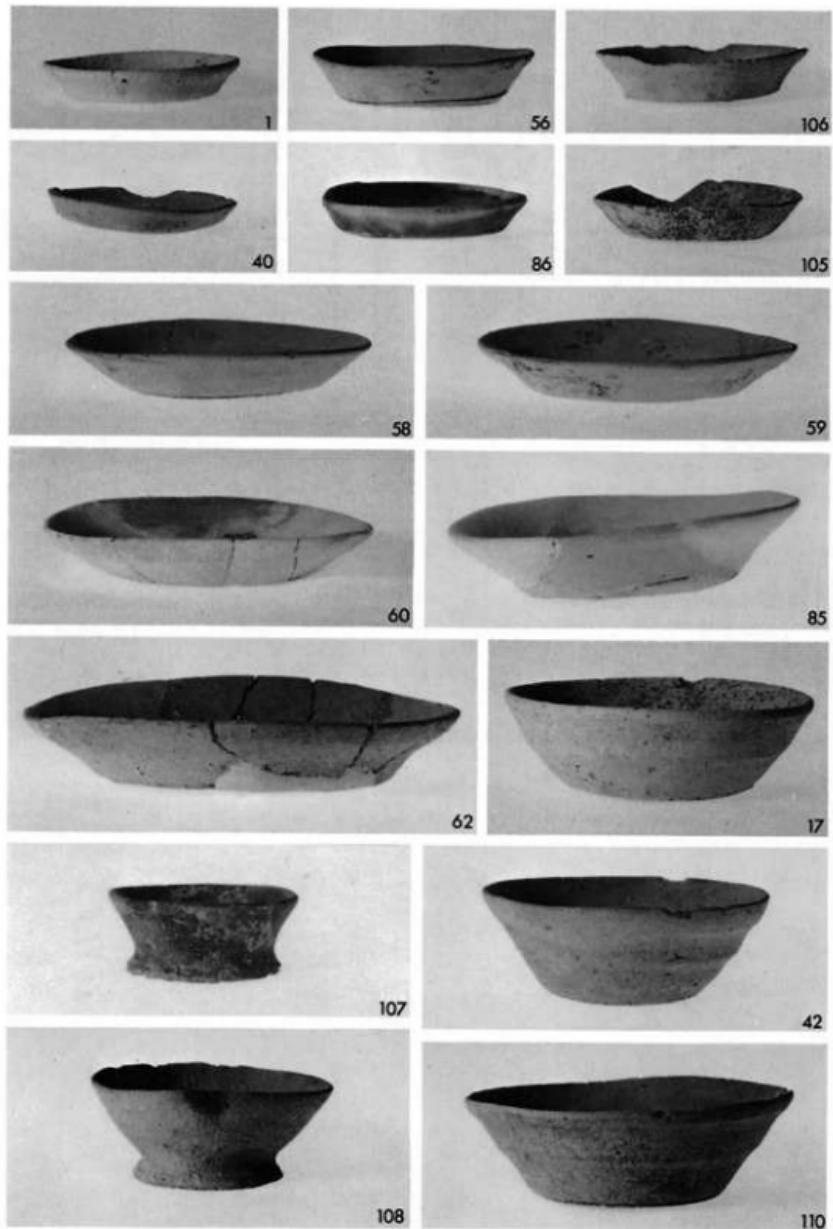
▲SE980井戸 ▼SE1090井戸

図版15 遺物出土状況



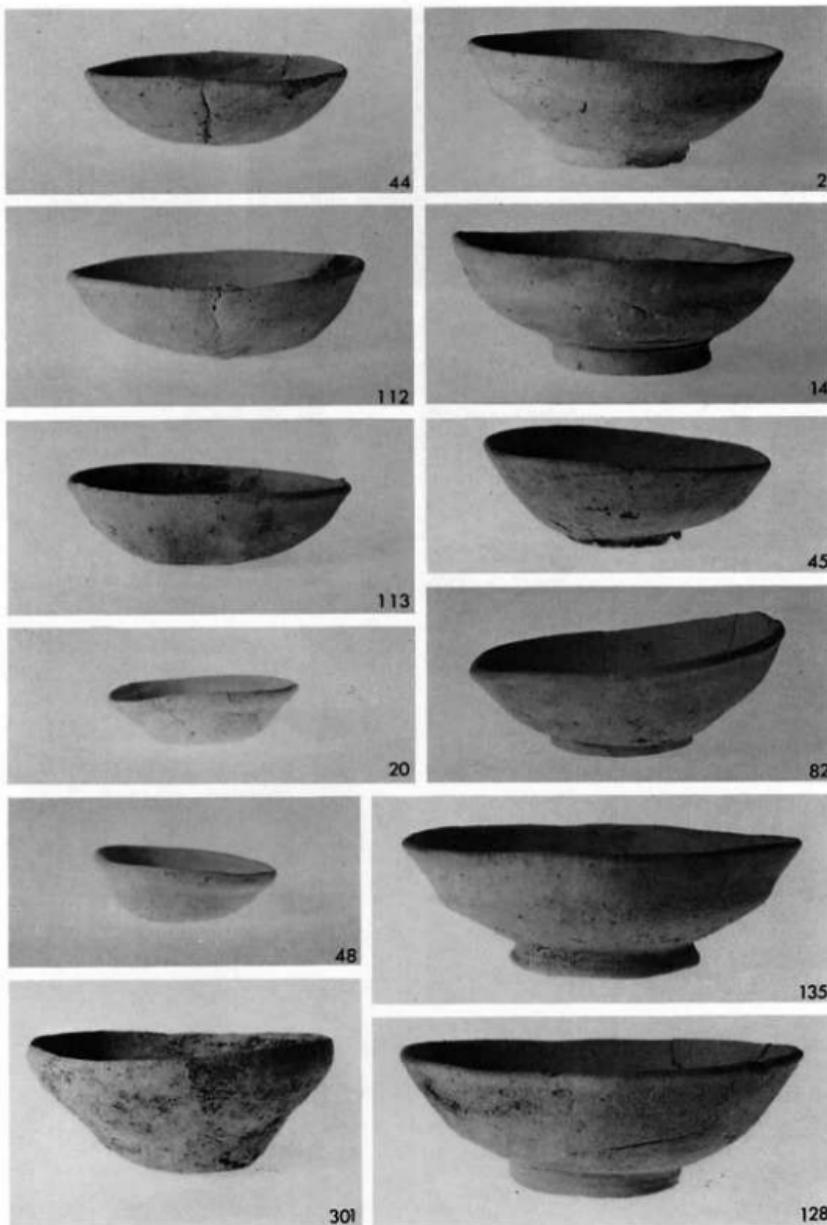
▲◀下駄 ▲▶わら草履 ■布・土師質土器 ▼備前焼・土師質土器

圖版16 土器類 I



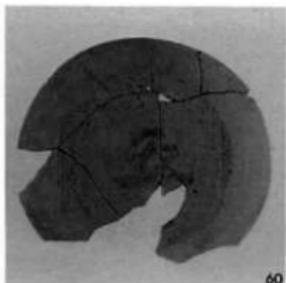
土師質土器 盆・杯<1:2>

図版17 土師類II



土師質土器 梱(1:2)

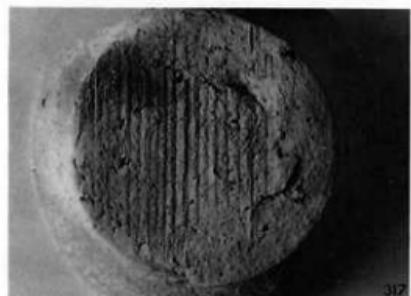
図版18 土器類III



60



108



317



45



318



319



315

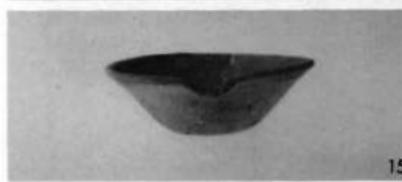
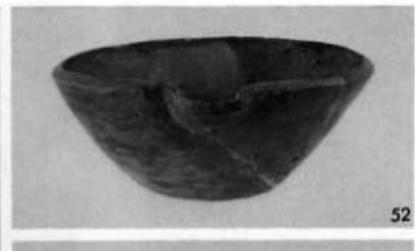


301

土師質土器の底部

60—墨書 316—モミカラ压痕 317—板压痕

図版19 土器類IV



—



瓦質土器<1:2>, すり鉢・こね鉢・土鍋, かまと(146)<1:6>



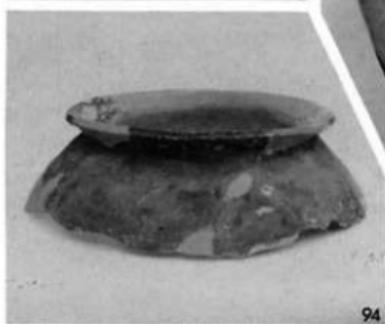
92



130



93



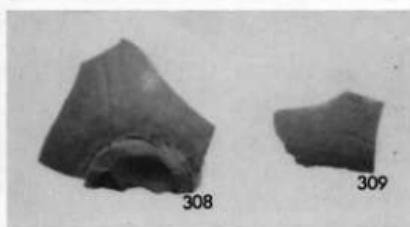
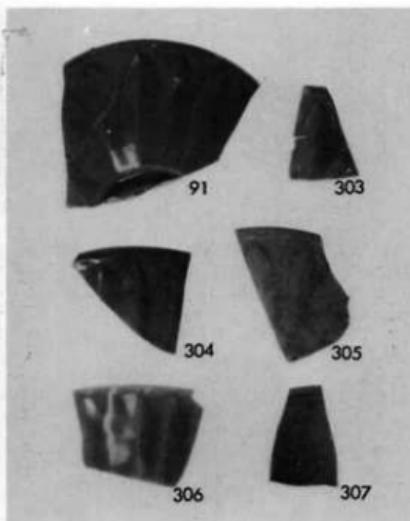
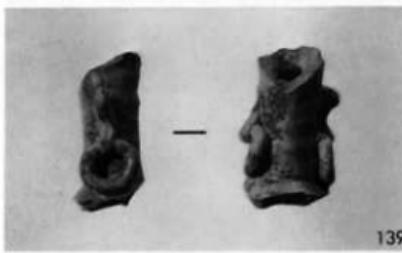
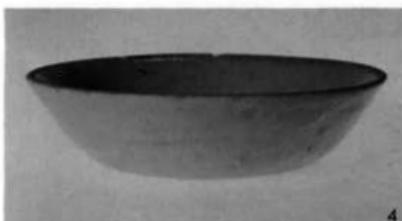
94



5

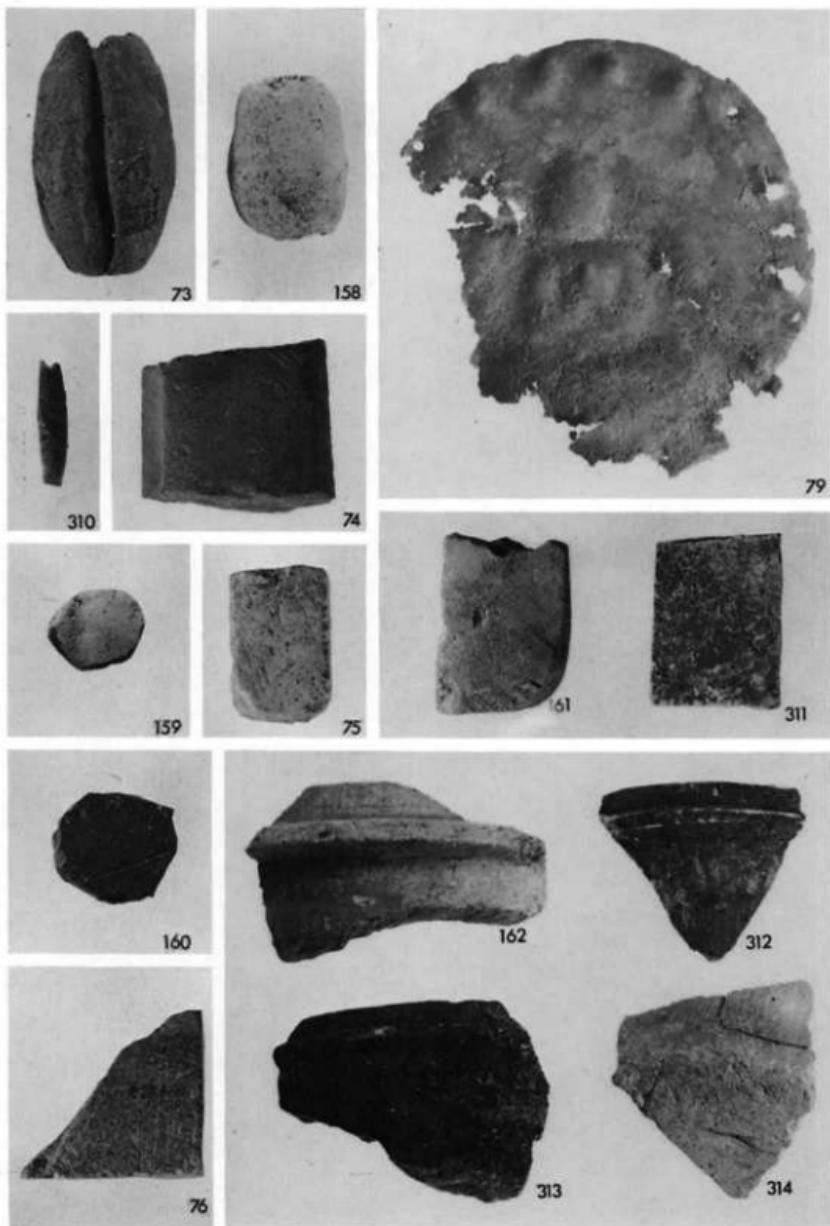
壺<1:8>, 壺<1:10>

図版21 土器類VI



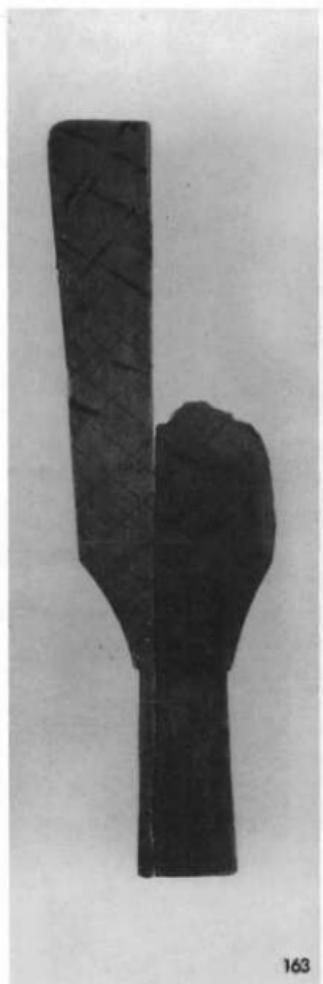
白磁(1:2), 青磁・瀬戸焼(1:3), 弥生土器(1:4)

圖版22 土製品類・金屬製品類・石製品類

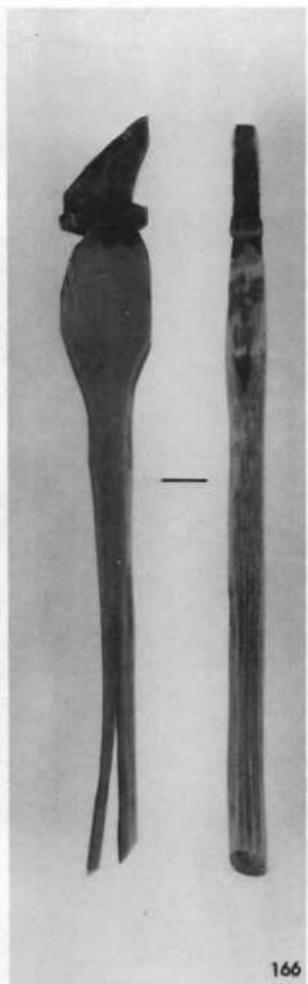


土錘・円盤状土製品 $(1:2)$ ・懸仏 $(1:1)$ ・砾石・石鍋 $(1:3)$

図版23 木製品類 I

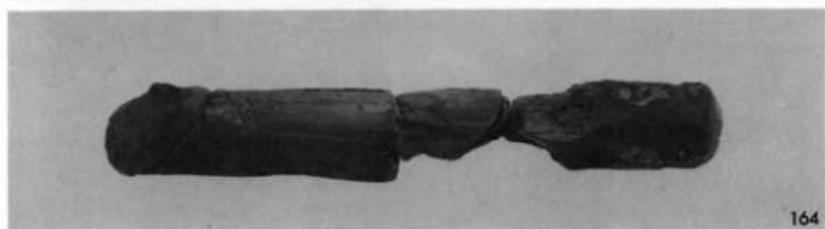


163



166

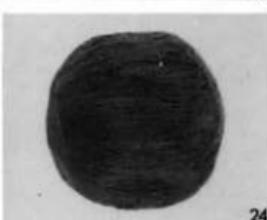
100



164

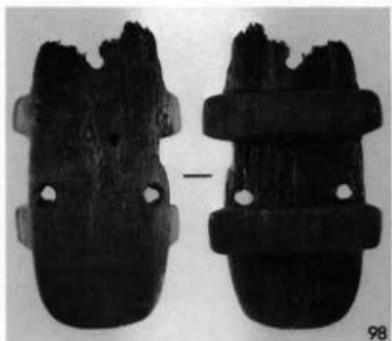
人形<1:1>, 羽子板状木製品・呪符・陽物<1:2>

図版24 木製品類II



つちのこ(26)玉状木製品(24)漆器<1:2>, 曲物・豎件<1:10>

図版25 木製品類III



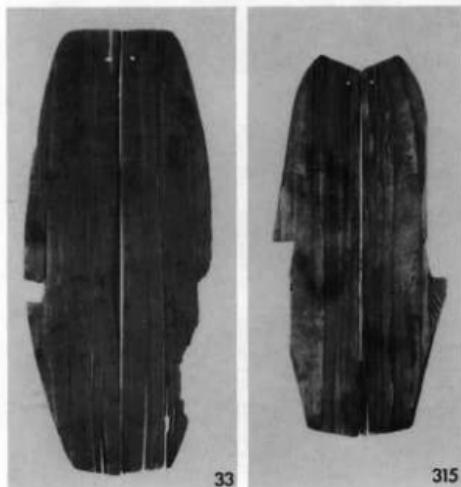
98



72



165



33

315



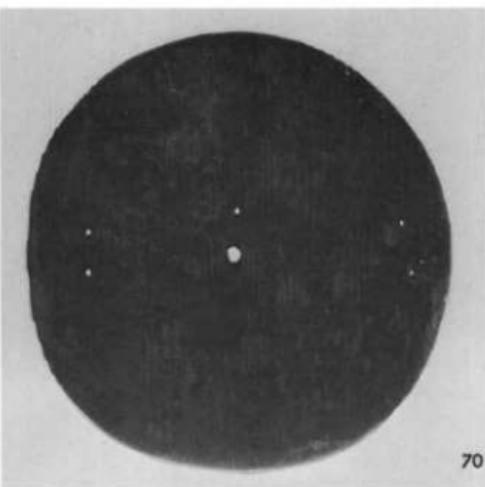
28

下駄、草履状木製品(1:3), わら草履(1:2)

図版26 木製品類IV・古銭



30



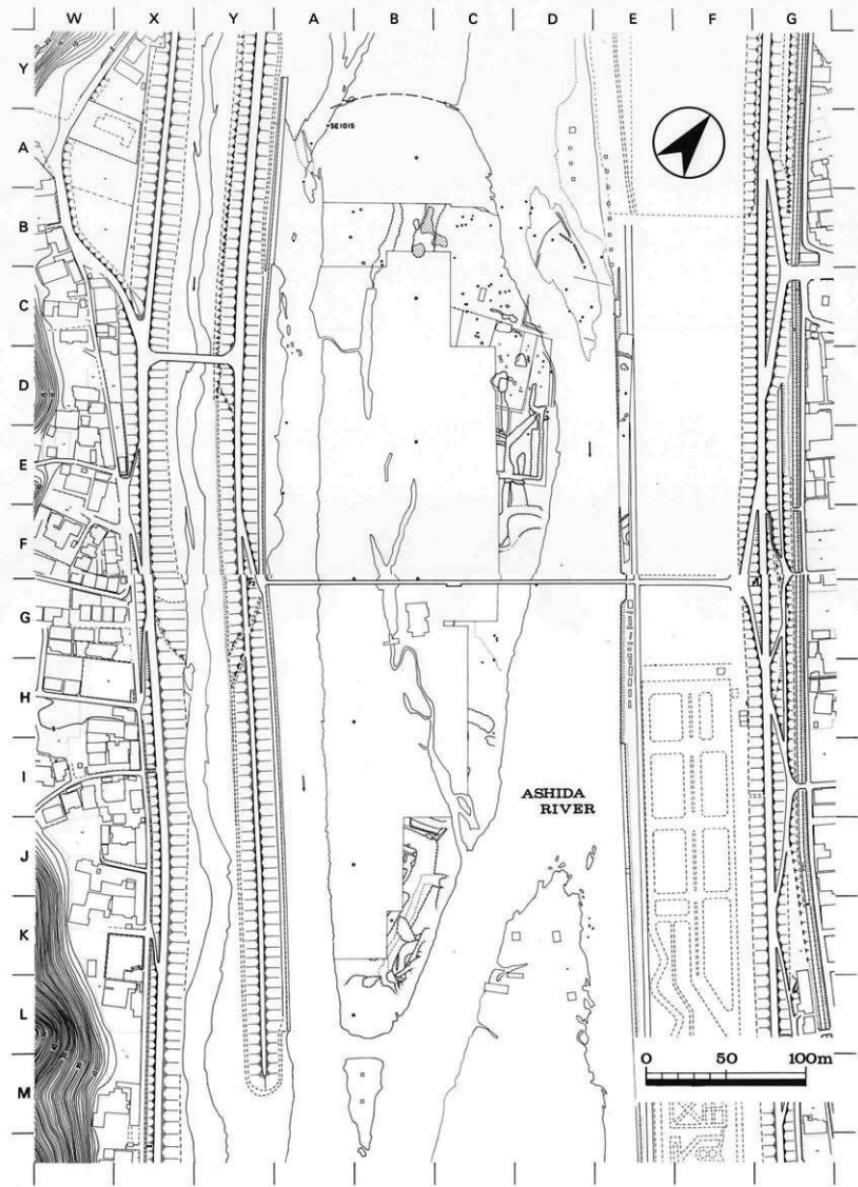
70



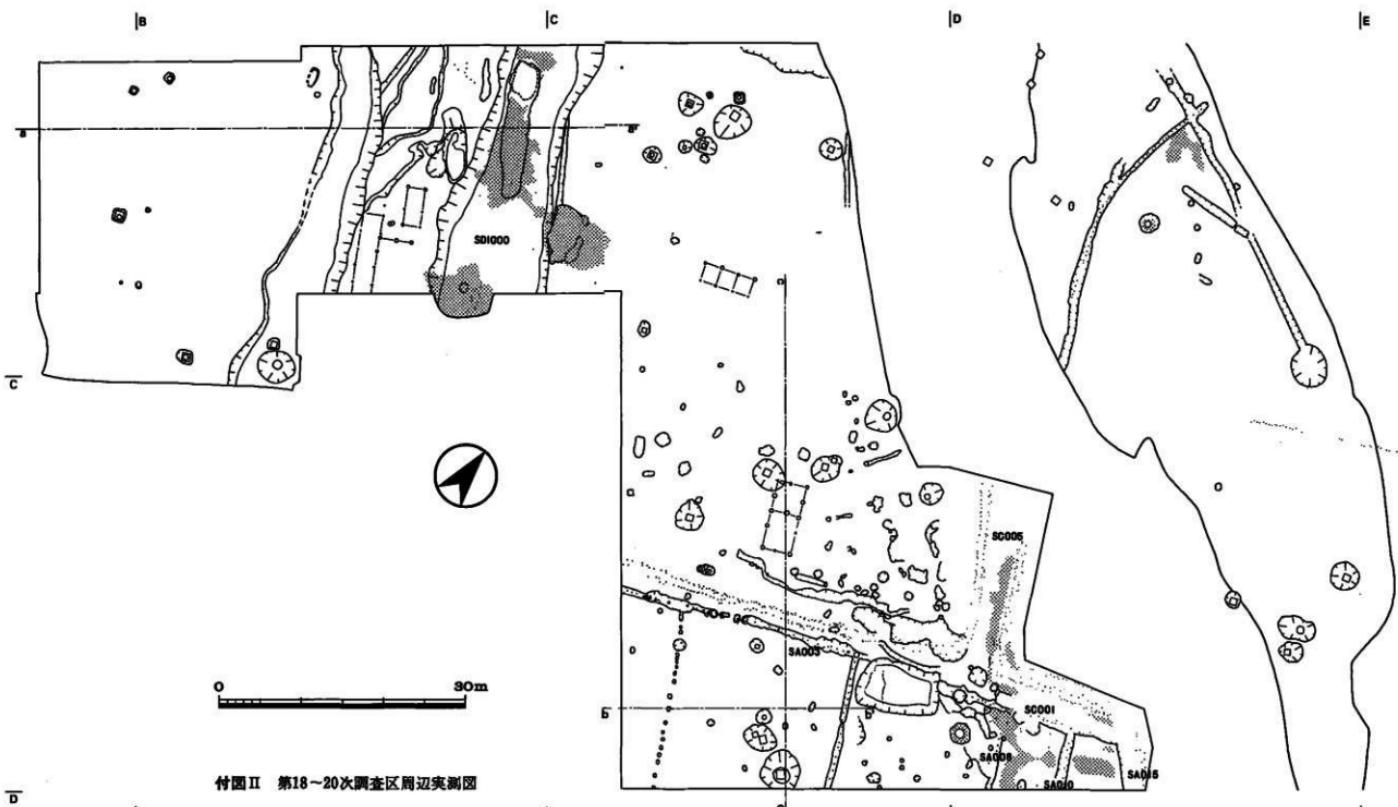
32

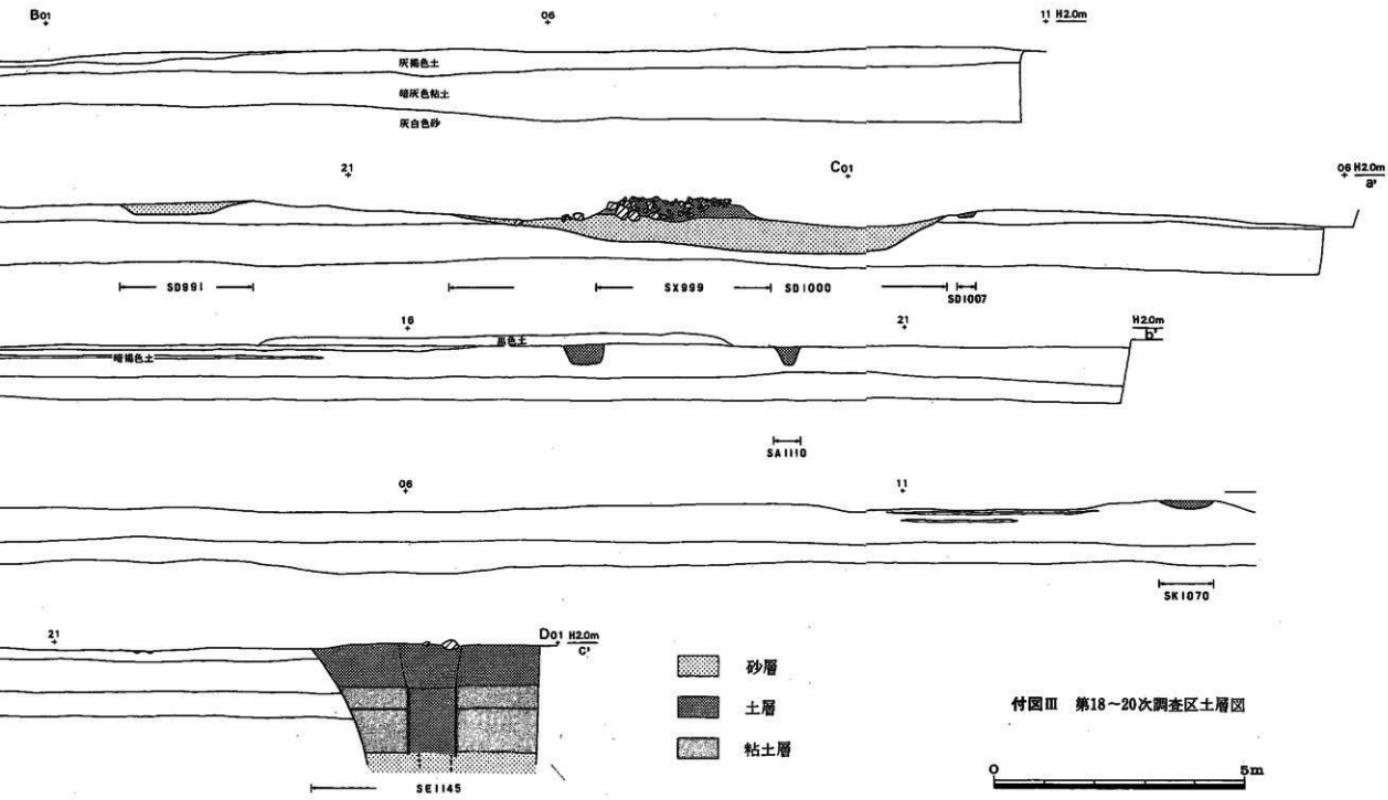


つち・蓋・へら(1:2), 古銭(1:1)

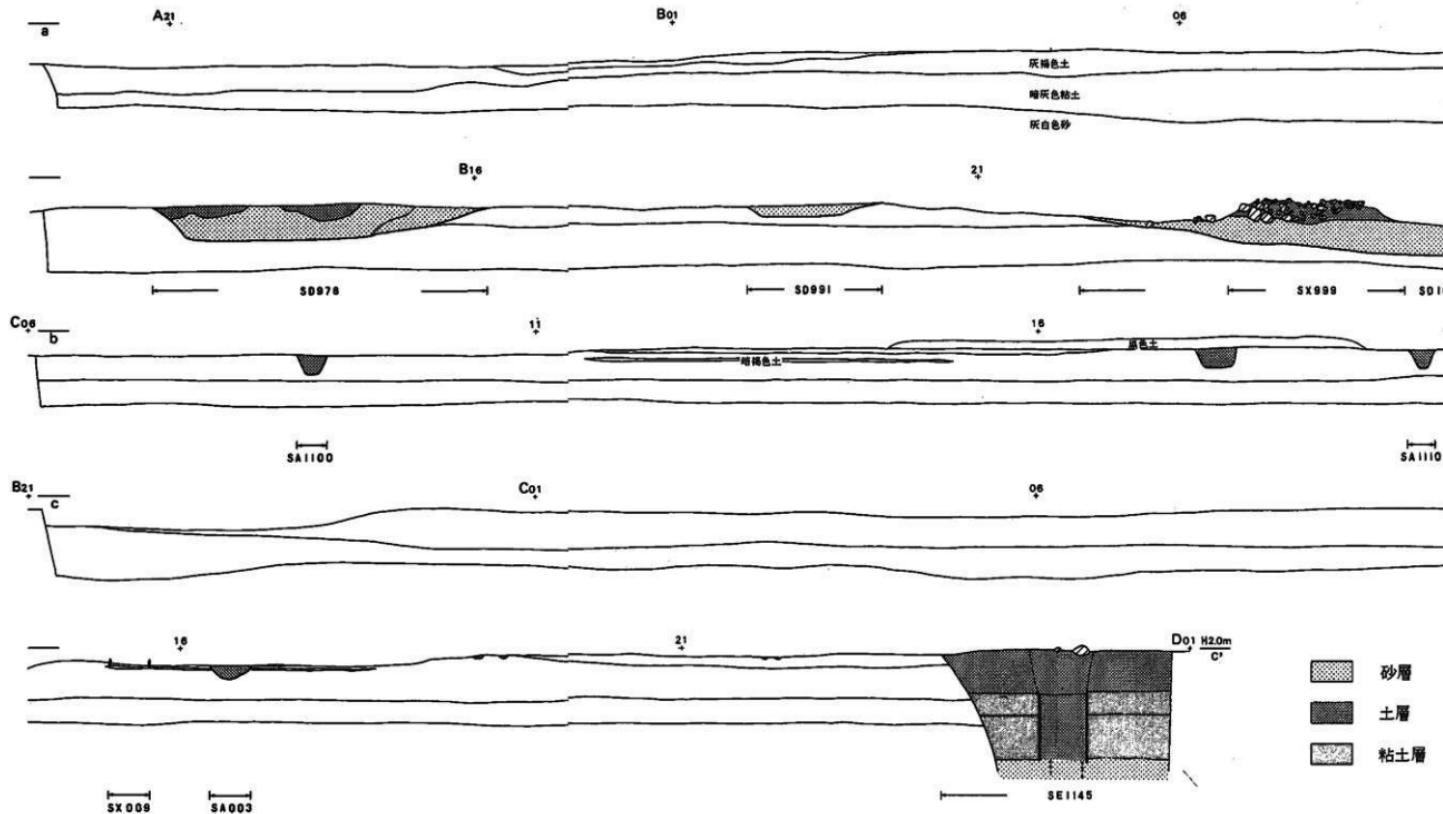


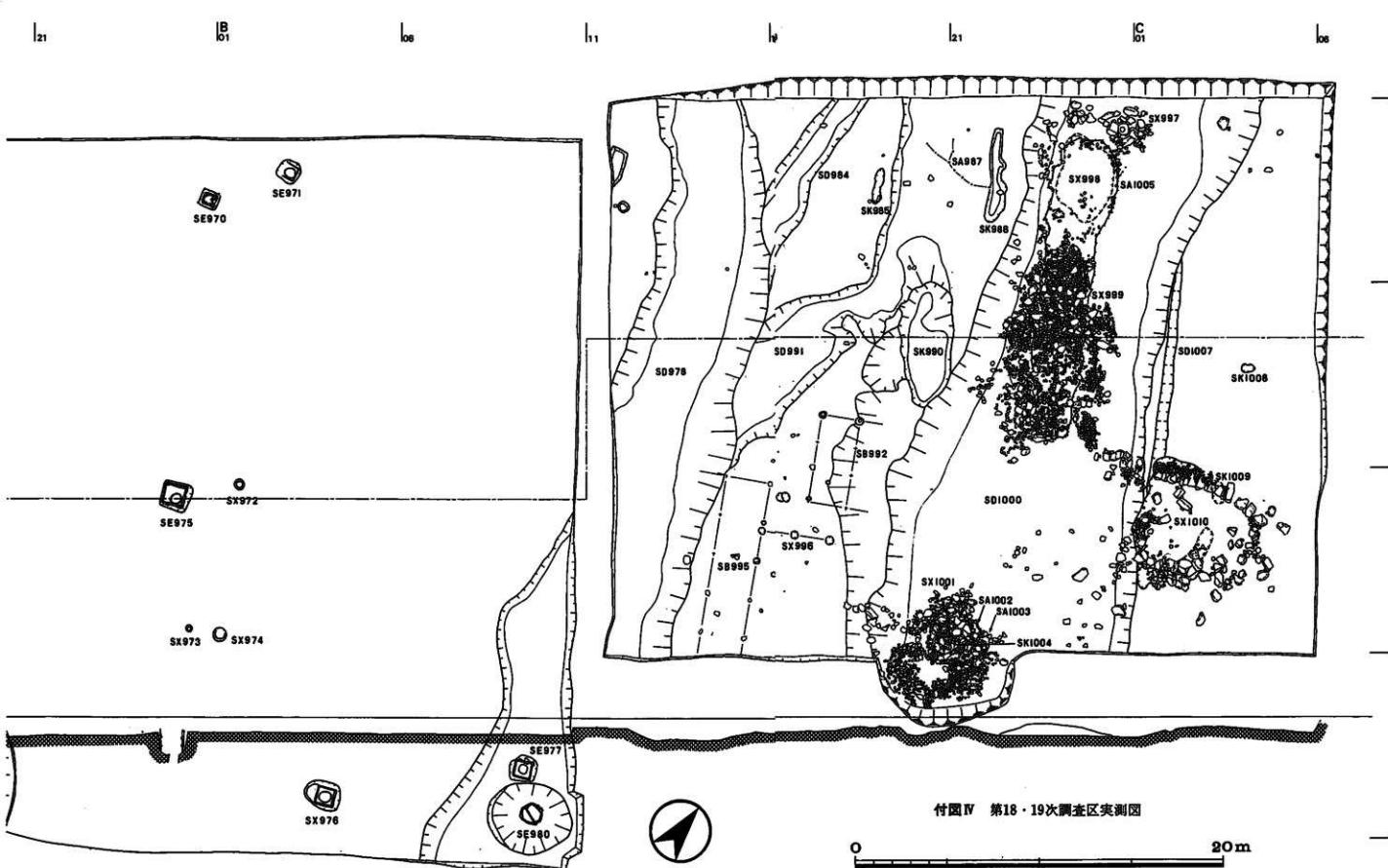
付図 I 草戸千軒町遺跡発掘経過・地区割図





付図III 第18~20次調査区土層図





付図IV 第18・19次調査区実測図

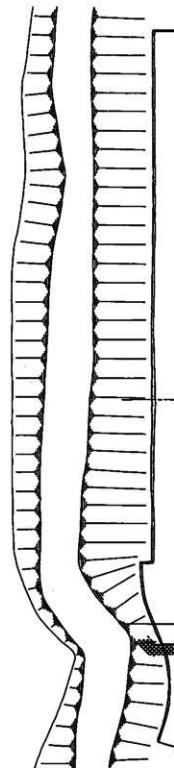
IA

I₂₁

IB

I₆I₁I₆I₂₁B₀₆

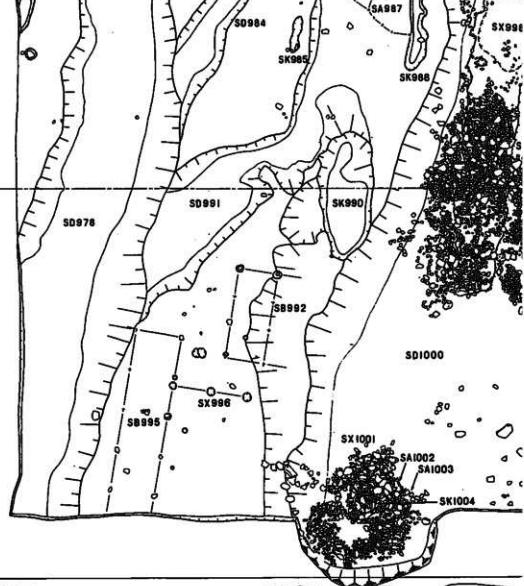
II

I₁₆I₂₁C₀₁

SE970
SE971

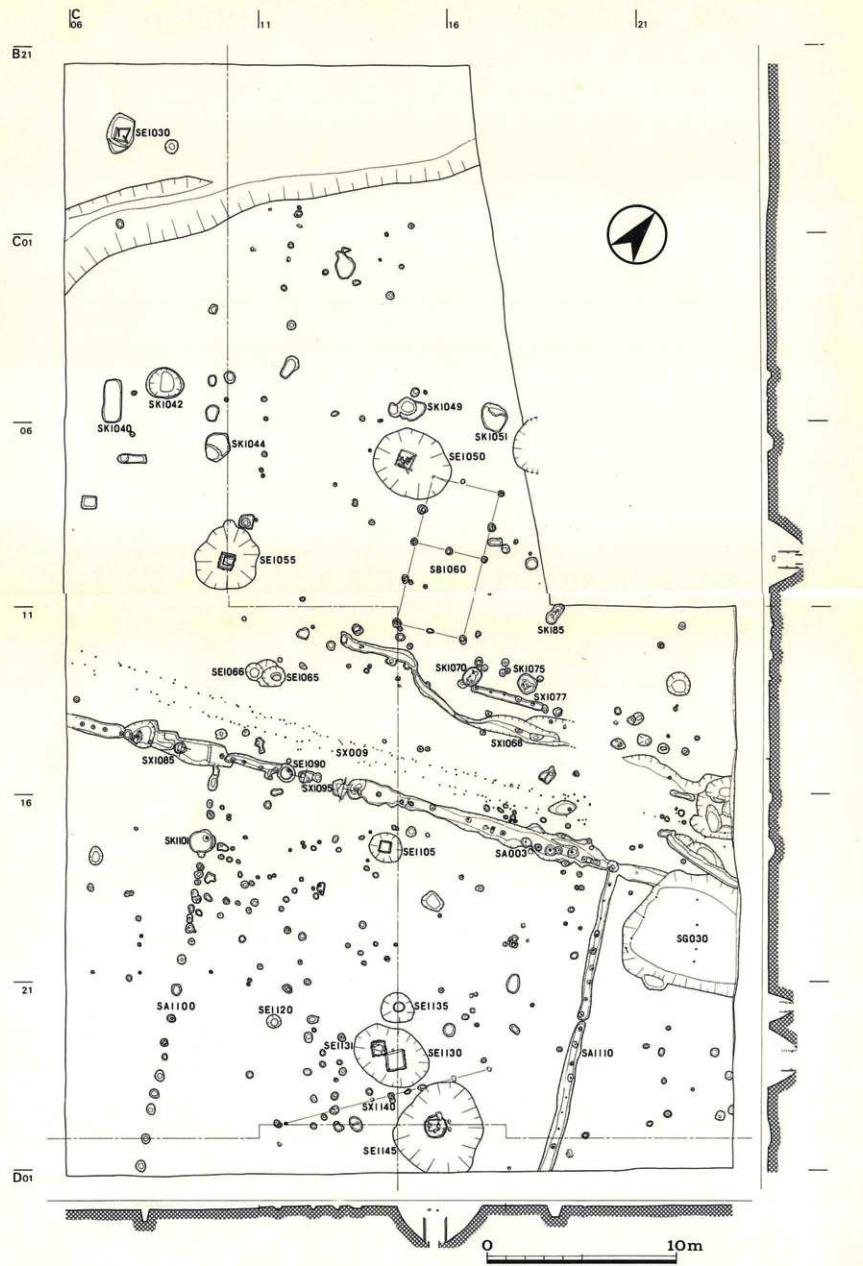
SX972
SX973
SX974
SX975

SE976
SE977
SE980



付図IV 第18・19次調査区

0



付図 V 第20次調査区実測図

草戸千軒町遺跡

—第18～20次発掘調査概要—

1977年12月26日 印刷発行

編集 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所

発行 広島県教育委員会

印刷 アート印刷株式会社